

多文化共学短期〔受入〕留学プログラム 2018 年度実施報告書

アジア研究教育ユニット (KUASU)
国際高等教育院 (ILAS)

目次

はじめに	iii
1 多文化共学短期留学プログラム.....	1
1.1 概要.....	1
1.2 多文化共学短期留学プログラム準備.....	1
1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講.....	1
1.2.2 連絡体制と情報共有.....	3
2 実施状況	4
2.1 経済支援について.....	4
2.2 宿舎について.....	5
3 展望	5
第一部	
1 京都サマープログラム 2018（東アジア+ドイツ）	8
1.1 設立の経緯と目的.....	8
1.2 プログラムの概要.....	9
1.2.1 プログラム内容.....	9
1.2.2 実施体制・教員確保と京都大学学生アシスタントの関与.....	10
1.2.3 カリキュラムの特徴.....	10
1.2.4 使用言語.....	11
1.2.5 成績評価の整備.....	11
1.3 総括及び今後の展望.....	11
2 実施体制	13
3 参加学生一覧	14
4 研修日程	16
5 参加学生報告	20
第二部	
1 アセアン諸大学学生のための「京都サマープログラム二〇一八」	48
1.1 設立の経緯と目的.....	48

1.2	「京都サマープログラム二〇一八」概要.....	49
1.2.1	プログラム内容.....	49
1.2.2	実施体制と教員確保.....	50
1.2.3	京都大学学生アシスタント（チューター）.....	51
1.2.4	カリキュラムの特徴.....	53
1.2.5	実施時期および期間.....	54
1.3	今後の課題.....	55
2	実施体制	56
3	参加学生一覧	57
4	研修日程	58
4.1	日本語Ⅰ	64
4.2	日本語Ⅱ	66
4.3	日本語Ⅲ.....	68
4.4	書道.....	70
4.5	科学講義 “Human Mind Viewed from the Study of Chimpanzees”	72
4.6	科学講義 “Asian Advanced Agricultural Technologies (AAA Tech) for 9 Billion People’ s Food Production and Environmental Conservation”	73
4.7	人文学講義 “The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature”	74
4.8	科学講義 “High Economic Growth and Minamata Disease:The fight for certificates officially acknowledging victims of methylmercury poisoning”	75
4.9	人文学講義「学校教育に見る日本文化の諸相」	76
4.10	人文学講義「日本語のウチとソト」	77
4.11	学外研修.....	78
4.12	共同発表.....	79
5	参加学生報告	80

はじめに

大学の国際化に向けた取り組みは、近年、急速に広がっています。京都大学は、海外の大学との連携強化、海外拠点の整備、国際共同の教育プログラムの開発など、研究・教育活動に関するさまざまな課題に取り組んでおり、国際貢献および国際交流において一定の成果をあげてきました。

2018 年の夏、京都大学アジア研究教育ユニットが主体となり、アセアン諸大学学生と東アジア+ドイツ諸大学学生の受け入れ事業である「京都サマープログラム 2018」を実施しました。本報告書はこの事業の実施内容等についてまとめたものです。国際共同教育プログラムのさらなる拡充が期待されるなか、本報告書は国際交流事業に携わる方々にとって貴重な参考資料になるかと思えます。



アセアン諸大学学生の受け入れプログラムは 5 度目、東アジア諸大学（もともとは北京大学）の受け入れプログラムは 7 度目を迎えています。アセアン諸大学と東アジア諸大学の受け入れのプログラムは、別々のプログラムとして実施していました。2016 年度から新たな試みとして、アセアンと東アジアのプログラムの一部を合同で実施してきました。両プログラムが融合したことで、プログラムの質が向上しただけでなく、学生たちの交流も一層深まりました。さらに、今年度から東アジア諸大学のプログラムにハイデルベルグ大学（ドイツ）も加わることになり、本プログラムはより多様な学生が集う国際交流の場となっています。

今回は、アセアン諸大学からは、インドネシア 5 名、シンガポール 3 名、タイ 6 名、ベトナム 5 名の計 19 名が、東アジア+ドイツからは、中国 9 名、台湾 3 名、香港 7 名、韓国 4 名、ドイツ 2 名の計 25 名が参加しました。京都大学の短期交流学生としての学生証を発行することで、一時的ではありますが、参加学生が京都大学の学生としての生活を経験できるよう努めました。今後、本プログラムの参加学生たちが将来の国際交流の担い手として活躍してくれることを期待しています。

本年度のプログラムも無事に終わることができました。プログラムの実施にあたっては各方面の方々のご尽力がありました。国際高等教育院の諸先生方、アジア研究教育ユニットの先生方、京都大学各部局の諸先生、国際高等教育院教務掛、教育推進・学生支援部国際教育交流課交流支援掛とアジア研究教育ユニットの事務担当者、京都市総合企画局、滋賀県立大学の先生方、連携諸大学の教職員の方々、短期交流学生の講義や日本語授業を担当していただいた講師の方々、また、サポート役を務めた京都大学の学生、院生たち。そして今年より派遣招聘プログラムをご担当くださっている西島薫助教。こうした方達のご支援ご協力なしには、今回のプログラムは成り立ちませんでした。ここに心より感謝したいと思います。

2019（平成 31）年 3 月

京都大学アジア研究教育ユニット
ユニット長 落合 恵美子

1 多文化共学短期留学プログラム

1.1 概要

多文化共学短期留学プログラムは、京都大学アジア研究教育ユニット（以下、KUASU）と国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター（以下、日・日センター）が主体となって展開しているプログラムである。東アジアおよび東南アジア諸国連合におけるトップクラスの諸大学と京都大学との間で短期学生派遣／受入をおこなっている。本報告書は、そのうちの受入プログラムについて報告するものである。

KUASU は、平成 24 年度から開始された文部科学省による大学の世界展開力強化事業のプロジェクト（『開かれた ASEAN+6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成）を推進する母体となってきた。KUASU を構成するのは、文学、経済学、農学、教育学、アジア・アフリカ地域研究の各研究科と、国際高等教育院、東南アジア地域研究研究所、人文科学研究所、経営管理研究部である。

これまで本プログラムは SEND プログラム（*Student Exchange - Nippon Discovery Program*）と呼ばれてきた。多文化共学短期留学プログラムは、SEND プログラムと同様、日本文化、日本社会を「外」の視点から捉えなおすことによって、アジア（および世界各国）と日本とのあいだの相互理解の促進と、互いに共通する課題の発見・解決を目指すことを主眼としている。

平成 30 年度短期受入プログラムでは、以下の表 1 に挙げた対象国／地域からの短期留学生（＝「短期交流学生」）の受入をおこなった。本報告書は、このプログラムの概要・教育的実践・課題について報告する。

表 1 本報告書で扱う短期受入プログラム

形態	プログラム名称（実施期間）	対象の国／地域
受入	京都サマープログラム 2018 （平成 30 年 7 月 30 日 ～ 8 月 10 日）	東アジア+ドイツ：中国、韓国、台湾、香港、ドイツ アセアン：インドネシア、タイ、ベトナム、シンガポール

1.2 多文化共学短期留学プログラム準備

1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講

本プログラムに参加する京都大学学生は、プログラム内で日本語・日本文化についての解説や考察を通じて多文化共生に関する理解を深める。派遣プログラムでは、京都大学学生が主体となって派遣先大学で日本語・日本文化についての解説・考察をおこなう。一方、受入プログラムでは、短期交流学生（＝受入留学生）が主体となって京都大学で日本語・日本文化の解説・考察をおこなう。派遣／受入のどちらにおいても、日本人学生と外国人学生の共学が基盤となる。その実践能力を養成するため、平成 25 年度から日・日センターの教員が

中心となってリレー式に担当する「日本語・日本文化演習」（全学共通科目：キャリア群）が毎年度開講されている。その概要は、以下の表 2 にしめすシラバスの通りである。

表 2 平成 30 年度「日本語・日本文化演習」シラバス

授業科目 名、英訳	日本語・日本文化演習 Japanese Language & Culture	担当者 所属 職名・氏名		前期： 国際高等教育院 教授 河合 淳子 准教授 家本 太郎	後期： 国際高等教育院 教授 河合 淳子 教授 パリハワダナ ルチラ 教授 長山 浩章
群	キャリア群	分野（分類）	その他キャリア形成	使用言語	日本語／英語
単位数	1 単位	週コマ数	1 コマ	授業形態	演習
開講年度	2018 前期／後期	配当学年	全回生	対象学生	全学向
曜日時限	火 2／水 4	教室	吉田国際交流会館 第 5／3 講義室・共東 21		
授業の概要・目的					
本授業では、日本語や日本文化を紹介する経験とその準備を通して、日本人学生と留学生とが共に、日本語、日本文化ならびに自分自身が身につけてきた言語や文化の特徴を再発見することを目指す。そして、その過程を通じて、グローバルな視野に立った物の見方・考え方を養うことを目的とする。					
到達目標					
・ 日本語、日本文化ならびに自分自身が身につけてきた言語、文化を捉える多様な視点を理解すること。 ・ 本講義で学んだことを生かして、まずは授業内で、日本語や日本文化を実際に紹介する経験をすること。					
授業計画と内容					
多様な文化を有する人たちとの交流の中で、自国文化を多面的に理解し紹介できることが要請される場面は多い。日本人であっても日本語や日本文化について深い理解をもって解説するためには、言語・文化に意識的に向き合わなければならない。本授業は、日本語や日本文化を意識的に捉え、深い理解に立って他者と見方や考え方を共有できるよう、講義・実習・討議を交えて進めていく。 講義担当（予定） 1 回目 オリエンテーション ＜講義担当：河合、家本（前期）、ルチラ、長山＞ 2 回目－7 回目＜講義担当：家本（前期）、ルチラ（後期）＞ 日本語の特徴－（講義） 言語の機能と文化－（講義） 日本語、日本文化、日本社会に関するプレゼンテーション準備及び討議（実習） 8 回目－13 回目 ＜講義担当：河合（前期）、長山（後期）＞ 世界の中の日本文化、日本社会の特徴－何をどう伝えるか－（講義） 日本文化、日本社会に関するプレゼンテーション準備及び討議（実習） 14 回目 ＜講義担当：ルチラ、長山、河合、家本（前期）＞ プレゼンテーション					
教科書／参考書等					
プリントを配布する／授業中に紹介する					
授業外学習（予習・復習）等					
実習、プレゼンテーションの準備として、段階を追って随時課題が出される。各自、積極的に準備を行うことが求められる。					
その他（オフィスアワー等）					
海外留学を考える学生を優先するが、これまでとは異なる新しい視点で日本語・日本文化を考えてみようとする学生や留学生の受講も歓迎する。 大学間交流協定による短期留学プログラム（東アジア）、ASEAN 短期留学プログラム参加のための推奨科目となっている。					

1.2.2 連絡体制と情報共有

プログラムの実施前および実施中に、以下の図 1 にしめすような連絡体制をとった（図中の矢印は情報の往来をあらわしており、太線は教職員が関わる連絡、細線は学生どうし、あるいは学生からの連絡をあらわす）。

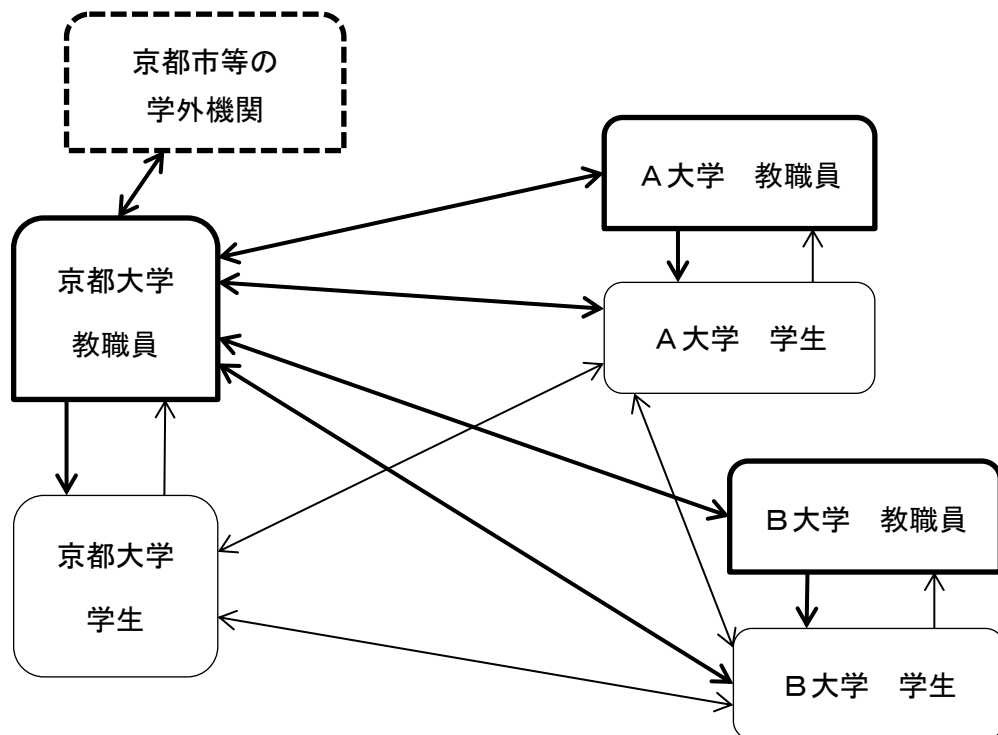


図 1 連絡体制の概要

共有した情報の内容は以下の通りである。

教職員－教職員間： プログラムの運営に関する教務・事務的な情報

教職員－学生間： プログラム内容に関する教務・事務的情報

学生－学生間： プログラム内容等についての様々な情報

京都府等の学外機関－教職員： 学外研修に関する教務・事務的情報

情報共有のためのツールとしては、以下のものがあげられる。

電話： 教職員・学生を問わず、幅広く使用

Eメール： おもに教職員－教職員、教職員－学生間で使用

クラウドストレージサービス： ファイル共有のために幅広く利用

LINE： おもに学生－学生間で使用（一部、教職員－学生間でも使用）

他のSNS： おもに学生－学生間で使用

学生間の情報共有の環（図 1 参照）の形成に適している

また、緊急連絡網を作成し、教職員間での危機管理体制の整備に努めた。緊急連絡網には、i) プログラムの日程表、ii) 参加者の利用フライト情報、iii) 参加者名のリスト、iv) 京都大学を含む各大学の緊急時連絡窓口、v) 参加者の宿泊施設情報、vi) 大使館・領事館情報等を載せた。

2 実施状況

2.1 経済支援について

本節では、京都サマープログラム 2018 における費用補助状況と学生参加状況の概要について述べる。以下の二項目によって短期交流学生の修学が費用面から支援された。

①機能強化経費「世界最高峰の現代アジア・日本研究の教育研究拠点形成－京都大学アジア研究クラスターと国際連携大学院プログラム－」による基幹経費 (京都大学)

②平成 30 年度ワイルド&ワイズ共学教育受入れプログラム事業 (京都大学)

以下の表 3 では、東アジア諸大学とアセアン諸大学の 2 つについて、基本情報と、費目別の費用補助該当者数（学内／学外研修費・渡航費・宿泊費・チューター費）、各項目の合計人数を、上記 ①～② による費用補助の該当是非と合わせて示す。

表 3 京都サマープログラム 2018 の経済支援概要

	東アジア+ドイツ 中国、韓国、台湾、香港、 ドイツ	アセアン インドネシア、タイ、 ベトナム、シンガポール	計
実施期間	平成 30 年 7 月 30 ～ 8 月 10 日		
参加学生数	25 名	19 名	44 名
学内研修費補助	① 25 名	① 19 名	44 名
学外研修費補助	① 25 名	① 19 名	44 名
渡航費補助	0 名	0 名	0 名
宿泊費補助	② 25 名	② 19 名	44 名
チューター費	② (チューター数：18 名)	① (チューター数：18 名)	

2.2 宿舎について

今回、東アジア+ドイツプログラムは「旅館 お宿いし長」、アセアンプログラムは「旅館 さわや本店」を宿舎とした。いずれもいわゆる修学旅行旅館と呼ばれる旅館であり、京都大学へは公共交通機関で15分以内に位置している。畳敷きで3名以上（一部2名）の相部屋であったが、学生たちの満足度は高かった。例年、夏の京都における宿泊場所の確保は、困難を極めていたが、早めに旅館との交渉を始めれば比較的楽に人数分の部屋を確保することができた。個室を希望する学生への対応は課題として残るが、宿泊場所確保の有力な手段といえるだろう。

3 展望

各プログラム固有の展望については、各章に譲るが、東アジア+ドイツ、アセアンプログラム共通の観点から、他地域への拡大及び運営体制の充実について展望を述べておきたい。現在、東アジア+ドイツ、アセアンの両プログラムは、それぞれの個性を生かしつつ、両者に共通する部分については協力して運営している。共通部分としては、例えば、英語を教授言語とした講義群、日本語授業、京大紹介講義（日本語、英語、中国語の3か国語で提供）、学外研修などが挙げられ、また歓送会も共同で開催している。多様な背景を持つ学生が一同に会して学ぶ機会を提供できており、京都大学学生に対する教育的効果も大きい。今後この方針を継続したい。そして段階を踏んで、他地域にも募集対象を広げていく。

今後は東アジア+ドイツとアセアンのプログラムのより密接な連携が必要である。東アジア+ドイツの学生は基本的に日本語初級を受講する。しかし、日本語学習経験のある東アジア+ドイツの学生は、アセアン学生向けに提供されている日本語中級Ⅰ、日本語中級Ⅱ、日本語上級を受講する場合がある。日本語初級と日本語中級の授業内容の間には相当程度のレベルの差があり、日本語初級では簡単すぎるものの日本語中級の授業にはついていけない学生が複数人いた。今後は、東アジア+ドイツとアセアンの両プログラムがより密接に連携し、様々なレベルの学生に対応する必要がある。

また今後を展望するには体制の強化が必要である。そのような問題意識から、今年度はプログラム実施に先立ち、国際教育交流課及び担当教員の所属する国際高等教育院で話し合いを重ね、一名の派遣職員が本プログラムの専属として配置されることになった。今後、経験を蓄積し、継続的なプログラム運営が可能となる体制を一層強化する必要がある。またアセアンプログラムは京都大学アジア研究教育ユニット（KUASU）という時限付のユニットを中心として運営されている。学部生を受け入れるこうしたプログラムは、京都大学全体を見渡してもユニークなものであり、参加者、協力教員の評価も高い。中・長期的実施を可能にする運営体制の構築が求められる。

また、学外組織との連携は、両プログラムにとって重要な要素である。今年度は、京都市役所および滋賀県立大学教員の協力を得た。今後も連携の下で、学外組織と本学双方に資する研修内容の開発を行っていく。

第 一 部
京都サマープログラム 2018
(東アジア+ドイツ)

《主催》



京都大学
国際高等教育院

《共催》



KYOTO UNIVERSITY ASIAN STUDIES UNIT
京都大学アジア研究教育ユニット

《共催》

京都市

1 京都サマープログラム 2018（東アジア+ドイツ）

1.1 設立の経緯と目的

今年度（2018年度）、本プログラムは七回目の実施を迎えた。第一回は、2012年8月中旬に北京大学の学生15名を受け入れたことに遡る。これまで、本プログラムは一貫して北京大学で最も人気がある短期留学プログラムの一つとして位置づけられてきた。こうした実績を生かし、より充実したプログラムを実現すべく、昨年度から募集先を拡大し、北京大学と同じく大学間学生交流協定校である延世大学（韓国）、国立台湾大学、香港中文大学の計4校を対象大学とした。今年度から始めて、東アジアから全世界まで広げて、ドイツのハイデルベルク大学に対象校とした。規模については25名を受け入れることとなった。第一回から第六回の今年度まで、合計135名が本プログラムに参加したことになる。

2012年に北京大学を対象にした第一回プログラムを設立した当初、担当者らには次の問題意識があった。「日本と中国は、歴史的・文化的に深く交流してきた大切な隣国であるとともに、経済的にも補完し合う相互依存度の高い関係を築いてきた。しかし、近年は政治的な影響から双方の国民感情は悪化の一途を辿っているといえる。・・・（中略）・・・その根底には日中の人的な相互交流が十分に行われず、互いの差異への理解の乏しさ、対話の基礎となる、国を超えた個々人の信頼関係の希薄さが見え隠れする。一方で、隣国である日本に対する関心は必ずしも低いものではない。本稿の報告者らが中国のトップ大学で行った調査においても、日本留学に関心を持つ学生が一定数存在することが分かっている。しかし、彼らの多くは奨学金、学費、言葉などの問題から、最終的に日本への長期留学を選択肢から外してしまうことが多い¹。こうした現状から、両国関係を永く維持・発展させるために、将来を担う中国の若い世代に少しでも日本の実像に関する理解を深めてもらいたいと考え、まずは短期受入れプログラムを実施するようになった。²」

上記の引用に見られる状況は、一時の政治的関係に左右されない、人的な相互交流の必要性そして個々人の信頼関係の構築の重要性を示している。そのような中で、2017年度までの本取組（第一回～第四回北京大学サマープログラム、規模を拡大し改称して実施した第五回、第六回「京都サマープログラム」）は大きな成功を収めてきた。参加学生たちは、日本への理解を深めると共に、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）等を通じて、周りの人々にもその情報を発信し、参加学生や彼らの情報に触れた学生の中から、日本への長期留学を志す学生が出てきている。

多様な文化的背景を持つ学生が集うことにより、来日学生はもちろんのこと、本学学生にとっても一層豊かな教育環境の実現を目指す。このことは、将来、京都大学が国際的な短期留学の拠点、ないしはアジアの文化、社会に通じ、その発展に寄与できる人材の育成拠点としての存在感を高めることにも繋がるであろう。

¹ 韓立友・河合淳子（2012）「日本の大学における留学生受入れ体制の問題点及び解決策の探索：京都大学におけるアドミッション支援オフィス導入の背景と効果」『京都大学国際交流センター論攷』第2号：37-55.

² SEND プログラム 2015 年度受入実施報告書「京都サマープログラム二〇一五」p. 6.

最後に、本プログラムの特徴の一つに、京都市等、地域との連携がある。第一回プログラム開始前の 2011 年に京都府に対し、短期留学生受入れ事業を京都大学と協働で行うプログラムの提案を行った。こうした経験から、地域との緊密な協力体制は、本プログラムに「京都ならではの」の要素を加える非常に重要なものであると捉えてきた。

1.2 プログラムの概要

1.2.1 プログラム内容

本プログラムの内容は、以下の四つの部分に分けられる。

一点目は、京都大学での講義である。毎年講義している教員は変わるが、基本的に国際関係、歴史、文学、農学、社会学など、各部署の教員に専門の講義をしてもらっている。教授言語は英語である。

今年度は、京都大学高等教育院 松沢哲郎特別教授による「チンパンジーが教えてくれた人間の本性」/ “Mutual support: Evolution of human viewed from the study of chimpanzees”、国際高等教育院 湯川志貴子准教授の「日本古典文学に見る日本人の美意識」/ “The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature”、農学研究科 近藤直教授の「90億人の食料生産と環境保全のための革新技术」/ “Innovative Technologies for 9 Billion People’s Food Production and Environmental Conservation”、アジア・アフリカ地域研究研究科附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター 飯田玲子特定助教の” High Economic Growth and Minamata Disease :The fight for certificates officially acknowledging victims of methylmercury poisoning”を提供した。

二点目は、日本語を教える講義の提供である。本プログラムは、募集の段階では日本語能力を要求しておらず、すべて英語で受講できるようになっている。しかし、以前のプログラム参加者から、日本語学習を希望する学生が少なくなかった。そのため、2016 年度（平成 29 年度）より、国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センターに講師紹介を依頼し、基礎日本語のクラスの提供を開始した（担当：赤桐 敦）。また中級、上級の日本語能力を有する参加学生には、同時期開催の「京都サマープログラム二〇一八（アセアン）」と連携して対応してきた。今年度も同様の状況が予測されたため、募集の段階から、本プログラムでは日本語学習のため 4 レベル（初級、中級Ⅰ、中級Ⅱ、上級レベル）を提供することを明示した。来日後のプレイスメントテストと履修相談の結果、履修者構成は以下の通りとなった。どのレベルも、語学学習に適正な人数で構成された。

日本語クラスのレベル別受講者（2018）

レベル	北京大学	香港中文 大学	国立台湾 大学	延世 大学校	ハイデ ルベル ク大学	合計
初級	5 名	3 名	1 名	3 名	2 名	14 名
中級 I	3 名	2 名	2 名	0 名	0 名	7 名
中級 II	1 名	2 名	0 名	1 名	0 名	4 名
上級	0 名	0 名	0 名	0 名	0 名	25 名

三点目は、日本および京都への理解を深める体験実習である。京都市、京都市選挙管理委員会、先端技術会社のナベル、滋賀県立琵琶湖博物館、滋賀県立大学など京都府内外の各地域の視察や見学を行った。

四点目は、学生交流である。京都大学から選抜された 18 名の学生がサポーターとして積極的に参加した。サポーター学生たちは参加学生とともに講義を受講し、キャンパスの案内、生活相談を行った。本年度は、サポーター学生によって、ナベル、パナソニック、滋賀県立大学などいくつかの見学や実習も企画・実施した。企業との事前交渉、日程調整、当日の引率、翻訳などを含め、教員の指導の下、すべての業務を自ら行った。また日本人学生とサマープログラム学生との交流に限らず、中国、韓国、台湾、香港、ドイツの学生同士、さらには同時開催のアセアンプログラム学生たちとも交流を深めた。学生たちは、自主的にお互いのきずなを深め、プログラム終了後も SNS で交流を続けている。このプログラムは留学生に限らず、サポーターとして参加した京都大学生にとっても、異文化理解能力を養い、外国語コミュニケーション能力を高め、国際性を涵養する貴重な体験となっている。

1.2.2 実施体制・教員確保と京都大学学生アシスタントの関与

現段階では、国際高等教育院の教授・准教授等の教員 4 名、国際教育交流課の事務スタッフ数名を中心として、カリキュラムの開発、企画及び実施を行っている。講義は基本的に京都大学各学部・研究科等の教員に依頼しており、ボランティアとして講義の提供を受けている。また、京都大学の学生も 18 名ほどがコアメンバーとして参加し、京都大学の講義及び京都府のプログラム以外に、イベントを企画したり、サマープログラムの学生を案内したりしている。これらコアメンバーには一定の謝金を支払っている。

1.2.3 カリキュラムの特徴

本プログラムは、日本の政治、文化・伝統、歴史、社会、環境・農業問題などを理解してもらう以外に、海外における日本の大学のプレゼンスの向上、参加後の日本への長期留学へ繋げる足掛りとしての役割を目的としている。したがって国際関係、歴史、文学、農学、社会学など各分野の教員による教養的講義を受けること、日本の文化を体験すること、日本の企業の見学、日本人学生と交流することを特に意識したプログラム構成となっている。

1.2.4 使用言語

本プログラムでは、参加者を広く募るため、延世大学、北京大学、香港中文大学、国立台湾大学、ハイデルベルク大学の学生であれば誰でも応募できるよう、参加にあたって日本語能力を問わない。本プログラムにおける講義は基本的に英語で行った。企業への見学、学生交流の際には、英語、日本語、中国語、韓国語などが使われていた。

1.2.5 成績評価の整備

従来より京都大学からの単位付与は行われていないものの、成績表及び修了証を交付してきた。成績表及び修了証に基づき、大学によっては、単位として認めているところがある（北京大学、延世大学校）。昨年度より成績評価を整備し、継続している。出席・参加態度 30%、日本語クラス 30%、最終発表と最終レポート 40%の合計で評価することとし、素点及び評語による成績評価を行った。評価はプログラム担当者である国際高等教育院の韓立友と河合淳子が行った。（資料 1、2 参照）

1.3 総括及び今後の展望

2016 年度、受入れ対象大学を拡大し、今年度さらにドイツのハイデルベルク大学まで拡大し、本プログラムは新たな段階に入っている。今年度は 25 名を受入れた。また昨年度と同様、「京都サマープログラム」アセアンプログラムと同時に開催することにより、講義を充実させ、より多様な学生の交流機会を提供している。参加学生の満足度は高い。

京都が持つ日本の伝統文化・歴史、京都大学が持つ世界最先端の独創的な研究資源は、世界中の人々を惹きつける魅力がある。本プログラムのような短期留学プログラムを世界のトップ大学の学生に提供することで、日本の政治、経済、文化、歴史などについて発信できるとともに、優秀な留学生の誘致、世界における日本の大学のプレゼンスを高めることが期待できる。また、京都大学でも欧米の一部の大学と「交流協定に関する不均衡」問題が存在することから、こうしたプログラムは日本人学生の欧米への派遣を拡大し、「不均衡」を解消する対策の一つとしても考えられる。今年度初めての試みとして、ドイツのハイデルベルク大学から 2 名の学生を受け入れた。現在の対象校をさらに拡大し、世界のトップ大学の学生を広く受け入れる必要がある。

今後の課題として、（１）実施体制、（２）資金の獲得、（３）本学の全学教育における位置づけの検討があげられる。

まず、（１）実施体制についてであるが、教育面と運営面から述べたい。教育面では、京都大学が提供する講義の講師に関する問題がある。現在は、京都大学の教育及び研究特色を生かせるよう、カリキュラムの内容によって、基本的に京都大学の各研究科・研究所の教員にボランティアでの講義を依頼している。しかし今後、規模が拡大していくにつれて講師の負担が増えることが予想される。講師に対する謝金など、質の高い講義を続けていく体制の構築が急がれる。一部の講義を他大学、さらには海外の教員に依頼するといったケースも検討すべきである。

運営面で、今年度は派遣職員一名を雇用した。同職員は、先方大学・学外研修受け入れ先とのやり取り、ビザ等の学生の来日に関わる手続きの遂行を担当した。国際教育交流課、担当教員が連携し、協力してプログラムを遂行する体制が徐々に整備されてきていることは大きな成

果である。しかし、プログラム開設以来、実施体制は安定せず、来年度以降の体制は未定である。来年度以降については、今回の成果を生かし、将来の発展の形態を意識しつつ、早い段階で体制を確定する必要がある。

次に（２）資金の獲得についてであるが、本プログラムは２つの学内資金、すなわち①平成30年度ワイルド&ワイズ共学教育受入れプログラム事業及び、②アセアンプログラムと共同で実施することにより、機能強化経費「世界最高峰の現代アジア・日本研究の教育研究拠点形成—京都大学アジア研究クラスターと国際連携大学院プログラム—」の支援を受けて実施している。これらの資金により、現在は参加者全員に申請費用や学費の免除を行っているが、今後希望者が増加すれば、講師への謝金、プログラムの企画に関与する京都大学の学生への謝金も増加する。世界の他大学で実施されているように、一定の学費免除枠外の参加希望者には学費を支払う形での参加を受け入れるということも検討に値する。学生交流の実態に基づき、参加大学毎に学費免除枠を計算したうえで、予算を超過する場合は学生に学費を要求する必要が生じることもあるだろう。

最後の（３）本学の全学教育における位置づけについては、前項1.2.5で述べた通り、成績評価の方法を整備したことが今年度の成果として挙げられる。前述の通り、北京大学や延世大学のように単位認定している大学があり、他大学においても検討が開始されている。本学においても引き続き検討を進めたい。また、学生アシスタントのリストから分かるように、本プログラムには多様な学部から多くの京都大学学生が関わっている。今年度の応募者は定員の6倍を超えていた（113名）。彼らには実務上の補助（例えばサマースクール参加者との事前連絡（学生の視点による必要情報の提供、質問への回答）、宿舎とキャンパスの案内、文化活動等の企画・実施、来日中の生活上のアドバイス）が求められると同時に、当プログラムで提供される講義を受講することができる。京都大学学生との交流に対する参加学生の満足度の高さは後掲の報告文にうかがい知ることができる。本プログラムを通じて、京都大学学生の国際性が涵養され、企画能力が向上していることを実感するが、それをどのように評価し、本学の教育、特に全学教育に位置づけていくか。すでに、世界のトップ大学では、こうした短期プログラムを受入れ大学側の学生の教育の一環として捉え、単位認定を行っているところが少なくない。今後、本学においても議論を深めていきたい。

（文責：韓 立友・河合 淳子）

2 実施体制

京都大学

実施責任者

国際高等教育院長／教授	村中 孝史	(MURANAKA Takashi)
-------------	-------	--------------------

担当教職員

国際高等教育院・教授	河合 淳子	(KAWAI Junko)
国際高等教育院・准教授	韓 立友	(HAN Liyou)
国際高等教育院・准教授	家本 太郎	(IEMOTO Taro)
国際高等教育院・准教授	湯川 志貴子	(YUKAWA Shikiko)
学際融合教育研究推進センター・ 特定助教	西島 薫	(NISHIJIMA Kaoru)
国際高等教育院・教務掛掛長	若月 和也	(WAKATSUKI Kazuya)
国際高等教育院/国際教育交流課 短期プログラム担当	山口 聖佳	(YAMAGUCHI Kiyoka)

協力教職員等

国際高等教育院・副院長／教授	宮川 恒	(MIYAGAWA Hisashi)
国際高等教育院・准教授	青谷 正妥	(AOTANI Masayasu)
高等研究院・特別教授	松沢 哲郎	(MATSUZAWA Tetsuro)
大学院農学研究科・教授	近藤 直	(KONDO Naoshi)
アジア・アフリカ地域研究研究科・ 特定助教	飯田 玲子	(IIDA Reiko)

国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター・非常勤講師

下橋 美和	(SHIMOHASHI Miwa)
浦木 貴和	(URAKI Norikazu)
白方 佳果	(SHIRAKATA Yoshika)

京都大学大学院工学研究科 附属工学基盤教育研究センター・非常勤講師

赤桐 敦	(AKAGIRI Atsushi)
------	-------------------

学外協力組織

京都市総合企画局 総合政策室 留学生支援・大学連携推進 担当課長

橋本 浩之	(HASHIMOTO Hiroyuki)
-------	----------------------

京都市選挙管理委員会事務局 選挙課 担当課長

柴田 洋志	(SHIBATA Hiroshi)
-------	-------------------

滋賀県立大学 環境科学部 助教	肥田 嘉文	(HIDA Yoshifumi)
-----------------	-------	------------------

滋賀県立大学 環境科学部 准教授	後藤 直成	(GOTO Naoshige)
------------------	-------	-----------------

3 参加学生一覧

東アジア+ドイツ 短期交流学生/ Short-Term International Students

氏名 (Name)	大学 (University)	専門 (Major)	学年 (Year)
Sou Gishou	国立台湾大学 National Taiwan University	Political Science	3rd
Lee Po Yi		Civil Engineering	2nd
Chiu Pei Hsin		Anthropology	4th
Chan Kin Long	香港中文大学 The Chinese University of Hong Kong	History	2nd
Yu Cheuk Pong		History	4th
Hung Ka Kiu		History	2nd
Chan Shuk In		Linguistics	3rd
Kei Nelson		Food and Nutritional Sciences	2nd
Lo Yan Lok		Biomedical Sciences	2nd
Ho Hei Ting		Sociology	2nd
Kim Yoojeong	延世大学校 Yonsei University	Asian Studies	2nd
Kim Heecue		Quantitative Risk Management	2nd
Jang Nayoung		Asian Studies	3rd
Choong Carmen		International Studies	4th
Cai Jia Hong	北京大学 Peking University	History	D2
Chen Tainan		Law	4th
Du Shanyuanyu		Foreign Language	2nd
Jin Li Xiang		Government	3rd
Liu Bowei		Foreign Language	2nd
Liu Tangxing		Economics	3rd
Wang Hanyu		Medical Humanities	3rd
Xu Jia		Literature	M1
Yang Xiaoqing		Literature	M1
Rade Florian Clemens	ハイデルベルク大学 Heidelberg University	Geography, Physics and Sports	5th
Guschker Joel David		Political Science	1st

氏名 (Name)	大学 (University)	学部・研究科 (Faculty / Graduate School)	学年 (Year)
手代木 さづき Teshirogi Sazuki	京都大学 Kyoto University	文学部	4 年
西原 舞 Nishihara Mai		教育学部	1 年
杣津 萌 Somatsu Moe		理学部	1 年
塚原 弘大 Tsukahara Kouta		理学部	1 年
山野 真由 Yamano Mayu		薬学部	1 年
川原 夢果 Kawahara Yumeka		法学部	2 年
勝村 瑠海 Katsumura Rumi		経済学部	1 年
上島 憲 Kamishima Ken		総合人間学部	1 年
柳沢 彩 Yanagisawa Aya		法学部	3 年
宮崎 舞 Miyazaki Mai		農学部	2 年
中原 佳保 Nakahara Kaho		医学部	1 年
宮永 梨央 Miyanaga Rio		医学部	2 年
花房 朋樹 Hanafusa Tomoki		文学部	1 年
田村 かれん Tamura Karen		文学部	3 年
松岡 珠美 Matsuoka Tamami		農学部	2 年
三堀 桂奈 Mitsubori Keina		法学部	4 年
野村 美空 Nomura Miku		文学部	3 年
藤本 結月 Fujimoto Yuzuki		法学部	2 年

4 研修日程

日程 Date	プログラム内容 Contents	場所 Place	担当 Responsibility
7/29 (日)	Arrival in Japan Hotel Check-in	KIX Oyado Ishicho	
7/30 (月)	9:30-10:00 Opening Ceremony & Orientation 10:00-11:00 Campus Tour 12:30 Bus pick-up 13:15-14:00 Courtesy visit to the mayor of Kyoto City 14:15-16:00 Leecture I:Election System In Japan	Yoshida Intl. House Room 1, Kyoto Univ. The main entrance Kyoto City Hall Oyado Ishicho, The Heian Room	河合教授、韓准教授 Prof. Kawai, Assoc.Prof. Han City of Kyoto, 韓准教授 Assoc.Prof. Han Hiroshi Shibata (Kyoto Election Committee)
7/31 (火)	8:45-10:15 Japanese language Level 1-4 10:15-11:00 Interview for placement 14:00-15:30 Lecture II: Science	Yoshida Intl. House Yoshida Intl. House KUINEP Lecture Hall	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata 河合教授、韓准教授 Prof. Kawai, Assoc.Prof. Han Prof. T. Matsuzawa
8/1 (水)	8:45-10:15 Japanese language Level 1-4 10:30-12:00 Japanese language Level 1-4 14:00-15:30 Lecture III: Japanese literature 16:30-18:00 Lecture IV: KU Introduction	Yoshida Intl. House Yoshida Intl. House KUINEP Lecture Hall KUINEP Lecture Hall, Int' 1 Multi purpose Hall, J-pod	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata Assoc.Prof. S. Yukawa 河合教授、韓准教授、西島助教 Prof. Kawai, Assoc.Prof. Han, Assist.Prof Nishijima
8/2 (木)	8:45-10:15 Japanese language Level 1-4 10:30-12:00 Japanese language Level 1-4 16:30-18:00 Lecture V: Agriculture	Yoshida Intl. House Yoshida Intl. House KUINEP Lecture Hall	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata Prof. N. Kondo
8/3 (金)	10:30-12:00 Japanese language Level 1 16:30-18:00 Lecture V: Japanese Modern History	Yoshida Intl. House Room 1 KUINEP Lecture Hall	Lecturer: A. Akagiri Assist.Prof. R. iida
8/4 (土)	Activities and/or cultural visit with KU students		
8/5 (日)	Activities and/or cultural visit with KU students		
8/6 (月)	8:45-10:15 Japanese language Level 1-4	Yoshida Intl. House	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata

	<u>10:30-12:00</u> Japanese language Level 1-4	Yoshida Intl. House	Lecturer: A. Akagiri, M. Shimohashi,
	<u>13:00</u> Gathering at Demachiyanagi Station		
	<u>14:00-17:00</u> Corporate Tour: NABEL		
8/7 (火)	<u>10:30-12:00</u> Japanese language Level 1	Yoshida Intl. House Room 3	Lecturer: A. Akagiri
	<u>15:00-19:00</u> Afterclass Cultural Experiences	Kurama Temple Kifune Shrine	
8/8 (水)	<u>9:10</u> Gathering at Oyado Ishicho Lobby		
	<u>11:00-13:00</u> Corporate Tour: PANASONIC Museum		
8/9 (木)	<u>9:00-18:00</u> One-day Trip to Shiga		
8/10 (金)	<u>13:30-15:00</u> Presentation Session	Yoshida Intl. House Room 3	M. Aotani, Assoc. Prof., J. Kawai, Prof., L. Han, Assoc. Prof.
	<u>17:30-20:00</u> Completion ceremony & Farewell party	Yoshida Intl. House Room 3, Cafeteria	H. Miyagawa, Prof., J. Kawai, Prof., L. Han, Assoc. Prof.

**About the assessment for
“Kyoto Summer Program for East Asia and Germany Students 2018”**

Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University

Dear Participants,

The assessment of “Kyoto Summer Program for East Asia and Germany Students 2018” will be done in the following manner:

- | | |
|--|-----|
| (1) Attendance and participation in lectures and activities
(including Classwork-lecture, Off-campus study visit, On-campus program,
Opening/closing and wrap-up class session.) | 30% |
| (2) Japanese language class | 30% |
| (3) Presentation and <u>Final report*</u> | 40% |

*About the Final report

[Due] The final report is due on August 24th, 2018.

[Topic] Write BOTH 1 and 2 below.

1. **General impression** of the program 300-500 words
2. **One specific topic** that you have been particularly interested in during this program:
What you have learned about the topic, reasons why you became interested in the topic,
what additional investigation you have done about the topic, and so on. (Examples of
topics from former students include daily use of technology in Japan, use of AED
(Automated External Defibrillator), comparative study about manners, etc.) 300-500
words

[Format]

Write your full name and the name of your home university at the top of the report.
The report should be typed in a WORD document, single spaced. See the backside of
this paper.

[Language]

English

[How to submit]

Please submit to the report to your home university by the deadline. You will receive
information from your university about how you should submit the report.

September 20, 2018

ACADEMIC TRANSCRIPT

Student : _____
Course : Kyoto Summer Program 2018
Period : July 30, 2018 to August 10, 2018
Evaluation : Attendance and participation in lectures and activities (30%),
Japanese language class (30%), Presentation and final report (40%).

This certifies that Cai Jiahong has attended the above-named program and received the following evaluation.

Marks

Attendance and participation in lectures and activities	____/30
Japanese language class (Elementary)	____/30
Presentation and final report	____/40

Overall	____/100
Evaluation	____

Note : Evaluation Scale A+ : 100-96 A: 95-85
 B : 75-84 C: 74-65
 D : 64-60 F: below 60

Signature _____
MURANAKA, Takashi
Director
Institute for Liberal Arts and Sciences
Kyoto University

5 参加学生報告

Yi Jie, Tzeng
National Taiwan University

1. General impression about the program

It has been several days after I left Kyoto. Looking back, it seems a very short two weeks living there and studying together with distinguished students all around the world. The first several days in the program were a bit of difficult time because never have I been to Japan so that everything is so amazing to me. However, I tried very hard to adapt myself to this new environment, new lifestyle, and a brand new place for study and making friends. Actually, there were times of disappointment and confused, but there were always times of joy, excitement and happiness.

As to the course in this program, the most impressed one I have taken is “Mutual support: Evolution of human mind viewed from the study of chimpanzees” by S.Yukawa, Prof. I was deeply moved by his spirits, not only because his in-depth and outworking investigation in chimpanzees but also his enthusiasm for his study program.

When it comes to the people I met in this program, there’s no words to express my gratitude toward those supporters and the professors who worked on this summer program. Also, I would like to show my thankful from the bottom of my heart to Professor Akagiri, who treated his students especially those who are the beginner of Japanese very nice.

Last but not least, I am not sure who in Kyoto University will check or read this final report but here’s some maybe sensitive words I want to say. On the farewell party at the last day of the summer program, I have a short talk with Professor Liyou HAN. During our conversation, I heard that the relationship between Kyoto University and NTU are getting worse in recent year. Actually, I felt a little bit upset because my home university are now getting in trouble due to the absence of principal. As a result, there might have some problems when our sister school have to reach an agreement with us. I can’t represent NTU authorities while in international affairs or agreement because I’m just one of the students, but I just want to express my thankful to Kyoto University for giving NTU’s students the chance to visit here. I treasure this opportunity very much, and I bet all the students from NTU value this chance as highly as me.

2. Comparative study about Amusement Arcade

It is hard for me to choose only one specific topic that I have been particularly interested in during this program. What’s more, you may regard me as a strange student due to my chosen topic. I select this topic “Comparative study about Amusement Arcade” because I had mentioned about the amusement arcade as known as パチンコ in Japan in my final presentation. Beyond my expectation, this led to a lot of discussion at the end of the class. Therefore, I thought that the amusement arcade is not only a game center but also a place to know the different politics about gambling among the countries around the world.

I remember that in our class discussion, we regard Japanese amusement arcade as a gambling center. However, after some of my investigation I recognize that our conclusion is wrong! To take one of the law that Japanese legislator had made about パチンコ for example. It is illegal to transfer the steel ball or token that you have won from the game machines to Japanese currency! In other words, the token you have bought by cash can only use in the game center. You may not earn more money from the amusement arcade. Instead, you can get some return by your token like gifts which are presented by the store.

Although it is illegal to change money according to the Japanese law, the owner of the game center come up with a “good” idea to make this game half-like a gambling game. That is, there’s a store called “TUC shop” which is established for those who win a grand prize through the パチンコ machine. Needless to say, the TUC shop will not be located in the place near パチンコ center. If you luckily win the first prize in the game center, than you will get a “special card” from the authorities of パチンコ center. Later, you can show this special card to the TUC shop which is located far from the game center to change a large amount of money you have earned. This “changing money method” is viewed as an legal way because never did people earn money from the パチンコ center, instead, they earn from the TUC shop.

In conclusion, we can’t see パチンコ as a gambling center due to its complicated money changing method. It is just like the sports lottery in Taiwan, a gambling lottery game hold by the government. Due to the banker of Taiwanese lottery is the government, so you can’t say it is illegal. Isn’t it interesting? There are many kinds of gambling games everywhere and the difference among them are just whether they are hold by the local government or not. “Gambling” might just be a very superficial noun. As for my opinion, I thought that while there is human, there is gambling!

PO-YI, LEE(李柏毅)

National Taiwan University(国立台湾大学)

1. General impression about the program

In this year, 2018, I spent two weeks joining the summer program in Kyoto University. It's my first time to stay abroad for such a long time. I met students from various countries, and learned different kinds of culture, not only Japanese. I really enjoy this program, and I believe that all of us had a great time during these two weeks.

In this summer program, there were Japanese language class, divided into 4 levels, and lecture class. For me, Japanese language class is my favorite part. Though I have already learned lots of Japanese words and grammars, there is lack of chance for me to speak and practice in my country. In this Japanese language class, the teacher encouraged us to speak out in Japanese loudly, and taught us to make good use of those words and sentences that we have learned before. The teacher prepared a lot, and explained things clearly, so I was able to understand every part in the class. I really appreciate the Japanese language teacher, Shimohashi Miwa(下橋 美和). She let me experience a new way of learning Japanese. The second part of class was lecture class, introducing various kinds of topics and issues of Japan, including election system, classical literature, Minamata Disease, the spirit of Japanese education, and so on. The most impressive part for me is undoubtedly the lecture of study of chimpanzees by Professor Matsuzawa. In this lecture, I learned the chimpanzee activities and the evolution of human mind. Besides, other lectures were also wonderful, which enabled me to learn different aspects of Japan.

In addition, we also enjoyed great time traveling with KU students after class. In this two weeks, we visited so many places in Kyoto, including Shimokamo Shrine(下鴨神社), Yasaka Shrine(八坂神社), Kiyomizudera Temple(清水寺), Kurama Temple(鞍馬寺), Kinkakuji Temple(金閣寺), and so on. For me, the most impressive part is the weekend trip. There were three choices of tour, Osaka, Arashiyama, and Nara. I chose the trip to Nara, led by the KU supporter Teshirogi Sazuki(手代木 さづき). We visited the Toudaiji Temple(東大寺) and the Kasugataisha(春日大社). The Todaiji was so magnificent that I stopped and stared for a long time, appreciating the beauty of big Buddha(大仏). We also tasted Kaki no Ha Zushi(柿の葉寿司) as lunch, which was so delicious. In the trip to Nara, we shared different cultures with each other, and learned the history and lifestyle of ancient Japan.

Time flies! For me, two weeks are too short to have a whole view of Kyoto, or even Japan. Kyoto is a place that is worth visiting again and again. During the summer program, I met students around the world. We learned a lot from classes and trips, and we all shared the unforgettable experience in Japan.



2. The Protection of Railway Cultural Assets (own chosen topic)

During the weekend in the middle of summer program, I visited the Kyoto Railway Museum, which was the Umekoji Locomotive Museum(梅小路蒸気機関車館) in the past. Combined with Osaka transportation museum, Umekoji has become the biggest railway museum in Japan, collecting 53 cars of train. In addition, it also demonstrates railway tunnels, bridges, and even electric systems. After visiting, I realized the importance of protecting railway cultural assets. To me, there are two aspects for explaining the importance of protection, which are speed and application.

Japanese railway was first opened in 1872, from Shinbashi(新橋) to Yokohama(横浜). Since then, it had been quickly expanded, and widely spread during the Taishou(大正) and Shouwa(昭和) years, which were called the golden time of Japanese railways. The first limited express train (特急列車) started its service in 1912, connecting Shinbashi and Shimonoseki(下関). Then, during 1930s, the steam trains named “Fuji”(富士), “Sakura”(桜), and “Tsubame”(燕) became the most famous express, which spent only 8~9 hours running from Tokyo to Osaka. After World War 2, the JNR(国鉄) electric train named “Kodama”(こだま) reached a higher speed. What's more, in 1964, the world first bullet train, Shinkansen(新幹線), was opened between Tokyo and Osaka, running up to 200 kilometers per hour, which was the highest speed in the world at that time. Nowadays, Shinkansen has been much faster. From steam trains to Shinkansen, we can find that the trains in different times represent the process of people pursuing speed.



Besides the high speed trains, there are also various special cars for different uses, such as sleeper cars(寝台列車), dining cars(食堂車). One of the most famous sleeper cars in Japan is Twilight Express(トワイライトエクスプレス), running from Osaka to Sapporo. However, it has been out of service since Hokkaidou Shinkansen(北海道新幹線) was opened, which shorten the travel time. Sleeper cars are no longer used, because people don't need beds on trains anymore. Though some of the special cars are out of service, it has represented various application of railway management. According above, we can find that trains are also a kind of cultural assets that record human history. People in the future are able to understand history only if we keep these old trains alive. Thus, in my opinion, it is our duty to protect old trains, just as we do for those shrines and temples.

Pei Hsin, CHIU
National Taiwan University

1. General impression about the program

I was impressed by four parts of this program. First of all, the Japanese classes. Because of the Japanese classes at 8:30 every morning, my roommate and I had to get up at 6:30 no matter how late we went to sleep last night. It was not only early but also challenging for me to learn Japanese in Japanese. However,

thanks to these difficulties I met, I also made friends who could get over these difficulties together. Second, the lectures in the afternoon. It is hard for me to learn such widely lectures which are from biology to literature in National Taiwan University. Therefore, it was my pleasure to learn both the knowledge and their attitude when facing studies from all the professors in these lectures. These really inspired me in terms of doing researches. Third, traveling time after classes. Most of the time, I decided to visit Kyoto after classes without the KU students group. Since it was my second time to visit Kyoto, I preferred not to visit the top famous places in Kyoto, such as Kiyomizu Temple, and save my time to visit Kodaiji Temple and Seimei Shrine, which are not as famous as Kiyomizu Temple and Fushimi Inari Shrine. The experience that I traveled after classes were very different from coming to Kyoto only for traveling one week two years ago. After I went back to hotel, I would share my feelings with friends in this program. Then, we would recommend each other to the places we had been that day. It seems like we were tourism ambassadors of Kyoto for each other. Last but not the least, thanks to all the helps from students and teachers from Kyoto University, we could learn many Japanese in the morning, expand our horizons in the afternoon, and then experience the true Kyoto by ourselves after classes. Supports and teachers from Kyoto University were full of sense of responsibility. Teachers helped us with our questions on both the lectures and the presentations. Supports helped even more. They told us the easiest way to go to school from the hotel, and they practiced Japanese conversation with us. What's more, they did lots of preparation to guide us in not only Kyoto but also Nara and Osaka. Thanks to all the people with kind hearts, including teachers, supports, students from other countries, people I met in Kyoto, I could have a successful conclusion of this program in Kyoto.

2. The Tale of Genji

Professor Yukawa gave us a class about the aesthetics and sensitivities of the Japanese as seen through classical Japanese literature. She taught us several Waka and Haiku during the class. Since I had learned about the basic knowledge of Waka and Haiku in National Taiwan University, I am interested in those Japanese poems that can reflect the mood of poets in the past. Kokin Wakashū is one of the most famous way to learn Waka and Haiku. There are lots of famous works in it. However, it is difficult to get a translated version of Kokin Wakashū in Taiwan. Therefore, I usually learn Waka and Haiku from The Tale of Genji. The tale of Genji was written by Murasaki Shikibu in A.D. 1008, about 800 years earlier than Dream of the Red Chamber. The character is named Genji, who lost his mother at three, and then found that his stepmother looks like his mother. Thus, he starts to run after both his stepmother and her niece, who is only 10 years old. This story is about the romance between Genji and his 15 lovers. When Genji runs after girls, they will give Waka and Haiku as presents to each other. Therefore, it is another way to learn more Waka and Haiku. Since this novel is called the world's first novel, the first modern novel, the first psychological novel or the first novel still to be considered a classic, Waka and Haiku in this novel are worth learning. There are 795 Waka used in the story. The last 10 chapters (with 177 Waka) are called the ten chapters in Uji, which is about the story of Genji's son. As a big fan of The Tale of Genji, I read this story by manga, animation, movie, and novel. I also visited The Museum of Kyoto (Kyoto Culture Foundation), The Tale of Genji Museum(it is closed due to repair), Uji bashi Bridge, Uji shrine, and Ujigami shrine during the program this time. Driving by curiosity, I compare Dream of the Red Chamber and The Tale of Genji. They are both written about the impermanence of life. Authors of these two novels had similar life stories. However, Dream of the Red Chamber is the peak of the Chinese cultural, and The Tale of Genji is the start of the Japanese cultural. These two novels are similar but totally different in their expression and their literature status.

Kin Long, CHAN

The Chinese University of Hong Kong

1. General impression about the program

Two weeks is not a long time, those beautiful moments in Kyoto just flired in a blink of my eye, it seems like my memories with all the peoples and places I met in Kyoto was just happened yesterday.

Before talking about my experience of this program, at first, I would like to give my big and sincere gratitude to all the staffs and student supporters of this program, who contributed a lot to make the whole program ran smoothly. Their dedication to give the most comfortable experience for the visiting students made me deeply impressed. I also want to specially thank all the student supporters from Kyoto University, I know that during the period we visit Kyoto, the KU students were still facing their term examinations and final assignments, so after the end of the program schedule everyday, they have to study hard at mid-night, but they still willing to

sacrifice their precious rest time and study time to stay along with us, take us to a number of attractions in Kyoto City after the lecture and the whole Saturday, it moved me a lot. Their effort really richen our experience in Kyoto, especially the visit of Fushimi Inari Shrine and watching the cormorant fishing performance in Arashiyama, they even led us try some Japanese cuisine e.g. Okonomiyaki, all of these are eye-opening for me. Therefore, I would like to take this opportunity to express my appreciation of their contribution for us.

Another part of the program is the six lectures. As I am a history major student, the most impressive one is the lecture about Japanese aesthetics and Literature, which suits my study interest about the culture of East Asia. As I have learnt some in my home university about the use of natural beings to express personal feelings (usually sorrow mood) in Japanese literature ('mono no aware'). In this lecture, the lecturer presented to us many examples of waka and haiku with the use of seasonal natural creature (flowers, birds, wind and moon), which make me more easy to comprehend the concept I learnt before.

However, to study Japanese literature, a certain Japanese Language proficiency is needed in order to be able to read the original texts, as I only have an N5 Japanese language level which is far from reaching the standard, so learning Japanese is also part of my study plan, the Japanese Language Class in this program thus give me more opportunities to have conversation with Japanese people.

Lastly, through chatting with KU students, I can also have further understanding on Japan's school life, It should be great to go to campus along the Kamogawa river by bicycle in the morning, I regret that I have not try once during the program.

About the part of field Trips, we have visited the egg-packing company Nabel and the multinational electronics corporation Panasonic, through the speech of the president of Nabel and visiting the Panasonic Museum, they showed to me different management strategies of Japanese entrepreneurs in different ages and circumstances, and also some common features of Japanese company, like family based labour relations (life-long employment, the introduction of five-day workweek by Mr. Konosuke Matsushita to Japan etc.), focusing on main industry, avoid expand the scale recklessly etc.

In general, I gained a lot from this program that cannot be achieved simply by a travel tour. I have been to Tokyo and Hokkaido before, which is well-known as the representation of Japan's 'modern' and 'scenic' image, and this time I came to the Western part of Japan, which is nearer to the origin of Japanese ethnicity (Chugoku chiho) and located at the capital region of Ancient Japanese dynasty, which can show to me the 'traditional' side of Japan. I believe that this trip helps me understanding Japanese culture more comprehensively, and I will keep exploring Japanese culture (both traditional and popular one) in the future.

2. A Brief Introduction of 'Goshuin'

As Kyoto has shrines and temples around the city, especially those big and historical ones, so I have a lot of opportunities to visit them in this program. During the visit, I observed that the common activities of tourist are mainly taking photos, asking for a fortune-telling lot, writing 'ema' or buying Amulet and other souvenirs. Although people usually pay little attention on the 'goshuin' granting office where next to the general office, sometimes tourists may watch around the granting office curiously when people collecting the "goshuin". Also, during a trip to Tokyo months before, I have seen an advertisement inside the railway station promoting a tour to Kyoto for collecting 'goshuin' with discounted transportation fee. So the interest of tourist on worshipping activities and the promotion of cultural tourism made me realized the relationship between 'tourism' (economic interest) and preservation of tradition, and how they integrate in modern society.

'Goshuin' is a red seal given to worshippers who had dedicated to the temple, although ancient people may also give sacrifices, nowadays people mainly give money, usually fixed in ¥300 per stamp.

Originally, transcribing scriptures is the main way for Japanese monks to worship and accumulate moral merits. In Heian period, Buddhism can be seen as a religion for nobility only, but from the Kamakura period, Buddhism gradually spread to the commoner class. However, as sutra were usually written in Kanji while most of the commoners were not literate to write them. Also with the practice of pilgrimage,³ transcription of scriptures should be done in the temples. These two factors led to the evolution of a kind of hand-written seal, which is a record to prove the person have finished worshipping in the temples. So we can see that 'goshuin' is not a tourist stamp, it should be obtained after completed the whole worshipping process. Additionally, with the practice of 'Shinbutsu-shugo' which combined the belief of Shintoism and Buddhism, the distribution of 'goshuin' also provided in shrine.

³ Pilgrimage in Japanese Buddhism can be classified as two types, the first one is to follow the worship path of enlightened monks (e.g. Shikoku Pilgrimage); while the second one is to visit the temples worshipping the same Diety (e.g. Saigoku Pilgrimage, which are 33 temples in Kansai that mainly accompanying 'Kannon'). Worshippers can finish pilgrimage with all the 'shuins' of that series of temples as a proof.

Even so, the style of 'goshuin' written by shrines and temples are varied. The core part of the seal in temple would be the name of Diety, while the Shinto's one are mainly based on the name of shrine. Furthermore, the calligraphic style of the temple's one would be more artistic than the shrine's one.

Nowadays, because of the unique architectural style and the historical background of temples and shrines, they become the major tourist attractions in Japan, especially in Kyoto. Although with big economic benefits generated by tourism as an incentive, commercialization of religious activities seems inevitable, still there should be a balance between preserving the tradition and promotion of tourism. The 'goshuin' distributed by temples and shrines should not neglect the original intention.

Cheuk Pong James, YU
The Chinese University of Hong Kong

1. General impression about the program

The Kyoto Summer Program provided a comprehensive and warm-hearted feeling for us to experience the academic excellence as well as the hospitality in Kyoto University. The program also allowed students from all around the East Asia and German to gather together and fostered the cross cultural communication. The program did not only incorporate us into the cultural and academic field of Kyoto, but also became a platform for participants and supporters to establish valuable relationship. I was particularly impressed with the arrangement of meeting the Mayor of Kyoto. The arrangement explicitly revealed that the Kyoto University really valued our visit which made us feel honored. Besides, the lectures in Kyoto University was enjoyable and thought-provoking. We learned a variety of knowledge from the lectures of chimpanzee, global food waste problem and Japanese classical literature, etc. Moreover, the Japanese class was so lively and interactive. With the help of the teacher and supporters, I was able to introduce myself in Japanese within a week. The Japanese lesson aroused my interest in learning Japanese in the future. For the off-campus visit, we were able to get in touch with the Nabel company and discovered the unique business culture of the enterprise. For instance, staff wore uniform and the employer expected the employees to work for a lifetime. This culture was very different from Hong Kong since people liked to change their job from time to time. By talking with the staff, I could also feel the loyalty and seriousness of them towards the company. The culture of "Home" was the part I admired the most in the company as it was rare to see in Hong Kong. Lastly, I would like to express my gratitude once again to the professors, staff, supporters and all involved parties in the program. Thank you so much for the arrangement and all the hard work which make this program successful.

2. Gender and Education in Japan

The reason that I have been particularly interested in the topic of "Gender and Education in Japan" is due to the unbalanced gender ratio of the supporters in the program. I find that there were many female supporters and few male supporters. Therefore, I start to think that maybe the male students have a weaker English ability that cause few male supporters participate in the program. To test my hypothesis, I study the education system in Japan. English is the core subject included in the university entrance exam which means every student has to study English in order to promote to the university. Unfortunately, when talking with the supporters and other students from the Kyoto University, I was told that the entrance exam was the only reason for most students to study English. But for some female students, learning English seemed to be an essential element for them to achieve a better life and to incorporate into mainstream industries. Then, I check the data of the TOEFL iBT Tests in 2017. The result indicated that females' total scaled score was higher than males' in high school and college level. In this sense, female should be given more chances in promoting to the university. However, the gender composition in university tells another story. In the University of Tokyo, there are 11291 male students and 2711 female students in 2018. Female student is less than 20% of the total number of students. In the Kyoto University, there are 4807 male students and 2999 female students. The number seems to be more balanced but the gender gap in education still exists in the prestigious universities in Japan. Moreover, during the period of the program, I heard the news "Tokyo Medical University discriminated against female applicants by lowering entrance exam scores". This further underlines the problem of gender discrimination in education. The gender gap in education could also cause problems of women in workplace and preserve the traditional gender expectation and gender role in the Japanese society prohibiting women gaining the equal access and opportunity in the society.

1. General impression about the program

This program provided a lot of and valuable opportunities for us to encounter different kinds of people and stuff, including the student from Kyoto university and other university, such as students from Germany and Korea, and also the heritage and culture atmosphere of Japan. So I think the Kyoto summer school program is one of the greatest experience in my university life.

In this program we can meet students from different country and major, so we have students from mainland China, Korea, Taiwan, Germany and Japan. During that two weeks, students from those country can communicate very well, and share the same passion in study in Japan and its culture. Also, Japanese supporters are all very kind and nice to everyone, and they are eager to talk to us in English and teach us everything about Japanese history and culture. So I believe that it is a rare chance to communicate with that many students who have a totally different background.

We can explore a wide range of culture and enjoy the experience. First, in Kyoto we can visit numerous heritage site and sightseeing spot, such as Fushimi-inari, Yasaka Shrine. So it is a great experience to explore and visit the temple and shrine in Japan, which with an impressive Japanese architecture style. Second, we can also enjoy some day trip with Japanese students, we can go to some place outside Kyoto city, and to experience other fun activity, such as the firework festival held in Osaka during the program, which is also a special event and experience through out this program.

Different types of lectures and Japanese classes which teaching and discussing a wide range of knowledge about Japan, to let us engage into more learning opportunities. We have learnt about the Japanese language, election system, aesthetics seen from Classical Japanese Literature, the study of chimpanzees, and many more. Those lecture was held by teacher and famous scholars from Kyoto university, so this was another important experience to let us explore other field study and knowledge through these lecture and classes.

2. The origins of Japanese ancient agriculture

I was inspired by one of the lecture during the program, which is discussing about the food problem in future and how to solve the problem. Because of my major field, history, I linked the topic towards history, and I have studied a relative topic of the origins of Chinese ancient agriculture, I have been interested in this topic afterward. Therefore, I decided to learn and study a topic about the origins of Japanese ancient agriculture, especially for the rice cultivation.

After learning and searching for some basic information about this topic, I have learnt and became more familiar with the geographical condition of Japan, for example Japan is a country with high humidity and adequate rainfall, and having many alluvial plain created by rivers, therefore Japan are having soil with high productivity. Another thing is Japan has a rice growing culture with a long history. Japanese have planting rice for thousands of year, and they putting a lot of effort on improving the variety of rice in order to adapt different weather or let it taste better, some famous example are Akita rice and Koshihikari.

The second point is that the origins of Japan ancient agriculture have a very close relationship towards other Asian civilization, such as China. Some scholars presents a scenario where agriculture spread from locations in northeast China to the east and north, and so the rice cultivation in Japan is probably starting in Kyushu which takes the route from Korea and the Yangtze river downstream.

The third point is about the begin of rice cultivation, during the start of Yayoi period, intensive agriculture, usually described as wet rice production, became established in Japan. In Itazuke ruins where located at Fukuoka City, and also a Yayoi period ruins, excavations revealed that various kinds of pottery and stone tools as well as nearby holes for storing rice. There are ruins of rice paddies near the village, and the existence of irrigation channels for diverting water from a nearby river. So we can conclude that the rice cultivation technology of that time was rather advanced, and revealed that at the final stage of Jomon Period, rice cultivation already entered Japan.

The fourth and also the last point, is about the other crop cultivation before the Yayoi period. Before the rice cultivation and Yayoi period begin, the prehistoric Jomon people of Japan, usually thought of as hunters and fishermen, also practiced farming. Because Jomon oral pathology, particularly the extent of caries, it is believed that the Jomonese ate much more carbohydrate, the source of the carbohydrate is felt to be taro as well as millet.

Shuk In, CHAN
The Chinese University of Hong Kong

1. General impression about the program

The Kyoto Summer Program is definitely a highlight of my summer, for what I have done and for whom I have met during the two weeks. First of all, I really appreciate Kyodai to host such an amazing program for us all and I am very glad that I could be part of the participants selected. I would not have been able to experience the active learning atmosphere here, to attend all these thought-provoking lectures and field trips, to meet all these lovely people including all the relating staffs, my Japanese sensei (who speaks amazingly fluent Mandarin!), all the supporters and all the students travelling here.

The diversity of lectures throughout the program has stunned me and inspired me a lot. It was really nice that we could attend lectures of different fields because we get to choose the courses that interest us the most in our home university but here I had the opportunity to get in touch with something that I have never experienced or even heard of. The seminar from Prof. Matsuzawa about chimpanzees not only made me rethink the relationship between primates (and animals) and human, but also stunned me how devoted one can be to his interest. The lecture about Japanese aesthetics and beauty is also inspiring as this is the first time that I could truly delve into aesthetic analysis. While we have Chinese poets writing poems about different kinds of beauty, the nature to romantic relationship, knowing how Japanese poets approach the beauty they find in life is worth our appreciation.

Another part I really enjoy throughout the program is how I could communicate with the supporters from Kyodai. It was to my surprise that many of them are indeed freshmen to Kyodai but they all showed their maturity as well as detail-minded personality. They come from different parts of Japan and study in different majors which I could learn more about the various cultures in Japan as well as the difference between Hong Kong and Japan, including education, voting system, entertainment, lifestyle (for which eating manner is definitely something we should learn!) and even gender issues in Japan. This kind of cultural exposure can never be replaced by barely browsing through the internet or even books but might serve as a lifelong change to myself.

2. Waste Disposal Management – a comparison between Japan and Hong Kong

During my stay in Kyoto, I was fortunate enough to experience the biggest fireworks festival in Kansai region – the Naniwa Yodogawa Fireworks Festival (大阪なにわ淀川花火大会) on the weekend. If we were not accompanied by the supporters, I don't think we would be able to get through all the crowds as there were estimated over 400 thousand people flocking to the Yodogawa river side.

We were all fascinated by all those creative fireworks blossoming in the sky. One thing, however, strikes me quite hard when I was leaving the venue. There was plenty of trash all over the venue which disappointed me quite a bit as I Japanese were always adored and praised by how they disciplinarily bring back their rubbish back home and sort it according to its recycle label. This kind of respectful and disciplinary manner contributes to the neatness and tidiness of Japanese streets. And thus I went back to hotel and started my mini research based on the observation I had in the Yodogawa Fireworks Festival. To my surprise, it was the Osaka government that allows participants to leave their garbage on the venue, taking into consideration that trash might be left on streets when participants were on their way home which would cause trouble to the stores and streets nearby. By 9am the next morning, institute recruited cleansers and volunteers had already cleaned up the place and the trash was sorted tidily.

Although I don't wholly agree on the government's decision, its intention cares about the citizens and stores living near the venue which is something the Hong Kong government should learn. As over 50% of the municipal waste is sent directly to the landfill without any kind of processing procedures which is clearly a waste and a huge burden to the environment, how Japanese government promote and educate its citizens to take back their own responsibility to the waste they create is what we should learn.

Nelson KEI
The Chinese University of Hong Kong

1. General impression about the program

Since I have never been to Japan before, the impression of this country was formed by watching Doraemon and Crayon Shin-chan along with enjoying Japanese cuisine in Hong Kong. There is no doubt that the Kyoto Summer Program has facilitated me in learning about the history, culture, innovation and

ecology in Japan. Simultaneously, the program has successfully offered me a platform to have a cultural exchange with students from Japan, China, South Korea, Germany, and Taiwan. First of all, the elementary Japanese lessons gave me a wonderful experience in learning a foreign language. It was interesting to know that how some of the Chinese characters transform into hiragana. I sincerely appreciate Professor Akagiri established a relaxing and interactive learning environment for us. Sometimes, I tried to use some basic Japanese to introduce to each other even though the sentences may be grammatically incorrect. Fortunately, the Kyoto University (KU) supporters gave us continuous assistance and encouragement during the class. Apart from the visit to Kurama temple and Kifune shrine arranged in the program, I am glad that the KU supporters planned a variety of cultural experiences for us. We went to the Fushimi-Inari Taisha, Heian Shrine, Kiyomizu Temple, and Shinsaibashi in Osaka. As a first-time comer to Japan, I am grateful to have them giving detailed background explanation of these sites. Another thing that the program has impressed me is the positive attitude of Japanese people towards their research and invention. I observed that the Japanese people are very concentrating on their work which makes them professional in their field. These observations were made during the lectures in KU and the two corporate tours to Nabel and Panasonic respectively. For instance, the lecture on the study of chimpanzees given by Professor Matsuzawa amazed me because his research methods to test the maximum intelligence and cognition of chimpanzees were unimaginable. These methods cannot be constructed without years of hard work and his passion for comparative cognition science can be strongly felt. Also, it was a pleasure for me to pay a visit to Nabel, a company that has a limited number of workers but owns 80% of market share in Japan and 20% world market share in the egg packaging industry. The sense of belonging to Nabel and the team spirit among workers were truly demonstrated when I was looking around in different working areas. There are still retirees working for Nabel, implying a strong bonding between them and Nabel.

Probiotics in Japan The human intestinal microbiota generally consists of 1,000 bacterial species. It is becoming clear that the gut microbiota composition is intimately linked to our health. The gut microbiota plays important roles in the protection against pathogens, synthesis of vitamins and immune system development. Also, an accumulating body of knowledge shows that gut microbiota can be shaped through diet modification and probiotic supplementation. In Japan, it is easy to get access to the probiotic food including miso and natto. The first probiotic-containing product that I knew was Yakult from Japan. According to the World Health Organization, probiotics are living organisms that will confer health benefits to the host when administered in adequate amounts. When I was a little kid, there was a slogan of Yakult which was “Have you drunk Yakult today?”. This slogan aims to encourage us to drink Yakult, improving our intestinal health. Despite Yakult contains a cultured probiotic called *Lactobacillus casei* strain Shirota, it was too sweet. I drank it every day when I was an elementary school student, resulting in a drastic increase in my weight. I realize that there is an excessive amount of sugar added into Yakult once I have started the food science and nutritional studies. There is no doubt that the mission of Yakult is beneficial for our well-being. However, the health concerns due to high sugar intake may arise. Therefore, I would like to introduce some alternatives for this probiotic drink that may lighten our worries when enjoying Yakult. In this day and age, a myriad of probiotic-containing products can be seen on the shelves of supermarkets and personal healthcare shops in Japan. These products can be in the form of capsules, powder, and dark chocolate besides yoghurt. If we encapsulate the probiotic powder or compress them into a tablet, our body no longer needs to absorb the extra sugar. It was noteworthy that chocolate would be a good carrier to bring probiotic across the gastric acid. If I were one of the product developers in making “Yakult Chocolate”, I would use dark chocolate that has at least 70% cocoa content. Furthermore, I would use dietary fibre such as fructooligosaccharides or inulin to replace sugar. This formulation would have a minimized sugar content with additional antioxidant effect. When I was in the supermarket like Fresco and Aeon, I discovered that the nutritional labelling information of different brands of yoghurt was so diverse. In fact, there are two key points to notice when choosing our ideal yoghurt other than looking into their sugar and fat content. Firstly, the ingredient list should be as simple as possible. This enables us to recognize whether the probiotic strain added is advantageous to our intestinal health. Secondly, we have to be aware of the expiry date of the product because it gives us hint about the presence of active probiotic. If the date is relatively close, it implies that the yoghurt did not experience heat treatment and the probiotic is likely to be present.

Yan Lok, LO
The Chinese University of Hong Kong

1. General impression about the program

I was so glad and lucky to be one of the participants of the Kyoto summer program this year. In these two weeks, I had a fruitful and joyful moment with the students from Japan, Korea, China, Germany and Hong Kong. I love to join different exchange programs because it is interesting to learn about the differences in thinking and lifestyle between various countries. We had attended lectures about various social topics in Japan and Japanese culture, visited numerous historical sites and heritages such as shrines and temples, exchanged our ideas with students from all over the world. Throughout these activities, not only our understanding about Japan have been deepened, but it has also boosted our thinking and reflections regarding our society. Kyoto is a city with the combination of the future and the past, there are a lot of high technology companies located here. For example, the Nabel company which manufactures high quality automated egg-packing machines. Apart from that, the historical heritages and natural scenery are preserved well, people living in Kyoto treasure the long history of Kyoto being an old capital city. They are restricted to build high and unconventional architecture in Kyoto. However, in Hong Kong, our land supply is limited, hence the buildings are tall and the greenery of Hong Kong are being considered for housing. Hong Kong focuses more on the future but not the past. Moreover, the people in Kyoto, especially the students from the Kyoto University were so friendly and responsible, even though they were busy at their studies and part-time jobs, they were willing to spare their time for us and be our guide. I still remember vividly that on day 2, we lost contact with one of the participants in Fushimi Inari-taisha, the supporters stayed till 9 p.m. there to wait for him. Furthermore, at first, I thought that the Japanese would be shy and bashful. However, it turned out that they were really active and easy-going. During the Japanese language class, the supporters offered their help actively of translating the teaching materials to us. It is also interesting to find out the kanji (the Chinese character) in Japan, mainland and Hong Kong are slightly different but very similar.

2. Automated External Defibrillator-the situation in Hong Kong and Japan We have given our presentation on the last day of the program, my topic is about the use of automated external defibrillator (AED) in Japan and Hong Kong. Throughout the whole trip, we could see a lot of AED on the streets in Kyoto, almost one unit on each street. Comparing to Hong Kong, we seldom see one AED on the streets as most of them are only located at big shopping malls and sports center. The use of AED is applicable to the cases of out-of-hospital cardiac arrest. In Hong Kong, there are around 5000-6000 cases of out-of-hospital cardiac arrests every year. The first aid before the arrival of ambulance is crucial as the survival rate will drop 7-10% per minute if no one is willing to perform first aid to the patient. In Hong Kong, the survival rate of out-of-hospital cardiac arrest is only 2.3%, while it is 5.2% in Japan. According to a survey done by the University of Hong Kong in 2015, only 12% of the respondents have received the first-aid training, 21% of them were willing to perform CPR and less than 20% of them were willing to use the AED. Recently, there is a report revealed that in the past 6 months, there were 5 people died in the sports center because of cardiac arrest, even though AED were available in the sports center, the staffs were not willing to use the AED because they were afraid of any lawsuit of liability if the patient turned out to be dead. Similar cases happened in Japan, in 2017, someone made a comment about the use of AED on female patient. The clothes of the female patient must be taken off in order to apply AED. Therefore, on Twitter, a man pointed out that it could be a sexual harassment and urged people should consider carefully before using AED on female patient. This caused a big trouble and misunderstanding in the society. Both issues raise a concern about the liability of the person when using AED. From the presentation, I have found out that Hong Kong and Japan somehow share a similar situation in various social issues, we can actually improve our society from learning the cases in Japan. All in all, this experience is precious and unforgettable, I wish to join more exchange programs in the future and visit to Japan again.

Hei Ting, HO
The Chinese University of Hong Kong

1. General impression about the program

Kyoto, a delicate city acting as a landmark of Japanese culture, is rich in history and humanities. Although this is not my very first time to Japan as well as Kyoto, studying in a foreign country still remained a lot of uncertainty which excited me a lot. It was a rapid decision when I decided to apply for the program as a try. My previous travelling to Japan brought me no priority to join the program, so the opportunity resulted in surprise and encouragement. Being an enthusiast of Japanese culture, I had studied current social circumstances in Japan so that school life in Japan is not a stranger to me. Owing to my sociology major in the university, I learned many of theories on deconstructing a society along with culture from the book but lacking an actual chance to practice out in real life. The program provided a remarkable platform to immerse myself in a familiar foreign

culture that I could engage and associate in depth. Since Hong Kong is a metropolis which administratively independent of the Chinese government, our education system only takes Hong Kong residents into consideration. With the geographic limitation, students from other prefectures are rare, if not impossible. This characteristic results in a smaller range of cultural diversity within a social class and age group due to the geological differences. Most of the teens should have close food preferences, ways of enjoying their leisure time and worldview under the precondition of a similar informative experience. However, there is a completely different story in Japan. After finishing their high school education, students with excellent academic performance will start considering their further academic development which is going to university. As most of the famous national universities are founded in the contemporary metropolis due to the long developing history of Japan, the talented from different prefectures will cross over their hometown and travel to the university to take the examination. Unlike the high school environment, the university turns into a diminished mature society with large in-group diversity. Notwithstanding their identical nationality, as a foreigner growing up in an urbanized lens view, experiencing and interacting between the fine in-group divergences during the whole journey was so unique that out of my impression and finally conceived of my question.

2. The complicated train system in Kyoto and the social bonding among the prefecture

Kyoto railway system is complicated, comparing to Hong Kong which only has one railway company. There are 5 distinct railway companies dispersed among Kyoto and each of them are operating around 3 rail lines. Both private and public railway companies coexisted in the city. Some private company operated as a corporation holding a variety of business. The Hankyu Corporation, as a private railway company, is famous for the department stores and other entertainment business, such as the Takarazuka Revue Company and the baseball business Koushien among the whole country. The multi-business model of a railway company in Japan is different from Hong Kong which enriches the impression towards an industry. Besides, there are also nationally public and local public railway companies in Kyoto which is the JR company and the Kyoto Municipal Subway. Different railway systems are concentrated in different parts of Kyoto and most of them are linked to another nearby metropolis, Osaka. With this convenient and large variety of the railway services, residents in Kyoto are able to cross over their prefecture easily for work, education, and travelling. In Kyoto, different railway systems are also connected to a different centre of Osaka, such as the Hankyu railways will reach the Umeda and the Kintetsu will reach the Namba within an hour. These highly developed railway systems have narrow the gap between people from distinct prefecture and increase the mobility among the countries. In Hong Kong, as our political, as well as historical reason, the daily life of Hongkongers, are highly relied on local facility rather than the mainland. Most of us grew up, educated and worked in Hong Kong locally. Instead of traveling to China during a long vacation, Hongkongers tend to travel overseas, such as Japan or other Asian countries. The social bonding toward the mainland is overall weak which is under the false impression of political independence. Moreover, without the highly overlapped transportation network to the mainland, the cores of our worldview is shifted among urban and global rather the country as an intermediate. In the foreseeable future, high-speed rail connecting the main city of China and Hong Kong will open to traffic. The situation in Kyoto might be a possible ending to Hong Kong due to the in-group cultural exchange prompted by the overlapped transportation network. No comparison about the political and social structure towards two metropolia in worldwide, the historical and political diversity is so interesting and essential that should be considered as another major reason lead to the further cultural differences between a country based metropolis and urban-based metropolis. Teased out our unique urban identity, Hongkongers will experience and react to a completely new story which may the circumstance of Kyoto as well as Japan is an extraordinary example for us to proceed to the future.

Yoojeong Kim
Yonsei University

In one sentence, Kyoto University Summer Program was the first impression of Japan for me. Above every other things, introduction of Kyoto University and the lectures gave me insight of how Japan treats academic disciplines thereby promoting long-term economic and academic competitiveness unlike how academic trend or culture have been fostered in Korea. Especially, unsparing investment on natural science and freedom that university faculties and students have regarding their research topic seemed to be definitely the points that Korea should model on for its long-term academic competitiveness since investment of Korean government and corporation have been excessively concentrated on disciplines that facilitate to chase short term profit blindly which in turn unbalances the development of the sectors thereby resulting in various kinds of social problems and detriments to long-term economic growth and well-being of society as a whole. How paleontology was flourished in Kyoto University was especially interesting since reflecting on the way Korean government and corporation financially support and incentivize the scholars, studies that does not satisfy

practical need of the Korean society would not have developed despite assuming that native monkeys had inhabited also in Korea.

Also, Nabel tour was great opportunity for me to revisit the contents that I had indirectly experienced by reading course reader. During the course called “Capitalism and its critics”, I learned that Japanese CEOs are paid about 30 times less than American CEOs and Japanese corporations regard sense of community as top priority which were a bit doubtful contents when I read about it in the course reader. However, the presentation of CEO reflected almost every content that the course reader described about Japanese corporation and it made me realize why Kyoto University was able to openly criticize its students’ low Toefl score which can be shameful thing for the prestigious university. Superficially, the criticism about the low Toefl score seems to motivate students to study more, but I thought it also implicitly shows their confidence stemming from firm Japanese small businesses which satisfy the youths’ desire towards research and strong community spirit which ensures life-long job in one single corporation and decrease the need for the youths to find job outside Japan.

By this program, I not only got insight of the nation itself but also found the people of Japan who I could model on. When we arrived to the hotel, the positive impression of Kyoto University people was create since they greeted us warmly and tried very hard to create welcoming atmosphere. Having close look at their dedication made me decide to apply for supporter of YKRF (Yonssei Fudan-Rikkyo) which I had hesitated before because of its time-consuming characteristics and my passive personality.

For 2weeks almost every day nayoung, heecue and me went to the shrine where supporters lead us to. Every shrine was different but beautiful in different way also possessing interesting commonalities. They used similar range and kind of colors such as arrangement of harmony between white, black, red. By being exposed to the color “red” in Kyoto both in the shrines and traditional markets, I was curious what Japanese perception of the color red would be. So the perception of the color of the particular nation including Japan can have two different perspective. First is color perception of the nation from the perspective of foreigners. Since it is gaze of the foreigners, most of the time it doesn’t have any rationale or logical train of thought but only the direct impression and intuition that Japanese people use red a lot. And the other perception is indeed the perspective within the nation formed among the native people. In this case, most of the people agree on their color perception based on their tradition, common sense, history, etc which compose the symbolic meaning of particular color. So Japan’s perception of red was very unique since both from the outside of Japan and within Japan, red was not conceived as symbolic or representative color of Japan but use red frequently as if it is their representing color. This frequent usage and perception of red is well reflected in the shrines because by the first impression, we can figure out that the tone and arrangement of red are not intended to be stand out even though the red color took most spaces which hugely contrasts with China. According to the research and my experience visiting Shanghai and Beijing when I was very young, both, from perspective of the foreigners and native Chinese people, red definitely seemed to be their representing color as its frequent usage proves. Then what would be the difference between Japanese usage of red and Chinese usage of red? So according to my research, using red in Japan has been purposed on chasing the devil and detriments out from our space or to wishing some auspicious things to happen interlocked together with imperial patronage, social status system, exchange with Germany, etc. Therefore, to easily put my research result about color perception of Japan, it is something like wearing red socks frequently because it is told that they have delivered people good luck by chance if one wears red socks. China is similar with Japan in that it is similarly wearing red socks. However, the reason is different. China might explain because the color red represents China the best and is the favorite color during all time. This contrast can be obviously seen from their shrines which stand out their red color very obviously straightforwardly expressing that they love red. And here back in Korea, I am studying about the color usage of the East Asian countries with more concrete supporting ideas.

Heecue KIM
Yonsei University

1. General impression about the program

It was such a wonderful experience living in Kyoto for two weeks. I was able to learn more about this city, which would not be able to achieve when I travelled Kyoto by myself last year. I highly thank all those supporters and members who helped myself so kindly, and I think those people are the most valuable things I received from this program.

I specially enjoyed my Japanese class (Middle Level 2 by Professor Uraki). Animation was one of the biggest momentum that made me to study Japanese, and this class allowed me to learn more idiomatic and practical Japanese sentences through watching the animation ‘Sazae-san.’ It was an unfortunate not to finish the whole class, but I believe that this class made me improve my Japanese class into higher level. Also, communicating with those Kyoto University students in Japanese, I was able to develop my colloquial Japanese skills and to

interact different cultures. In fact, I was able to acknowledge that there were many similarities and differences between Korea and Japan. For example, both countries have Karaoke culture, but in Korea it is for small group while in Japan it is for whole group's party. It was very new to see a party room in Karaoke.

Trips to those firms (NABEL and Panasonic) were another fun. Before I attended this program, I have visited Tokyo for our school's Global Career Tour program. There, I was able to learn about Japanese corporate environment. I found out again in this trips that Japanese firms care of people more than their profit. They try to raise employees and develop with them. When I saw this atmosphere in small-middle corporate NABEL, it was a fresh shock. I still can't forget the answer from NABEL's employee that he is working for NABEL only because it is close to his house. I thought that it is such a fortune that there is a company that one can work satisfactorily close to him or her.

Overall, this program made me think again about life in Japan in positive way. I always thought that it would be wonderful to stay in Japan for a long time and studying there. This extended my question about choosing my place for exchange student (I was thinking either Japan or Russia) and even, place for work as well.

2. Tea Culture in East Asia

'Cha(茶)' is a common language among Korea, Japan and China that means 'tea.' Tea culture is an unique, valuable culture in Eastern Asia. Those unique cultures well represent those whole cultures of countries in Far Eastern Asia.

To begin with, tea was first found in Ancient China. The earliest history about tea is by Shennong(神農). It is known in China that he used the tea leaf as an antidote. Then, in 780 A.D. Lu Yu(陸羽) wrote 'The Classic of Tea(茶經),' which is the first book about tea. This book wrote in detail starting from cultivation, production, storage, evaluation and to drinking way, and this became an important data for studying tea cultures in the world.

Of course, those countries which are near to China received that tea culture naturally. The first history about tea in Korea comes about in 'The Heritage of the Three States(삼국유사).' According to that, Silla dynasty emphasized drinking tea for social manners and develop of Buddhism from 6~7th century, and that continued until the end of Goryeo dynasty. However, from Chosun dynasty, tea wasn't important under Confucianism. Therefore, tea culture was not developed about 400 years, until Jeong Yak-yong(정약용) tried to re-develop by leaving books about Korean tea.

In Japan, the tea culture came in late compared to other countries. The first written report about tea is 'Kissayoujyouki(喫茶用上記)' by Eisai(永西) about 9th century. Eisai first seeded tea in Gouzanji-temple, but the amount of tea that Japanese people could receive was too limited. However, in 16th century, under the protection of Nobunaga and Hideyoshi, which were two major warlords and the time, Sen Rikyu(千利休) gathered the frame of Sadou(茶道), and tea became important.

In those three countries, tea culture has developed by their own ways. For each country, tea has become a part of a representative of cultural manner.

For Chayi(茶藝), it is a way of evaluating tea. Chinese people think that drinking tea is one of 'art' of daily life. They value drinking good tea with great scenery and music, which naturally made the development of tea. Of course ways of tea differ from each region in China, but there are 10 important points that Chinese tea books emphasize – color, scent, taste, shape, water, cup, time, temperature, brew and courtesy. This shows that Chinese people care about drinking tea in detail, as a proud culture.

Chalye(차례) is an ancestral rites that occur annually from Chosun dynasty. In the word, Chalye contains Chinese letter 'Cha.' According to the history of Chalye, the reason this word is contained is that the courtesy of tea culture was implied. People emphasized on the etiquettes for people and god, and tea was an important thing to serve. For Sadou, Sen Rikyu connected tea culture to Japanese floral art, architecture and manners. This culture, especially the way of producing and drinking became important culture until now. It is a strict tradition for mental training for both server and the guest, which highly represent Japanese culture 'Omotenashi(おもてなし).'

Nayoung JANG
Yonsei University

1) I would like to make two points about the 2018 Kyoto Summer Program. One is about people, the other about the contents of the program. To begin with, two weeks of the Kyoto Summer Program must have required substantial collective effort by the student supporters, professors, language lecturers and many others. I could always feel and appreciate their commitments. Especially the student supporters' commitments were felt, for they were always around me; during the morning language session, afternoon lectures by distinguished

professors and experts, corporation visits and sightseeings and even at karaoke nights, student supporters were with us. Though I was indeed grateful for all their commitments, I also felt something lacking. That is, I felt the overseas participants of the program were taking all the kindness or service of the supporters but not really giving much in return. For many times, I realized I and other participants were quite unilaterally getting help from the student supporters when we were together. The supporters had to find ways to all the sightseeing spots, brought us there and back to the hotel, checked if everyone is safe and present, sometimes searched for lost ones until late night and answered all the questions poured down to them. Some may think these are just duties of the supporters. But I was not just a guest to be treated. Not just my “general impression” but also reflections, thoughts and opinions of those who actually make this program possible indeed matter. I wonder what the student supporters gained, learned, felt by joining this program. What were their difficulties or frustration about the program? Or about us? How could have I and other participants, along with the student supporters from Kyoto University, worked together to make the program better? If we had time to sincerely reflect on the program together rather than dedicating the last day to overseas participants’ stage to give presentations and short speech, it would have been wonderful. I truly wish the program was great for the student supporters and want our relationships to last, built on mutual support and friendship.

In addition, the contents of the program itself should be discussed. Among different things, I was particularly looking forward to taking lectures by the Kyoto University faculty. But when I first looked at the program schedule, I was not quite sure why or how certain topics were selected to be lectured. For instance, why primatology? At the same time it was interesting too because in Korea, barely any university teaches primatology. But no specific justification as to why these topics were selected or explanation on what kind of significances of those topics have in Kyoto University or in Japan was given. It was same for one day trip to Shiga and Lake Biwa. I knew nothing (and still do not really know) about Lake Biwa’s history or significance. At the museum and from the lecture I learned a little, but even before then I felt I was not sufficient informed.

2) In the application form for the Kyoto Summer Program, I stated I wanted to meet activists and visit the sites of demonstrations. At Kyoto University, after seeing all the tatekans I realized how ignorant I was — in everyday life, Kyoto University students and all the other people have already been fighting for their causes and expressing their politics and ideas in different ways. There was no specific, designated sites or structures for activism; they come in every possible form and tatekan culture in Kyoto University was definitely intriguing one. On the one hand, it is interesting because it reminds me of “dae-jabo” culture in Korean universities. Back from the day when student activism and democracy movement were huge to today, dae-jabo still operates as a medium or platform for the students to express their ideas, expose problems within certain community, call for actions regarding socio-political issues in Korea. While the word dae-jabo itself has heavy political connotations, Tatekan seems to be used for more diverse and broad purposes, ranging from advertisement for the student club activities, festivals, important notices to political messages in university environment. Such differences and similarities noted, on the other hand, it is also interesting how the tatekans are under regulations these days by both the university and the city government. I wonder if this regulation can be connected to larger picture. For instance, can it tell me more about general social atmosphere regarding the freedom of expression, politicized student groups, social movements or even politics in general or conservative swing? I want to investigate this because as I interacted with Kyoto University student supporters, I noticed some of the students cautiously expressed that they feel sorry how the tatekans are unilaterally shut down by the authorities but they also pressed these tatekans are actually causing lots of “problems” and “troubles.” I would love to learn more about what kind of “troubles” the tatekans and student culture in Japanese universities are. Moreover, I want to know if the tatekans are also used to reveal hierarchical violence taken place between the seniors and younger students or between the professors or authority figures and the students, sexual harassment and violence, sexism and discrimination within the universities. In Korea, dae-jabos are frequently used to serve such purposes and often involved in or give rise to #MeToo movements. I wonder if tatekans also provide this kind of platform for Japanese students. It would be interesting to conduct research on tatekan and understand everyday life and activism in Japan.

Carmen, CHOONG
Yonsei University

1. General impressions about the program

I am very thankful to have been able to participate in this Kyoto Summer Program, which has gathered many brilliant individuals in a central location to learn about the history and culture of Kyoto and Japan. By bringing students from the top schools in East Asia and Germany together, I have been able to engage in meaningful conversations on the politics, history and culture of the region, and learn much from them. While the lectures offered by Kyoto University are introductory in nature, they did provide some insight

into Japanese politics, literary styles, geography, primatology research, epidemiology and food production processes. These are topics that I might have otherwise not been able to be exposed to or learn of if not for this summer program. The employment of Japanese students to translate lectures held in Japanese was also very well executed, and I am very grateful for the clear translations made. It might nonetheless be helpful if the lectures conducted by the university are more in-depth, critical or intensive so that participants can learn more.

I also found the corporate tour to NABEL very informative, and it opened my eyes to Japanese work culture, especially of that in a small firm. In contrast, the Panasonic museum tour offered little insight into Japanese corporate culture. Mr Konosuke Matsushita's perseverance and rags-to-riches success story was nevertheless rather inspiring to learn of. It would be great if corporate tours to NABEL or even a gaming company be conducted for subsequent summer programs by Kyoto University too.

More importantly, I am extremely thankful for the multiple Japanese students that were involved and worked very hard in this program. Since many of us are not fluent in Japanese, it was great that the Japanese students organized cultural visits and brought us out for food almost every single day. This not only made exploring the city a lot more comfortable, but also provided an opportunity for us to interact with Japanese students, learn more about their culture first hand, and create beautiful memories together. I also appreciate the fact that there was a specific slot in the schedule to visit Kifune-jinja and Kuramadera as these were exceptionally beautiful heritage sites. It will likewise be wonderful if the program continues to employ Japanese students and organizes visits to heritage sites like this. It might however be a good idea if the break between classes were slightly shorter. For instance, lunch could be shortened to 1.5 hours instead of 2 hours. This will allow classes to end half an hour earlier, and make time for travel and visits to cultural sites that typically close early at 5pm.

2. Facing the Global Food Waste Crisis

One of my favorite activities when in a foreign country is observing the way people behave. Of the many things that caught my eye in Kyoto, the way in which the Japanese consumed all their food no matter how full they were caught my eye. This was a behavior I felt was unique to the Japanese, and I perked up when Professor Naoshi Kondo briefly addressed the problem of food waste globally in class. Professor Kondo's lecture focused on ensuring better quality food and reducing environmental degradation through improved production techniques primarily. Given the consumption patterns of the Japanese, it is easy to comprehend how enhanced grading, storage and processing methods and consumption can align to reduce food wastage dramatically.

Such production procedures may be useful globally too, given the "cult of perfection" with regards to food. Food waste has been described as a "farm to fork" problem, where produce is disposed wastefully at 6 stages, namely: at the field, before shipment, in the truck, at supermarkets and restaurants, in the fridge, and at the table⁴. With enhanced production processes, the better quality harvest can be stored fresh for a longer period of time, and thus kept on shelves for longer and consumed.

Yet, improved production techniques only solve a part of the food waste problem. My experiences living in other cities in the world suggest that the Japanese experience of food waste reduction might be difficult to replicate elsewhere. Not many people treat their food with as much respect as the Japanese do; few restaurants offer the option to choose portions of different sizes. As a result, even if fresh produce is of better quality, they would still be wasted since they remain unconsumed and are disposed.

It would be more important to change food consumption patterns, and a plausible framework to do so can be seen through the San Francisco-Bay Area wide initiative called Imperfect Produce. The initiative offers home delivery for food that is often deemed too "ugly" to be sold in supermarkets, and educates people on how to consume them. Changing consumption patterns would be a more effective approach to reduce food that is disposed in general.

⁴ Goldenberg, Suzanne. "From field to fork: the six stages of wasting food." The Guardian, 14 July 2016. <https://www.theguardian.com/environment/2016/jul/14/from-field-to-fork-the-six-stages-of-wasting-food>

1. General impression about the programs

“Kyoto Summer Program for East and Germany Students 2018” was a great program, in which I have learned a lot. The schedule was quite good for it not only arranged Japanese classes and the lectures of different subjects, but also included the trips of nature reserves, historical sites, famous companies and so on. In Japanese classes, I have learned some simple but useful Japanese sentences and practiced a lot with my teacher and classmates, which gave me a lot of encouragement to continue the study of Japanese language after this program. The lectures in our program were wonderful, which showed the representative achievements in different departments of Kyoto University. For example, we were impressed by the lecture of Professor T. Matsuzawa for his excellent study of chimpanzees. Through the study of chimpanzees, Professor T. Matsuzawa suggested that in order to develop the ability of human languages, human gave up the ability of instant memory, which led to a deep reflection and discussion among us. In the lecture “The introduction of Kyoto University”, the professors and students talked about the history, the achievements and the current situations of KU, which unfolded a whole scroll of KU for us. As for the trips, I could feel that how deliberated and comprehensive our program was, for all the chosen sites had their own significant importance and influence in either Japanese history or current life. During the visit to the PANASONIC Museum, I was touched by the diligence and insistence of its founder Konosuke Matsushita. This museum also showed us the modern history of Japan by the exhibition of its numerous electrical appliances. What’s more, it have drew a beautiful blueprint for the future world by the high-technology of Panasonic Company, which inspired us to think about how to live a better life in the future. There are so many beautiful and precious memories in our program, but as the limitation of words, I cannot share them all in my final report. Thanks for this program, all of the professors, staffs and Japanese supporters are excellent, especially the supporters who gave us a lot of warmhearted companies and selfless help. I would like to give all my sincere thanks and best wishes to you all. I believe we can meet again soon in the future.

2. The Tanabata Festival in Japan

Thanks to “Kyoto Summer Program for East and Germany Students 2018”, I have got a good chance to see many traditional festival ceremonies in Kyoto. On August 9th, I went to the Kamogawa and joined in the Tanabata Festival Ceremony activities. It was such a beautiful and romantic ceremony, which inspired me to do the final report about the Tanabata Festival in Japan.

The Tanabata Festival is one of the most famous Japanese traditional festivals. According to Japanese folktales, there were two goddess Orihime (a gifted weaver) and Hikoboshi (a hard-working cow herder), they fell in love with each other and got married. However, they began to neglect their celestial duties after they got married, which incurred the angry of the emperor of heaven. The emperor of heaven punished them and separated them to the opposite ends of the Milky Way. They could only meet with each other on July 7th every year after they both diligently finished their own celestial obligations.

In Japan, the Tanabata Festival had several changes in different historical periods. At the beginning, it was a legendary story which came from China and then it became a festival held in the imperial court during Nara period. The emperor and aristocrats in the imperial court would hold poetry contests to celebrate the festival, just as what the Tang Dynasty did in China. In the Edo period, it became people’s festival and gradually merged with Japanese traditional stories, such as the story of tanabata-tsume. People would write wishes on tanzaku and hang them to branches of bamboos. On the next day, people would put these branches of bamboos and the lanterns in the river, and let them float with the water. In this way, they believed that their wishes would come true, and the bad luck would be taken away. During Meiji period, the Japanese government canceled this traditional festival, but there were still some festival ceremonies held in the local society. After World War II, the government began to encourage this traditional festival by a kind of commercial way, in order to recover from the economic crisis. Today, if you visit Japan, you can not only see the festival activities held by the private families, but also various ceremonies and commercial activities held by the government and the big companies.

Although the Tanabata Festival originated from China, there are some differences between the Tanabata Festival and the Qixi Festival. As for the Qixi Festival in China, it was a love story between the Weaver Girl and the Cowherd, between Goddess and human. In this legend, the Weaver Girl went to see the Cowherd at first, and they were separated by the Queen of Heaven for that Goddess could not be married with human. As for the Tanabata Festival in Japan, it was a love story between the Weaver Girl and the

Cowherd, but they were both Goddess, the Cowherd first went to see the Weaver Girl by boat, and they were separated by the Emperor of Heaven. In China, the Qixi Festival was mainly for female, who wished they could be clever and deft as the Weaver Girl so that they could get a true love and a good marriage. While in Japan, the Tanabata Festival was not only for female, but also for male and children, all the people could celebrate this festival and make wishes. At last, the Qixi Festival is celebrated on July 7th in the lunar calendar, while the Tanabata Festival was celebrated on July 7th after 1873.

The differences and changes between the Tanabata Festival and Qixi Festival reflect the changes in the culture and history of both countries. However, the legendary of the Cowherd and the Weaver Girl and its related ancient customs have enabled the profound traditional culture and unique craftsmanship to be passed on and inherited during different generations in both China and Japan. More significantly, it has conveyed the people's hope for true love and happy life.

Tainan CHEN
Peking University

1. General impression about the program

It's my honor to have the opportunity to take part in this program and I really cherish those shiny days spent with lovely teachers and friends in Kyoto. I want to say thank you for all the people who work so hard on this program and bring me such unforgettable experience.

The biggest fortune for me is to meet wonderful students from East Asia and Germany. Although it was a short period of time to stay together, we've established profound friendship during the two weeks. The supporters from Kyoto University spent so much time on guiding us around the city, helping us on Japanese study, caring for our accommodation and so on. Their enthusiasm and kindness will stay in my mind forever. Meanwhile, we international students gained big pleasure through studying together, playing together and living together. We not only acquired abundant knowledge about amazing culture and lifestyle in other countries, but also learned good qualities from each other.

Also, the Japanese classes and the lectures left a deep impression on me. On the Japanese classes, we made up groups and studied basic Japanese words and sentences with the great help of the teacher and the supporters. I was totally blind to Japanese before joining in the program and I found lots of difficulties as a beginner, however, I finally learned a lot because they were so patient and passionate to teach me. As for the lectures, Kyoto University offered us with lectures in vast fields such as politics, nature, food, literature and zoology. The descriptions, analyses and views provided by the knowledgeable professors are still vivid for me(I especially bear the lecture on chimpanzee study in mind).

The last but not the least, I really admire the beautiful scenery in Kyoto. The city is dotted with thousands of shrines and temples, which always reminded me to ancient Japanese history and culture. And those traditional buildings are truly in perfect harmony with mountains, trees and streams protected so well by modern people. Rambling on through those historical sights made me feel peace and delightful. And Japanese people seem to enjoy lots of traditional festivals. The softest thing moving my heart is to see boys and girls who go to the firework festival dressed in Kimono. In addition, I'll never forget those tender nights walking along the bank of Kamogawa River, feeling the cool air and hearing the sound of water.

In a word, the two-week program really opened a brand new world to me. I want to express my thanks again to everyone I met in Kyoto and I will remember those warm days for good.

2. Modern female university students' opinion towards late marriage and non-marriage: A comparison between Chinese and Japanese

Nowadays, both Mainland China and Japan are suffering aging and lacking labor problems, which are directly related to an increasing number of younger generation who choose a late marriage or even no marriage. And I found it interesting when many young female friends of me decided so, and all of them are highly educated university students. That may mean some vital changes happened on modern women. As we discussed about this phenomenon during the two weeks, I wondered where Chinese girls and Japanese girls think different or similarly on the issue and what are the reasons for the phenomenon. Therefore, I did a survey on 6 female supporters from Kyoto University and 6 girls from Peking University. By collecting ideas towards late marriage and non-marriage, I made a brief qualitative comparison between Chinese and Japanese.

The first result is about ideal marriage age. Most girls expect to get married between 25-35. Generally, Chinese girls prefer a later age to be married (later than 30 or higher), and they easily accept themselves to get married very late or stay single. But most Japanese girls don't want themselves to marry too late or stay single. As for the reasons for deciding the ideal age, both Chinese and Japanese pay much attention on completing the education. However, Japanese girls think more about suitable age for pregnancy and work, while Chinese

consider more about the couple's mental maturity and stable life. That may explain why Chinese girls tend to choose a later marriage age.

When it comes to why more modern young girls choose a late marriage or stay single, nearly all the Japanese girls mention that more girls are going to work and it's hard to balance work and family. However, only some Chinese girls think as above. Most Chinese conclude that through developing hobbies, girls can be independent and abundant mentally and they enjoy the freedom of being single.

Another factor that influence late marriage or non-marriage may be the open idea on the relationships between marriage, love and sex. Nearly all the Japanese girls think love relationship may have nothing to do with marriage, so does the sexual behavior. Enough love relationship can make girls feeling mentally full, so they don't expect a marriage. Chinese seem to be a little conservative. About half of Chinese girls can't accept love relationship or sex that have nothing to do with marriage. But the idea is becoming more open.

Finally, half of the girls think that there will be more negative than positive changes after getting married. Both Chinese and Japanese are worrying about losing personal space and privacy. We can see today's girls need more independence and space, but today's normal family may not do well in it. That may be another reason for late or no marriage.

That's the brief introduction about what I learned from the survey, and I will study further on this topic.

Shanyuanyu Du
Peking University

1, If I am required to describe the program with just one word, I would say, "comfortable". The schedule is well formed with serious Japanese classes on the hand, interesting activities and visiting trips on the other. Especially the Japanese supporters have brought us much help and original experience of the Japanese culture, which can't be replaced by any other people. These friendships with all those sweet peers are just too valuable to cherish. I remember the joy, when I write the birthday card for Miku and the appreciation for Kaho, when she helped me to deal with the cash problem.

Always thanks to all the supporters, professors, teachers and staffs, who offered their time and help out of no reason. Two weeks of time are just too short to understand a whole country or even a university. It is those communications between us and the Kyoto University's students that have narrow down the gap so efficiently. This word, "comfortable", can not only define my feeling with this program, but also my feeling with this city. While sightseeing the city, I found the beauty of contradiction of her. I believe, she is truly the combination of tradition and modernity, Japanese feature and western creation. For example, Kyoto city preserves thousands of temples and shrines, which costs way more than building skyscrapers. Even the height of the building here is not enough, but the height of the company's quality is definitely amazing. Everything here is changing with time but never lose the character of what they are. If I am exploring the ideal attitude towards life, I would appreciate this one. People are always growing, which is the truth that we can't deny. However, in which way we grow is much more important than the growing fact.

This program has provided me with so many valuable things, friendships, knowledge and most importantly, the ideal life that I always wanted.

2. Today my topic is what is 優しさ in the Japanese society? I would like to begin my report with very casual examples. "おかえりなさい", a normal sentence that people would say, when they welcome the family back. That's also what I heard when I got back to the hotel. Well, I am no family to them, I even may not understand Japanese. But they still do it every day with smiles on their faces. The second example happens in the program, the day we went to 伏見稲荷, we lost a member when we came back, I considerate the situation not so serious, but the supporters wait there until 10pm that day. After that I realize, if you feel comfortable yourself, that means some else have taken the hard part for you. That's what I've observed and what I am surprised. If you argue that the hotel does it because you paid for the service and the supporters do it out of responsibility. Then, let's make more examples. Traffic light, you may have notice, there is always five seconds of time when the both ways are red lights, which means, we offered some time for those rush ones to continue their ways and to keep them save, we would like to take our time. Five seconds are not long, but every five seconds in each crossing road may costs way more. Japanese people are just willing to pay the time to insure other's safety. Tableware, we all know that after the meal to give back the plate. Furthermore, to classify the tableware in different windows. Furthermore, to clean the makeup on it for easier washing later. Well, is it too much trouble for us? Yes, but it will also reduce the work for the kitchen. I remember at Nabel, the proprietor said in his presentation that "all for one and one for all." is the principle of the company. This sentence is much more easy to write than to do. Because you see, the precondition is giving and you don't ever expect others to pay you

back at once. Some people may take it for granted, while some others notice this kindness and treasure it, follow it, pass it on. So, if we take our trash home then we will get a beautiful and clean street without stinky for free. If we all flush the toilet and clean it every time after we used it, then we will get a brand new experience the next time. If we all follow the traffic instruction after firework party (花火大会), then we will all get home safer and sooner. What is 優しさ in Japanese society? I'd like to conclude it as, we take trouble for others and the same time for ourselves.

JIN LIXIANG
Peking University

1. General impression about the program

I am really appreciated that the first city I lived in Japan was Kyoto. And the first summer program I joined was the KYOTO UNIVERSITY SUMMER PROGRAM. Although it was my first time to Japan and two weeks were never enough for me to feel the exquisite city, I still learned and was moved a lot through this program. One of the most impressive experience in this program was that I'd met such nice people. Still I can remember most of those communications I had with the supporters and the teachers. We were such different whereas we were such similar. And despite those differences between us, we could still make beautiful memories through our conversations. Besides, in those days conversations with the supporters, I saw their enthusiasm, their worries and also their vigorousness to the future. I found that no matter how different our cultures are, we are just the same people living in this complicated world.

Another memory that I want to cherish is my impression of Kyoto. I scarcely saw any tall buildings in Kyoto except the shopping malls in Sanjo. I thought it was because of the earth quake until I asked the reason to a supporter. She told me it was for the conservation of historic and traditional sites. Once the city filled with modern high buildings, there won't be any traditional views which has always been the main spirit of this city. Last but not least, I've learned a lot from Japanese class. I've learned some Japanese words and sentences which gave me great fun to use it in daily life. And those values and minds reflected from the language did inspired me a lot.

Now I am alive with those precious memories made in that two weeks and thanks to those people and experience I can see the possibility of knowing each other better and making a more consonant world.

2. Connections and Features

Since I believe a person who want to understand the culture and spirit of East-Asia must know the Buddhism, I went to some temples in Kyoto to make comparisons with Chinese and Korean temples. And I did find a point of difference.

It was the color. Temples in Japan were coated with black and white. At the first time I saw it, I was shocked by its solemnity. I thought it was because of the huge scale of the temples until I noticed the colors. Since one of my great interests is to find the connections and features between cultures, I recalled what were temples in China and Korea like. Temples in China used red and yellow colors while temples in Korea were colorful.

According to my study, black implies self-control and discipline, independence and a strong will, and giving an impression of authority and power. And white offers an inner cleansing and purifying of your thoughts, emotions and, ultimately, your spirit, refreshing and strengthening your entire energy system. Red, corresponding with fire, symbolizes good fortune and joy. A red envelope is a monetary gift which is given in Chinese society during holiday or special occasions. The red color of the packet symbolizes good luck. Yellow, corresponding with earth, is considered the most beautiful and prestigious color. The Chinese saying, *Yellow generates Yin and Yang*, implies that yellow is the center of everything. Associated with but ranked above brown, yellow signifies neutrality and good luck. Yellow is sometimes paired with red in place of gold.

It reminded me of the personalities of Japanese, Chinese and Korean. Traditional Japanese values revolve around pride, honor, discipline, hard work, self-sacrifice, loyalty and modesty. They are loyalty, obligation, self-sacrifice and discipline which means they put more emphasis on harmony with others just like the color of black and white. Korean temples are colorful just as the characteristics of Koreans. They are permeated with feelings and emotions, they called themselves "people filled with emotions". Meanwhile,

In some perspectives, we can find a few similar cultures between these three countries. And we also added our own characteristics into the cultures. It means that we have possibilities to understand each other and keep developing personalities. Since it is such important to strengthen the belt between these three countries, to understand the connections and features between Japan, Korea and China will lead us to a more beautiful future.

1. General impression about the program

As a big fan of Japanese culture, I've been very much looking forward to this program since the moment I got in. Nevertheless, I was so surprised and excited when I first arrived at Kyoto. Though my flight was postponed because of typhoon, on the bus to Oyado Ishicho Hotel, all I see was the breathtakingly beautiful clear blue sky. And from that very moment a weary soul was settled. Perhaps that's exactly what people call "love at the first sight". Then we came to meet two of the supporters from Kyoto University, Teshirogi Sazuki and Hanafusa Tomoki. For the whole two weeks, Sazuki san has always been around for us, being patient, considerate and helpful. And Tomoki kun is a sparky boy whose fluent English and beautiful voices I believe deeply impressed us all. Though he can't see, he's got a heart as bright as the clear blue sky in Kyoto. In the following several days, we gradually got to know all the supporters, Rumi, Yuzuki, Ken, Keina, Miku, Mayu, Anna, Aya, Moe... with them everyday in Kyoto couldn't be more delightful. Also I'm grateful from the bottom of my heart to all the professors and staff members in Kyoto University whose endeavor eventually led to the success of the whole program. I really look forward to their visiting Beijing one day, and I will definitely try my best to be their supporter, to support them the way they did to me. This program turned out to have gone far beyond my expectation, and has already become so precious a memory I'll cherish forever. Thank you, Kyoto, for an unforgettable summer experience! また来ます!

From the Past, to the Future—Japan's tradition and modernity with Kyoto city as example

2. At the very beginning of this program I said I was a big fan of Japanese culture. I do not only fancy Japanese animation and music, but also find many qualities admirable, such as diligence, consideration and good manner. These qualities have played a very important role in the development of Japan toward a highly-developed society. Among the many successes of Japanese society, the delicate balance between traditional and modern culture is what I find most interesting. Furthermore, personally I think this perfect combination is best exemplified by the city we've been getting to know—Kyoto.

According to my personal experience during the past 2 weeks, Kyoto is a city that apparently has two sides. It is a traditional city renowned for historical legacy, with thousands of temples and shrines, traditional clothing and handcraft can be seen everywhere, and Kyoto people lead a very regular and healthy life. People get up early in the morning to go to school or go to work, and from time to time you can see people do exercise. Even shops in the most busy streets are closed by 10 in the evening, then the city falls asleep. On the other hand, Kyoto also has always been a pioneer in technological innovations. With information technology and electronics being its key industry, Kyoto is the home to the headquarters of many famous Japanese companies. Also excellent higher education and research institutions like Kyoto University can be found. Moreover, Kyoto is the hometown of many Nobel prize winners. Though Kyoto is not a typical big city, nevertheless we enjoy the convenience of living here. Mature tourism also contributes greatly to local economy. However, because of the perfect harmony of tradition and modernity it has achieved, we hardly noticed the blurred boundary between these two parts in our lives. In general, it can be said that life in Kyoto is convenient but not impetuous, people in Kyoto are progressive but not anxious. We can see that Kyoto strikes a delicate balance between tradition and modernity. And I wonder how Japanese people achieve this kind of balance.

There are three main factors contributing to the successful preservation of tradition. Without doubt, effective legislation is involved. Japan has one of the earliest and most complete law systems for traditional culture preservation. Legislation for traditional culture preservation started not long after the Meiji Restoration of 1868, with the enactment of the Plan for the Preservation of Ancient Artifacts. And now the Law for the Protection of Cultural Properties provides legal support for the protection of a wide range of cultural properties, including tangible and intangible cultural properties and historical sites, Places of scenic beauty, and natural monuments.

The second most important factor is sufficient funding. One thing that we should especially take notice of is that funds are not only provided to existing cultural properties, but also to people who are relied on to continue the tradition. Last but not least, education plays an essential part in tradition's passing down from one generation to the next. And the key point in education lies not in cramming relevant knowledge to people's heads, but to increase the chance of getting in touch with tradition as much as possible. Tradition is not preserved in a shelf, it should flow in people's blood, and live on in our lives.

Apart from preservation of tradition with distinguishing characteristics and merits, Japan is also well known for leading the world's technological innovation, fashion, architectural design and so on. While people usually focus on modern technology research and application, I would like to mention the preservation of tradition as a very important basis. Japan's success in achieving perfecting harmony between them already hints that they should not be looked into in a completely separate way. First of all, tradition is accumulation

of culture from the past, like a staircase it offers people mental nourishment and abundant resource of inspiration, enabling us to reach for higher achievements. Apart from that, it's also indispensable in preserving the long-developed virtue of a people, giving them inner motivation to ceaselessly pursue. For instance Zen Buddhism has fostered such mental qualities as preference for self-reliance, the direct approach, and a willingness to work hard and to sacrifice comforts. Confucianism emphasizes learning and group harmony. Shintoism encourages the open acceptance of sensual gratification. It is argued that these values have shaped the course of modern technology in Japan, a course that both advanced and developing countries can learn from.

Another important factor is openness and freedom. Innovation is the art of excavation of potential. Therefore space for imagination, for improvement and development is definitely needed, both in terms of actual space and invisible time and spiritual world. Openness, as we know, has long been the worldwide famous virtue of Japanese people. However, also we shouldn't neglect the fact that Japan has never accept foreign cultures unconditionally or blindly. She has a strong stability against the excessive influx of foreign elements. usually at the beginning of her important reforms, Japan was strongly fostered and stimulated by foreign cultures, however, later on tradition begin to revive in a whole new way with improvements based on advantages of foreign cultures, which eventually make foreign culture contribute to Japanese society in a most effective way, and therefore perfectly become a part of it. Freedom allows creation, with Spare time and energy for bold imagination and unusual ideas, which provides us with A somehow detached point of view, a breakaway from daily life, based on which creation is possible. The picturesque scenery, tranquility and the peaceful life in Kyoto is what I believe to be the underlying impetus for innovation.

Last but not least, the character of Japanese people lies in the very center of Japanese culture. Ceaseless effort towards perfection, built-in urge to progress, careful detail management, and the quality individually demonstrated as consideration and socially demonstrated as a sense of responsibility. These can be found in Nabel, in Panasonic, in responsible teachers and supporters from Kyoto University, in our hotel manager, and basically everyone you meet in Japan. That's what truly makes this country fascinating and admirable.

Tangxing, Liu
Peking University

1. General impression about the program

I still can not believe that the program has already ended in 11 August. The program is a wonderful dream that I don't want to wake up from.

In Kyoto Summer Program 2018, I was deeply impressed by the beauty of Japanese landscape and helpfulness of the supporters.

Japan used to lead the economic development of Asia, and still is one of the leaders in economy of the world. With a prosperous economy, Japan is able to maintain a beautiful environment. At the same time, Japanese leads an environment-friendly life style which we should learn.

When it comes the lovely supporters, I must say that they're really considerate and helpful. It's my honor to meet and make friends with them. Only with supporters' help can we finish the program successfully. I want to express my gratitude to Sazuki especially. She's really kind and patient, offering all kinds of guidance to us.

This is the first time I've been to Japan and under the help of Kyoto University I've learned a lot about Japanese language and the Japanese culture. I am really thankful to the teachers, supporters and all the Japanese people who have helped me. It's an unforgettable memory for me and I hope to go to Japan again one day.

2. Environment Changes in Japan and China

The topic that first comes to my mind was the various temples and shrines of Kyoto. And that's exactly the theme I talked about in the final presentation. But I changed my mind when I come back to my hometown. Because I found something different—the sky was not as blue and the streets were not as clean as those in Kyoto. What's more, I can no longer see the stars ahead in the dark night due to too much dirt and light in the night.

That's not only the case in my hometown (Ganzhou, a city located in Southern China). In fact, many cities face the same disturbing problem—environment deterioration.

When I started to study in Beijing in 2015, the environment there in winter was disappointing. It's very cold in winter, so the government burned much coal to provide warm vapor steam to the household. However, the process of burning coal omitted a lot of CO₂, SO₂ and other green-house gas, finally leading to the heavy haze in Beijing. In days of haze, everyone had to wear masks for the sake of health. To some extent, the bad weather was a barrier to a civil society.

Hopefully, things get better and better in Beijing after 3 year's effort to control the pollution. I can always enjoy the pretty landscape of Beijing under the blue sky without any haze now. And the environment of my hometown also improves a lot, though still not as good as that in Beijing or Kyoto. The transformation of

environment happens all over China.

How does the transformation happen? As far as I know, the central government of China used to assess the officials only by the GDP. And that gave the officials much incentive to develop the industry which could boost the economy, putting the environment aside. That's why the environment of many places had deteriorated. Things began to change after the new president came to power. The central government modulated the assessment standard, adding the environment condition into the assessment list. As a result, local governments conducted many programs to improve and maintain the environment. The process of protecting the environment is still on the way.

Let's turn to Japan. I believe that everyone who comes to Japan for the first time has the same feeling: the environment is so excellent! I don't have to mention too much, just giving one point is enough—you can see the stars in the night. It's the most memorable experience to lie alongside the Kamogawa River and see the twinkling stars.



Picture 1: The Kamogawa River

Here comes the question: dose Japan always keep such a good environment or has Japan gone through a same transformation just as China? To find out the answer, I did some research. And the answer is that Japan is not “born” to be a clean and tidy country. Actually the environment used to be really awful in Japan in 1960s. After world warII, the economy of Japan began to take off under the help of America. In that time, Japanese people didn't give much attention to the environment protection. And the environment of Japan deteriorated because of industrial pollution. It finally gave rise to the heavy haze in Tokyo, just like the case in Beijing. It took Japanese several decades in environment management before Japan finally turned into prestigious country famous for its tidiness.



Picture 2: Tokyo with heavy haze, 1968

And in the program there's two lectures referring to the pollution of Japan. One is about the minamata disease (水俣病), the other is about the Lake Biwa (琵琶湖). From these lectures, I know that up to now the Japanese government has not solved the issue of minamata disease thoroughly. Many residents who got minamata disease due to the chemical pollution are not officially recognized as the victims. Therefore, they can't get the compensation and many of them lead a hard life. As to the Lake Biwa, the water there deteriorated in 1960s, and it took the government over 30 years to make the lake clean again. So we can conclude that for both Japan and China, the development model is very similar—to pollute firstly in exchange of prosperous

economy and then start to restore the broken environment. That's exactly the old-fashioned viewpoint of "grow now, clean up the environment later". Japan has gone through the whole process but China is still in the way. Honestly speaking, that's really a bad way for social development. It is inefficient and not environment-friendly. That's why we advocate sustainable development now. Sustainable development, by the definition of Wikipedia, is the organizing principle for meeting human development goals while at the same time sustaining the ability of natural systems to provide the natural resources and ecosystem services upon which the economy and society depend. It indicates that when developing the economy, we should take the environment into consideration. After all, nobody will feel happy if surrounded by tons of smelly trash. I hope that sustainable development will be adopted by everyone and all the countries. And under the guidance of sustainable development, I'm confident that before long China will become a beautiful country like Japan!

Hanyu WANG
Peking University

General impression about the program

The program was well-structured and properly designed. The program could be divided into four parts: Japanese language, lectures, sightseeing and visiting, and communication with other students.

As a beginner in Japanese language, the level 1 Japanese course was very clear and understandable. In such a short time, we had no time to go over Kana. Instead, we learned a lot of useful expressions. In the class, the teacher served as an organizer and the teaching work was done mostly by Japanese supporters, which was, seemed to me, a great idea because we could get individual tutorial on pronunciation.

The lectures covered a wide range of subjects, which was quite impressive. Some of the lectures were interesting and captivating. For example, the one in primatology. I knew before that Japan is very strong in primatology and the professor was very informative. Some other lectures, seemed to me, could be improved a little. Lecture might be different from PPTs otherwise we could just read them by ourselves. Thus, I would suggest that lecturers should add more explanations expect from PPTs and have more interactions with students. We visited a lot of temples and shrines, which was very beautiful and demonstrate the profound history of Japanese culture. I was interested in religion so the sightseeing help me a lot. The natural beauty and architectural elegance in Kyoto were also amazing. Visiting in two companies, NABEL and Panasonic, was one of the best part of the program for me. In NABEL, the lecture delivered by the CEO gave me a new idea of management and entrepreneurship. Panasonic demonstrated Japanese dedication and tenacity. It might be better to change some of the lectures in university into more tours into local company and culture sites tour. After all, we could read books and attend lectures in our home country but the indigenous culture could be never experienced elsewhere.

I would say that I learned most from Japanese supporters and other international students. Through the supporters, I could see how students in a different culture spend their youth, what were their expectations about society and life. The supporters were all extremely kind, polite, and helpful. There were a lot of things, like manners, dedication, responsibilities, I could learn from them.

All in all, this was a superb experience and extraordinary opportunity for me to learn. I decided to learn Japanese further and know more about Japanese culture by working or studying there.

2. Japanese Etiquette

I have been to Japan twice, each time, I was struck by the manners and politeness of the Japanese people. Starting from the airport and the customs, people were bowing and saying respect words to me. One of the difficulties of learning the Japanese language was that the respect word system was too complex. The social environment in Japan was very friendly. This could be seen in daily details. For example, the bus driver said thanks to everybody and the servants in the restaurant had a complex set of language to show respect for customs. Even taking a bath had rules and procedures. Thus, I decided to learn more about Japanese etiquette. Since this topic was extremely huge and complex. I could barely get to the surface of it. The question I want to figure out is why. Why Japanese people are the most polite people I have ever met. In order to answer that question, I read some literatures. Some scholars argued from an socio-economic point of view, saying that politeness was a way to incorporate other cultures and communicate in a trustful and responsible manner, and in the end, the function of politeness could be deduced to power and social construction. I myself, however, maintained that although social construction could partly explain the polite phenomena in Japan but the core of Japanese people's politeness might come from their character and inner understanding. Being convinced that literature and real life had a gap, I consulted some Japanese students why they were so polite. Some of them said this was taught when they were small children and others just answered that it made them feel good. I have a more romantic guess that Japanese were just more amicable and courteous from inside. And the more I communicate with Japanese people, the more I was convinced that the national character just had a built in

manner.

Nevertheless, some etiquettes, seemed to me, are too complex. For example, the bowing and respect rules between men and women, people from different hierarchies were kind of too courteous. These complex manners might do make people feel good and aware of their social class. But it may also impede effective communication in society and workplace. In the final presentation of the program, A student presented gambling business in Japan. Suicide rate in Japan is also among the highest in the world. It seemed to me that people may face great pressure in society due to complex manners, which should also draw some attentions.

Jia XU
Peking University

1. General impression about the program

This is my second time to visit Kyoto. If two years ago I was just a traveler who caught an exciting glimpse of the fascinating scenery of Japan in a hurry, this time I have to express my sincere gratitude to Kyoto University Summer Program, which provided me with a precious opportunity to know the city of Kyoto again.

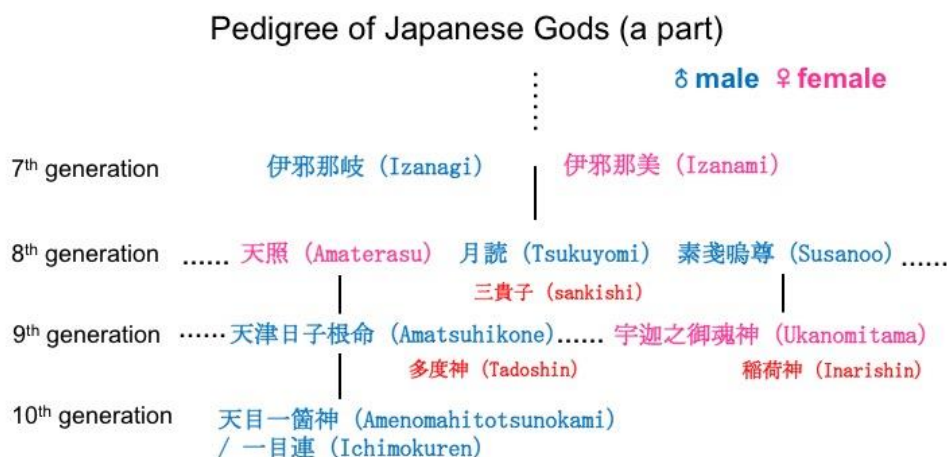
Two-week time can be short but also long. It's short as at present I'm seated in the library of Peking University, missing all of you. Miss you, lovely professors and supporters. Without you, we couldn't live a pleasant life in Kyoto so easily. Miss you, interesting guys from various culture backgrounds. Though in reality I was unable to make much deep communication with you due to language gaps and my poor foreign language level, I was still so glad to listen, to speak out and to laugh with you.

It can also be long. Because I truly lived in Kyoto but not merely traveled to it. As the professor said on the completion ceremony, I won't confuse Kyoto with Tokyo anymore with two-week memory in my heart. Now when it comes to Kyoto, the pronunciation of the city name reminds me of those rosy dawns over Kamogawa, ice coffee from vending machines, red Torii standing silently, and alleys sleeping at night with lanterns hung under the corner of roof... Varieties of fragments rush to me, the whole of which makes up an unforgotten image of the city. This is Kyoto, who has preserved her characteristics and tastes through in the river of thousand-year history, but also offers modern convenience to her residents, setting a connection and striking a balance between the past and the present. Here I came across refinement, elegance as well as tranquility, or say, peace of mind. I've taken these meaningful treasures back to China, and pondered them over from time to time. In conclusion, I need to say thank you once more to dear Kyoto University and dear you. This summer program has inspired me to learn Japanese harder and harder, and allowed me to feel what's Kyoto, (maybe in my opinion or our opinion) the kokoro(「心」) of Japan. This is the second time I visited Kyoto but never the last time. As a Chinese saying goes, we will meet again if destiny has its way (「有缘再见」).

2. Japanese shrine culture, compared to that in China

1 Three Kinds of Shrines in Japan

From my perspective, shrines in Japan can be divided into three kinds. It's necessary to distinguish shrines of Shinto from temples of Buddhism before making the division. Shinto is a traditional religion in Japan. About Shinto, there are two important books Kojiki and Nihon Shoki written in the 8th century, which contain lots of myths and legends. The first part of them Kamiyo no Maki tells us a pedigree of Japanese gods shown as picture below.



This illustrates the first kind of shrines, in which gods are in a family pedigree. For example, there are shrines of Izunagi and Izunami in Ise for the 7th generation, Tsukiyominomiya in Ise for the 8th, Fushimiinari Taisya in Kyoto for the 9th, and finally Ichimokuren Jinjya as a part of Tado taisya for the 10th. I assume this makes up most part of Shinto shrines.

The second kind of shrines is for Japanese Emperors or Empresses. As an illustration, Meiji Shrine in Tokyo is for Emperor Meiji, who made great contribution to Japan by supporting Meiji Restoration. Therefore, Japanese decided to build a shrine to memorize him after his death.

The third kind of shrines is for special and outstanding persons in Japanese history. Seimei Shrine may be a good instance. It commemorates Abe-no-Seimei, the leading onmyoji during the period of Heian, who can drive evils away and keep people healthy and safe.

Xiaoqing, YANG
Peking University

1. General impression about the program

As soon as I walked out of the Oyado Ishicho Hotel, I have started missing supporters and friends of this program. Everything in Kyoto fascinates me so deeply that I even dreamed about it after coming back.

The Japanese lesson in Level 2 class is a little bit difficult for me. But supporters and teachers always encouraged me to move on. They corrected the mistakes of my essays patiently and helped me pronounce over and over again. I was moved by their kindness and devotion. Every staff of this program is conscientious. Every day, supporters tried to find some interesting places for us. It took a long time to gather all the students. To make sure that everyone is safe, they have to check the amount of people for many times. It is tough but they still persist in doing it. Because of their sense of duty, we can have a enjoyable trip. When there is something wrong with the schedule, teachers always deal with it as soon as possible and apologize immediately. Everyone is so nice!

The hotel we lived is not far from the campus. Every morning, we walked to the Yoshida International House. When passing the Kamogawa River, I can not help taking photos of this beautiful scenery. After 12 days, I am familiar with all the streets near the campus. Besides, Yoshida dormitory is interesting and students of Kyoto University are very energetic. Also, the lectures broaden my view. Using the student card of this program, I can enter the museum of Kyoto University and Kyoto National Museum free of charge. All of these things made me feel that I am a real student of Kyoto University and a real citizen of Kyoto. This program gives me a sense of belonging.

What's more, during this program, I make a lot of friends with students from different countries or areas. The program provides a platform for us to communicate and impels me to be better.

Time flies, but the memory of this program won't be lost. I sincerely hope that I can come back to Kyoto and meet these dear supporters very soon. Thanks to this program, I found motivation again.

2. Kara-mon gates in Kyoto

During the program, I tried to visit world cultural heritage sites as frequently as possible. When I entered one building, the gate always attracted me most because of its unique color and beautiful decoration. They are similar to Chinese gates but still different. So, I read the explanation card carefully and did some additional investigation about this kind of special gate.

The Kara-mon gate is a kind of gate which usually represents the highest status in Japan. In Japanese, Kara means Tang dynasty, which is a symbol of China. Mon means gates. So, the Kara-mon gate is also called the Chinese gate. It is also known as the "All day gate" (日暮らし門) saying that one could lose track of time and spend an entire day admiring its lavish decorative carvings⁵.

There are 3 famous Kara-mon gates in Kyoto. The most famous one is in Nijo-jo castle, also known as the national treasure of Japan. The second one is in Toyokuni Shrine, which is less lavish. The third one in Hongwanji is being repaired now. Usually, the Kara-mon gate has arched part which is called Karahafu (唐破風) in Japanese. It has gorgeous colors and exquisite decoration, often decorated with gold and other precious materials.

However, according to the research of archaeologists, we never see this kind of gate in the temples of Tang dynasty in China. From the photos of Foguang Temple and Nanchan Temple, the roof is straight without curved part. What's more, the lack of decoration makes it plain and simple. So, there is actually no connection between Kara-mon gates and gates of Tang dynasty in China. Considering that most Kara-mon gates are built during the 15C to 17C, we can also compare them with gates of the same period in China.

⁵ <http://www.hongwanji.or.jp/english/hongwanji/architect.html#ken03>

Whether the Chinese paintings or the tombs of Emperors in Ming dynasty, it is totally different from the Kara-mon gate in Japan. During ancient Chinese history, it is difficult to find such arched part in the architecture. While in Japan, not only in Kyoto, but also in Uji and Nara, this arched part is almost everywhere.

In my opinion, the Kara-mon gate may never exist in Chinese history. Some Chinese people think it is actually a kind of Japanese gate. However, it doesn't mean this gate is meaningless. The design and name of it contains Japanese imagination of Tang dynasty or China. Also, it reflects the aesthetics of that period. Just like Lamian, it has different meanings in China and Japan. The Chinese culture is quite similar with the Japanese culture, but I think the most important thing is to classify the characters clearly so that we can compare them more efficiently.

2) Comparison with Chinese Taoist Shrines

In this part of the report, I will make a comparison between Shinto and Chinese Taoism with other folk religions, especially Taoist shrines. Here I list five points of their differences.

(1) Origin of Gods

As mentioned above, most of Shinto gods are in a family's pedigree, which means they were born to be gods. But as for Taoism, this is not usually the case. In the definition of Taoism, the character Shin(「神」) diversifies from Sen(「仙」). To become a Shin, people should make great achievements, while they have to work hard and obey variety of regulations to be a Sen.

(2) Image of Gods

Shinto gods are invisible, like Mitsuyominomiya in Ise. It's a tiny wooden house. Japanese believe Tsukuyomi stays here but they can't see him. However, gods are visible in Taoism. They have bodies and believers can imagine what they look like and thus draw pictures or build statues for them, just like Bixiayuanjun and Yuanshitianzun.

(3) Gender of Gods

Unlike Shinto, where the female gods almost make half part of the total, there are not so many female gods in Taoism.

(4) Location of Shrines

Shinto shrines can be located in a commercial district, such as Yasaka Jinjya near Gion. But Taoist shrines are far from places where people live, often in a mountain.

(5) Gestures to Show Respect to Gods

In Japan, believers wash their hands, and then bow twice, clamp hands twice, finally bow once. However, in China, believers often kneel and kowtow.

Clemens, Rade
Heidelberg University

1. General impression about the program

With great gratitude I am looking back on two very interesting and diverse weeks, that not only introduced Kyoto University and Japanese culture, but also earned me great friends and new experiences. Therefore, I would like to begin my essay with expressing my sincere thanks to the organizers of the 2018 Kyoto Summer Program for making this exchange possible and worthwhile.

The first part of my short essay is based on my general impressions about the Summer Program specifically focusing on lectures, Japanese language class, the corporate tours, cultural activities and fringe events.

The seven lectures (Lake Biwa included) presented to us international students were really well selected and both informative as well as fun. From my point of view the most important lecture, corresponding with the idea of this program, was the "KU introduction", since it addressed orientation and academic principles of Kyoto University. Most other lectures supported us developing detailed ideas of the countries economics, culture, and perspective. Even though the lectures covered a wide variety of topics researched at KU's institutes from art in classic literature, over agricultural assets, to biogeographical estimation, I would have loved to get a more general introduction on Japan, including a self-guided comparison to the equivalent systems of our home countries. Above all, the lectures were really eye-opening and encouraging.

For seven consecutive days the mornings started with Japanese language class. All four levels were chosen carefully and with big help from Japanese supporters great progress could be made during the program. Akagiri sensei's methods and didactics were superb. He managed to coordinate diverse language ability and background, creating a playful class with a strong working environment.

Moreover, the corporate tours worked as a great addition to the overall program. Both Nabel and Panasonic offered a detailed look into Japanese economy and working philosophy. Nabel in particular really prepared their corporate tour and enjoyed our interest in the company's family characteristics. Overall both visits were

well chosen and perfectly well-rounded, representing the diverse Japanese economy.

Lastly, I would like to address cultural activities and fringe events in one paragraph, since both topics share common characteristics. Throughout the whole program the support from Kyoto University students was phenomenal. Not only their help in the language classes and their relentless motivation answering questions about culture and tradition, but also their organized activities and care about the visiting students was simply terrific. The fringe events, framing the Summer Program, were held in a similar perfect manner. This highlighted Japanese attributes in general, but specifically to this program. It has been my greatest pleasure being guest at Kyoto University this summer and a great honor representing Heidelberg University for the first time at a KU Summer Program. Consequently I cannot thank all supporters and organizers enough for making this program worthwhile and giving me the greatest insight possible into the Nippon way.

2. Natural catastrophes in Japan – Understanding changing occurrence and trajectories of typhoons.

Every year Japan is hit by approximately five to seven typhoons. During the KU Summer Program only the country was hit by two. This might be part of the regular climatic summer phenomenon, but in the summer of 2018 changing climatic elements need to be assessed and brought into context to understand changing .

With its 6852 islands, Japan's existence is based on tectonic movements. With several plates colliding and being specifically exposed to the westward subducting Pacific Plate, Japan is faced with regular activities of its 108 active volcanoes, earthquakes, and tsunamis. All together these natural catastrophes cause unnecessary deaths and destruction across all Japanese islands. Among all disasters Japan is confronted with, this essay will focus on typhoons, since a category two, named Shanshan, was rolling past Kyoto in early August during the Summer Program at Kyoto University.

Firstly this essay will focus on conditions for the occurrence of typhoons, then on the specific naming scheme, and finally on changing climatic factors and future directions.

With its southmost tip Japan is reaching 24° northern latitude and is therefore part of the subtropical climate zone. This brings temperatures well above 30°C on land, but also water temperatures hit more than 25°C. For a large scale tropical low-pressure system to fully develop to a tropical cyclone, ocean surface temperature has to rise at least above 26,5°C. This phenomenon often happens in the tropical pacific, where solar beams are coming in vertically, heating water and initiating latent energy transportation through vaporization. Through trade winds and the Coriolis force a counter-clockwise rotation on the Northern Hemisphere is initiated and wind speeds reach up to 350km/h. With their regular trajectories westbound, the tropical cyclones located in the Pacific are most likely to hit western Pacific countries, that have access to the ocean. Among these are the Philippines, Thailand, Vietnam, Cambodia, Hong Kong, China, but also Japan, just to name a few. Among these countries it is the Japan Meteorological Agency assigning names for specific large scale tropical low-pressure systems, that gain the status of a tropical cyclone, also known in the Pacific as typhoon. All 14 countries being in the danger zone and therefore exposed to typhoons have contributed each 10 names to a list, which is cycled through while naming the storms and started again, after the last name was given. With damage of more than 1 bio. ¥ or causing more than 300 deaths the storm has reached a magnitude where it shall be remembered and therefore it's name is retired from the list and will never be used again.

New satellite sensing technology allows to improve stochastic typhoon modelling (STM), which showed an increase in size over the last decade, but not in frequency of their appearance. This typhoon modelling scheme also shows an increase in average wind speeds. As a consequence thereof development will surely lead to more damage and catastrophes caused by typhoons. Consequently more prevention arrangements have to be implemented, evading damage and fatalities.

Joel Guschker
Heidelberg University

1. General impression about the program

The program was a wonderful experience to understand Japanese culture and society better, get in touch with Asian students interested in social sciences, and to explore the city, as well as the university of Kyoto. Particularly the Japanese classes and the contacts with other likeminded students, might likely impact on my professional and academic future and thus I am very grateful for Kyoto University to have organized and invited me to this program.

Meanwhile, the information that had been sent to me in the call for applications, as well as after my acceptance to the program, could have been improved. The call for applications, as well as the subsequent emails and online information on the program hardly allowed to deduct the program's academic focus. This should be improved by clearly stating, that the program is primarily designed to attract students to Kyoto University for further studies. A second point of critique is about Prof. Kondo's lecture on food production, in which he pointed out the impressive technologies used in Japanese food production, but compared them in my view

inappropriately with food production in South East Asia. One of the quotes of Prof. Kondo that stayed in my mind is “Thailand? Food production is bad”. The reoccurring pattern in Prof. Kondo’s presentation, in which he compared the ideal (“Japanese”) way of food consumption and production with consume and production pattern in other countries, who in his understanding clearly use inferior technology, as well as they supposedly have to change cultural aspects of their respective food consumption patterns seems and seemed politically incorrect to me, and might have intruded the feelings of the respective South East Asian students present in the room.

This was however the only element in the program that I found problematic, and I am very grateful, for having had the experience to participate in the Summer School and learn more about Japan and Kyoto University. Concluding I am expressing my profound gratitude, to those who have helped organizing this Summer School and who made it so wonderfully lively, informative and interesting.

2. The Shinbutsu bunri and invented Traditions

„Going to the temple enables you to experience and learn about Japanese history and culture better than simple text book reading” -Participant of the Kyoto Summer Program 2018

While the reliance and emphasis on traditions seems to constitute an essential part of modern Japanese culture and society, many of the traditions that are visible to the foreign observer have not evolved through a cultural process of norm formation, but through mere government intervention. The *Shinbutsu bunri*, in other words, the forceful separation of Shintoism and Buddhism is one of the most prominent examples of government intervention in “Japanese Culture”: Traditionally Shinto Shrines and Buddhist Temples contained elements of both religions, enabling Shinto believers to go and pray at Buddhist temples and vice versa.

In the second half of the 19th century however, in the context of Japanese Hyper-Nationalism and Industrialization the government was trying to stifle Nationalism by attempting to create “Something originally Japanese”. As Buddhism is originated in India, and had transformed Japanese Culture and religion in several waves, via Chinese monks, its strong presence in Japan did not fit this nationalist narrative. Thus in 1868 the Japanese government passed the “Kami and Buddhas Separation Order” that enforced, that temples and shrines could only follow either the Buddhist or Shinto belief, but forbid the mixing of the two in one single religious place.

Arguably this policy was pursued in order to establish Shintoism as the “Pure, Japanese Religion”, supposedly unaffected by foreign influences, while constituting an important cultural and societal backbone of modern Japan.

As a consequence of the “Kami and Buddhas Separation Order” Buddhist elements in Shinto shrines and Shinto elements in Buddhist temples were destroyed, thus creating the artificial separation between the two, caused by government legislation and force.

The participant of the Summer Program, quoted above most probably has deducted from his visits to various temples and shrines in Kyoto, that these adequately represent a part of Japanese history, but was most likely unaware that the mere fact that the participants separated Buddhist Temples and Shinto Shrines verbally and mentally, constitutes at least to some extend an “invented Tradition”. This paper has as a sole purpose to highlight that visitors to modern Japan should indeed question “Japanese traditions”, and ask to what extent they actually originate in Japan, to which degree they have been influenced (or even enforced) by the government and lastly whether the traditions visible to the eye, are not a mere intervention.

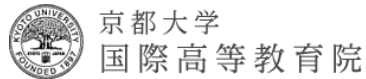
第 二 部

アセアン諸大学学生のための 「京都サマープログラム二〇一八」

《主催》



《主催》



《共催》 京都市

1 アセアン諸大学学生のための「京都サマープログラム二〇一八」

1.1 設立の経緯と目的

国際的に活躍できる人材の育成と大学教育の展開力の強化を目的として、平成 23 年度から大学の世界展開力強化事業（Inter-University Exchange Project）がおこなわれてきた。この事業が焦点を置いているのは以下の 2 点である。

- （１）日本人大学生の海外留学
- （２）外国人大学生の戦略的受入にかかわる国際的大学間連携

「京都サマープログラム二〇一八」は上記の（２）のタイプに属している。アジアの諸大学の学生を大学間連携に基づいて受け入れる事業として開始された。以下、簡単に年表を示す。

平成 23 年度	文部科学省による大学の世界展開力強化事業が開始
平成 24 年度	KUASU による《「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成》が世界展開力強化事業の 1 つとして採択される
平成 25 年度	京都大学国際交流センターが KUASU を構成する 1 部局としてのプログラム（派遣・受入）実施および実施準備を開始
平成 26 年度 2 月	第一回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが実施される （森真理子・教授／国際交流センター長、佐々木幸喜・特定助教が担当）
平成 27 年度 2 月	第二回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが実施される （河合淳子・教授、稲垣和也・特定助教が担当）
平成 28 年度 8 月	第三回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学学生の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される （河合淳子・教授、韓立友・准教授、稲垣和也・特定助教が担当）
平成 29 年度 8 月	第四回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学学生の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される （河合淳子・教授、韓立友・准教授、稲垣和也・特定助教が担当）

平成 30 年度 7 月から 8 月にかけて実施された今回の「京都サマープログラム二〇一八」は、第 5 回目となる。平成 28 年度から、東アジア諸大学学生のためのプログラムとカリキュラムの一部を合同で実施し始め、30 年度の合同でおこなうカリキュラム内容はさらに拡大するとともに相互連携もより深まった。

受入プログラムだけでなく、派遣プログラムも、京都大学とアセアン諸大学の間におけるより良い国際的連携・協力の蓄積に寄与することが期待されており、日本とアセアン諸国で国際的に活躍できる留学生／日本人大学生の育成を目的としている。加えて、KUASU が掲げる 3 つのミッションに準じ、(i) 世界最高基準の日本研究の統合・体系化を見据えた日本語・日本文

化教育の実践、(ii) 日本とアセアンが互いに抱える諸問題の共有・解決を見据えた共同学習の実践に、受入・派遣プログラムの主眼が置かれている。

実質的な観点から見ると、受入プログラムは派遣プログラム（上記（１）の「日本人大学生の海外留学」と密接に連動している。京都大学／アセアン諸大学の同じ学生が、受入プログラムにも派遣プログラムにも参加することにより、交流・共同学習のリレーが続いているためである。留学生間のコミュニケーションがプログラム後も継続的に続いている場合もあり、本プログラムが相互交交流のきっかけになっている。

1.2 「京都サマープログラム二〇一八」概要

1.2.1 プログラム内容

本プログラムの当初のカリキュラム内容は、おおむね 表 1 のようにまとめることができる。大きく分けると、(A) 日本語学習、(B) 学術的学習、(C) 学内外文化学習、(D) 共同学習の４つのパートから構成されている。文化講座の「書道」における講義を (B)、実践を (C) に分類すると、A・B・C・D の配分は概ね 1:1:1:1 となる予定であった。

表 1 本プログラムのカリキュラムの概要（１時間半を１コマで換算）

分類	項目	コマ数	割合	内容
A 日本語学習	日本語講義	10	25%	3 クラス (基礎中心、聴解中心、読解中心)
B 学術的学習	科学講義	3	8%	農学、霊長類学、環境学
	人文学講義	4	10%	政治学、日本古典文学、教育社会学 日本語学
	文化講座	1	4%	書道の理論
C 学内外 文化学習		1	4%	書道の実践
	学外研修	12	27%	市庁表敬訪問、関西史跡・文化財見学、 関西交通事情視察、滋賀県学外研修
D 共同学習	学生交流・討 議	9	22%	言語交換、文化紹介、発表準備、発表
計		40	100%	

また、1.1 節で言及した通り、本プログラムは国際的に活躍できる留学生／日本人大学生の育成を目的としており、受入・派遣の両プログラムが密接に結びついている。双方向型の学生の受入・派遣をより円滑にするため、学生間の交流が最も盛んとなる「D 共同学習」に質的な重点を置いている。

表2 本プログラムの科目名および担当者所属／協力団体名

分類	科目		所属／団体名
A 日本語学習	日本語講義	日本語Ⅰ	京都大学
		日本語Ⅱ	
		日本語Ⅲ	
B 学術的学習	科学講義	“Asian Advanced Agricultural Technologies (AAA Tech) for 9 Billion People's Food Production and Environmental Conservation”	
		“Human mind viewed from the study of chimpanzees”	
		“High Economic Growth and Minamata Disease: The fight for certificates officially acknowledging victims of methylmercury poisoning”	
	人文学講義	“The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature”	
		「学校教育にみる日本文化の諸相」	
		「日本語のウチとソト」	
		「選挙制度とその仕組み」	
C 学内外 文化学習	文化講座	書道	奈良教育大学
	学外研修	市庁表敬訪問	京都市役所
		琵琶湖学外研修	滋賀県立琵琶湖博物館 滋賀県立大学
		関西史跡・文化財見学	—
		関西交通事情視察	—
D 共同学習	学生交流・討議	言語交換・発表準備	京都大学

表2は、上記のカリキュラム（表1）について、科目名や講義等担当者の所属や協力団体の点からまとめた一覧である。

1.2.2 実施体制と教員確保

教務関連の運営では、KUASU ユニット長の落合恵美子教授および同事務局長の平田昌司教授のもと、国際高等教育院の河合淳子教授（KUASU 運営協議会委員）、同じく国際高等教育院の韓立友准教授、学際融合教育研究推進センターの西島薫特定助教が中心となって、全体のカリキュラムを企画・実施した。京都市役所訪問においては、京都市の総合政策室の橋本浩之担当

課長指揮のもと、選挙管理委員会の柴田洋志担当課長の協力を得て企画・実施をおこなった。加えて、今年初めての試みとなった琵琶湖学外研修準備においては、滋賀県立大学環境科学部の後藤直成准教授（環境科学部）および肥田嘉文助教（環境科学部）の協力を仰ぎつつ、各訪問施設の協力を得て企画をおこなった。一方、事務関連の運営では、国際高等教育院教務掛の職員、KUASU の職員および京都大学国際教育支援室の山口聖佳職員の協力を仰いだ。

今回のプログラムも平成29年度と同様、京都市役所訪問、科学講義、人文学講義等、研修内容の多くがアセアンと東アジア+ドイツのプログラムにおいて共有された。

カリキュラムの準備段階で、京都大学所属の教員を中心に本プログラムの講師担当の打診をおこない、教員確保を進めた。国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター、農学研究科、高等研究院／霊長類研究所、アジア・アフリカ地域研究研究科の教員に講義を依頼し、これまでと同様の講師および新たに依頼した講師から承諾が得られた。一方、学外研修としての関西史跡・文化財見学と関西交通事情視察では、チューターを務めた京都大学の学生18名の協力により、京都、大阪、奈良での学外文化学習が実現した。

本研修の参加対象大学は、インドネシア大学、シンガポール国立大学、チュラーロンコーン大学、ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学および外国語大学のアセアン5大学である。プログラム準備段階において、上記アセアン5大学に、（1）日本学関連領域（日本学、日本文学、日本史学等）を学ぶ、（2）学士課程または修士課程に在籍する、という参加条件で学生募集の依頼をおこなった。アセアン各大学の責任者をふくめた本研修の全体的な実施体制については、以下の第2節を参照されたい。

1.2.3 京都大学学生アシスタント（チューター）

1.1 節で述べた「日本とアセアンの間で国際的に活躍できる外国人／日本人大学生の育成」という目的を達成するため、京都大学学生には、共同学習における発表準備等をはじめとする、日本語学習・学術的学習・学内外文化学習における留学生（短期交流学生）のサポートが要求された。加えて、京都大学キャンパスおよび宿泊施設周辺の案内、京都市内の交通案内、学外研修における引率、生活や修学にかかわる相談など、多岐にわたるサポートをおこなうためにも、京都大学学生の助力は不可欠だった。

上記の目的を達成するため、京都大学学生のサポーターの募集をおこなった。次ページのポスターは募集時に用いたものである。この他にも KUASU のホームページなどでも広報活動をおこなった。2018 年度は、応募者が多数だったため、応募締切を6月29日から6月15日に変更した。募集・選考終了後、オリエンテーションをおこない、京都サマープログラム 2018 の概要の説明、教職員との連携、京都大学学生としてサポートするという自覚・責任の必要性、研修参加学生とチューターという2つの立ち位置を意識すること等を確認した。その他、健康管理、安全管理、提出書類などについての説明もおこない、アセアン参加学生のためのサポートについて意見交換の場をもうけた。

京都大学からの参加学生の一覧については、以下の3節を参照されたい。



京都大学主催 京都サマープログラム 2018 サポーター大募集 ー東アジア+ドイツ、アセアンの諸大学の学生を迎えてー

京都大学が実施する「京都大学サマープログラム」の学生サポーターを募集します。

本プログラムは、世界のトップレベルの学生が、本学の学風および先端研究に触れ、日本の政治、経済、文化・伝統、歴史、環境・農業問題などを理解するとともに、日本人学生との交流の機会を得て、将来的に本学への長期留学を志すようになることを目的にスタートし、今年で7回目になります。奮ってご応募ください。

期 間：2018年7月29日(日)～2018年8月11日(土)

*全日程に参加可能である必要はありません。参加可能な日程を確認の上、調整します。

*選考の結果採用された人は、7月18日(水)昼休み開催の説明会への参加が必須となります。

公的理由により参加できない場合は事前に相談してください。

京都サマープログラムは、以下の二つのサブプログラムに分かれています。

			主たる使用言語
A	東アジア+ドイツ	北京大学 国立台湾大学 香港中文大学 延世大学校(韓国) ハイデルベルグ大学(ドイツ)	英語
B	アセアン	タイ・チュラーロンコーン大学 ベトナム国家大学ハノイ校 インドネシア大学 シンガポール国立大学	日本語

活動内容：参加学生との交流、共同学習、京都市内の案内、滞在中の生活のサポート

人 数：30名前後(A,B各15名)

謝 金：1人約1～3万円 *参加日数・時間によって異なります。

資 格：京都大学在籍の学部生、大学院生。参加意欲の高い方。1,2回生は特に歓迎します。

締 切：~~2018年6月29日(金)~~

→応募者多数のため6/15(金)で締切とさせていただきます。ご容赦ください。

申込み/問合せ：国際高等教育院 京都サマープログラム 2018 担当

(E-mail) kyoto_summer<AT>mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

<AT>を@に置き換えてください。

申込み方法：上記メールアドレスで募集を受け付けます。メールで下記の情報を送ってください。

受領確認のメールを受け取ったら、その指示に従ってください。(応募者多数の場合は選考があります。)
1.メールタイトル(件名)は「京都サマープログラム サポーター応募」
2.氏名(漢字とフリガナ)
3.所属学部/研究科 4.学年 5.学籍番号 6.連絡先電話 7.A,Bどちらがいいかの希望

1.2.4 カリキュラムの特徴

本プログラムにおける主な教授言語は日本語である。ただし、教育・学習における媒介言語としての英語の重要性、そして東アジア＋ドイツとアセアンの学生達が合同で受講するため、表2に挙げた学術的学習の講義うちおよそ半数の教授言語は英語でおこなった（日本語運用能力は東アジア諸大学＋ドイツの募集要件には含まれていない）。また、京都市役所表敬訪問では東アジア諸大学＋ドイツの学生に対する京都大学学生による英語通訳もおこなわれた。その他、前節1.2.3で述べた京都大学学生による各種サポートにおいて、英語が用いられる場面もあった。

カリキュラム全体の特徴は、(A) 日本語学習、(B) 学術的学習、(C) 学内外文化学習、(D) 共同学習を骨組みとする点である。そして、国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター（旧国際交流センター）が蓄積してきた長年のプログラム実施実績と、KUASU が平成24年度から蓄積してきた実績がこの骨組みの基礎となっている。本プログラムでは、これらの基礎があったからこそ、質の高い研修内容を提供できたと思われる。

(A) の日本語学習においては、アセアン諸大学学生の多様な背景、学習歴、興味や志向を考慮し、学生19名を3つのグループに分けた。開講式後にアセアン学生が自己評価にもとづき授業を聴講し、翌日の授業の合間に学生全員と相談をおこなったうえで、日本語講義を担当した講師陣からの意見を集約したのち、クラス分けの最終決定をおこなった。

(D) の共同学習の際には、(A) とは異なるグループ分けをおこなった。昨年度は京都大学学生を含む6つの多国籍グループを編成したが、今年度は5つの多国籍グループとした（表3参照）。グループのメンバーである京都大学の学生は、1.2.1節で言及した言語交換・発表準備においてのサポートだけでなく、発表資料作成や口頭発表内容を分担した。最終日の各発表では発表担当ではない京都大学生サポーターや日本語講義担当の講師の方々に出席してもらい、聴講者（ないしコメント提供者）という役割をも果たした。

表3 共同学習における発表タイトルと発表者

1. 「結婚式」			(=各国の結婚式の紹介と比較)
Vu Phuong Thao	(タオ)	ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学・B2	
Narawit Eammanussakul	(アート)	チュラーロンコーン大学・B2	
Avidya Sekar Saga	(アフィ)	インドネシア大学・B1	
Thananchanok Phiboon	(カオ)	チュラーロンコーン大学・B1	
奥野 真木保	(おくの まきほ)	京都大学農学部・B4	
2. 「食事マナー」			(=各国の食事マナーの紹介と比較)
Natta Pikunsawat	(オパール)	チュラーロンコーン大学・B2	
Dao Hoang Anh	(アイン)	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学・M1	
Yulius Thedy	(ユリウス)	インドネシア大学・B3	
Zhang Yue	(ユエ)	シンガポール大学・B1	
若杉 美佳	(わかすぎ みか)	京都大学文学部部・B2	

新田 祥真	(にった しょうま)	京都大学法学部・B2
3. 「日本の不思議」		(=ASEAN 留学生からみた日本の文化)
Carissa Audreyana Irnanda	(カリッサ)	インドネシア大学・B3
Le Thi Thuy Hang	(ハン)	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学・M1
Shaun Tan Tao Guang	(ショーン)	シンガポール国立大学・B1
Shama Ruamwong	(ピンク)	チュラーロンコーン大学・B1
栗山 晏奈	(くりやま あんな)	京都大学文学部・B1
4. 「大学生活」		(=各国の大学生活の比較)
Fathma Ilmi Anindita Iskandar	(ファットマ)	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学・B1
Malinee Raksaskulwong	(パット)	チュラーロンコーン大学・B1
Nguyen Tu Linh	(リン)	ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学・B2
寺坂 朋恵	(てらさか ともえ)	京都大学総合人間学部・B1
田邊 和香菜	(たなべ わかな)	京都大学農学部・B2
5. 「日本と ASEAN の祝日」		(=各国の祝日の比較)
Toh Jia Han	(ジャハン)	シンガポール国立大学・B4
Putri Fadhilah Wira Shafiyah	(プトリ)	インドネシア大学・B1
Trieu Dao Quynh An	(アン)	ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学・B2
Natwara Leelawatwatana	(エーム)	チュラーロンコーン大学・B1
齊藤 喬	(さいとう たかし)	京都大学総合人間学部・B2

1.2.5 実施時期および期間

平成 26～27 年度、本プログラムの前身にあたる研修プログラムは 2 月（冬）の第二週目から実施されていた。平成 28 年度からは実施時期を大きく変更し、開始を 8 月（夏）の第一週としてきた。8 月実施の利点は以下の通りである。

東アジア諸大学の受入プログラムと合同のカリキュラムが企画できる
ベトナムの最も重要な休日である旧正月との時期的重なりを避けられる
授業実施期間を避けられる（インドネシアとベトナム、および京都大学）
熱帯気候地域から温帯気候への順応とそれに伴う体調管理を容易にする

しかし、8 月実施には台風によってプログラム内容が大幅に変更されるというリスクが伴う。

1.3 で述べるが、今年度のプログラムでは留学生たちの日本到着日に台風が関西国際空港上空を通過した。今後も、サマープログ実施期間に台風が通過するおそれのあることから、柔軟な対応が必要になる可能性がある。

実施期間を 2 週間としているのは、これまでの短期派遣／受入の期間に準じている（参加学生のメンタルヘルスの観点に依拠するところが大きい）。大半の参加学生が初めて来日することを考慮に入ると、修学・生活・観光を初めて体験する期間として、2 週間という長さは適度な期間であると考えられる。

1.3 今後の課題

参加人数に関しては特に問題なく、募集人数 20 名に対して参加人数は 19 名だった。毎度のことではあるが、アセアン各大学の担当教員の尽力に拠るところが大きい。特に、チュラーロンコーン大学とシンガポール国立大学については、授業実施期間が重なっているにもかかわらず、一定数の学生を選抜していただいた。

実施時期の問題について、今年度以上の改善を見込むのは現段階では困難である。京都大学の休業期間内でアセアン諸大学の休業期間と重なり、かつ諸々の問題を回避できる理想的な期間は、8 月初旬の 2 週間のみである。質の高い短期受入プログラムの提供を続けるためには、少なくとも京都大学の学年暦における休業期間（夏季／春季）でのプログラム実施が必要条件となっている。

留学生の空港までの送迎については今後も検討する必要がある。検討する理由としては、1). 到着日はプログラム期間には含まれないこと、2). 留学生の中に日本滞在経験者が増えており送迎の必要性が低くなっていること、などが挙げられる。平成 30 年度は、台風 12 号が留学生の到着する時間帯（28 日深夜から 29 日早朝）に関西国際空港上空を通過したことから、河合教授と西島特定助教が 28 日から関西空港周辺に宿泊しなければならなかった。関西国際空港の場合、空港までの連絡橋が封鎖される可能性もあることから河合教授が連絡橋の此方岸に西島特定助教が関西国際空港に宿泊した。台風の進路や速度は時間によって変化するため予測は難しいが、適宜教員が前泊するなど対応する必要がある。

今回の日本語授業のレベル別のクラス分けでは、従来のテスト方式ではなく、最初に学生が日本語能力の自己評価にもとづきクラスを選び、その後、必要に応じて担当教員と面談をおこないクラス分けをおこなった。ただし、学生自身の自己評価と客観的な日本語能力の評価が一致しない場合が多々あった。日本語授業の担当教員からクラスを移動してほしいとの要望があり、教員が個別に留学生と交渉しなければならないことがあった。今後は、クラス分けの方式について検討してもよいだろう。

物価および費用補助の問題も深刻である。日本の物価は、シンガポールを除くアセアン諸国の物価に比べてかなり高い。本プログラムで学費、渡航費、宿泊費が補助されたとはいえ、海外旅行保険費・生活費・交通費・医療費、その他考えられるさまざまな負担は避けられない。これらの費用負担は、参加を足踏みさせるのに十分な金額になる。今年度は滞在費の一部と宿泊費の補助があったものの、航空券は自己負担であり初期負担が大きいという声もあった。

（文責：西島 薫）

2 実施体制

アセアン諸大学

ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学

東洋学部・講師

ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学

日本言語文化学部・講師

チュラーロンコーン大学文学部・助教授

チュラーロンコーン大学文学部・講師

シンガポール国立大学人文社会科学部・准教授

インドネシア大学人文科学部・講師

Võ Minh Vũ (ヴォ ミン ヴ)

Nguyễn Thuý Ngọc (グエン・トウイ・ゴック)

Chomnard Setisarn ผศ.ดร.ชมนาด คีติสาร

(チョムナード・シティサーン)

Matana Jaturasangpairroj อมัทนา จาตุรงค์ไพโรจน์.

(マッタナー・チャトゥラセンパイロー
ト)

Leng Leng THANG (レン・レン・タン)

Himawan Pratama (ヒマワン・プラタマ)

京都大学

実施責任者

文学研究科/アジア研究教育ユニット長・教授

落合 恵美子 (OCHIAI Emiko)

文学研究科/アジア研究教育ユニット事務局長・教授

平田 昌司 (HIRATA Shoji)

担当教職員

国際高等教育院・教授

河合 淳子 (KAWAI Junko)

国際高等教育院・准教授

家本 太郎 (IEMOTO Taro)

国際高等教育院・准教授

韓 立友 (HAN Liyou)

学際融合教育研究推進センター・特定助教

西島 薫 (NISHIJIMA Kaoru)

国際高等教育院/国際教育交流課

短期プログラム担当

山口 聖佳 (YAMAGUCHI Kiyoka)

アジア研究教育ユニット・派遣職員

久田 百合恵 (HISASDA Yurie)

協力教員

国際高等教育院・教授

パリハワダナ ルチラ

(PALIHAWADANA Ruchira)

国際高等教育院・准教授

湯川 志貴子 (YUKAWA Shikiko)

日本語・日本文化教育センター・非常勤講師

下橋 美和 (SHIMOHASHI Miwa)

日本語・日本文化教育センター・非常勤講師

浦木 貴和 (URAKI Norikazu)

日本語・日本文化教育センター・非常勤講師

白方 佳果 (SHIRAKATA Yoshika)

花園大学・助教

農学研究科・教授

近藤 直 (KONDO Naoshi)

高等研究院／霊長類研究所・特別教授

松沢 哲郎 (MATSUZAWA Tetsuro)

アジア・アフリカ地域研究研究科

飯田玲子 (IIDA Reiko)

附属次世代型アジア・アフリカ
教育研究センター・特定助教
滋賀県立大学

環境科学部・准教授	後藤直成	(GOTO Naoshige)
環境科学部・助教	肥田嘉文	(HIDA Yoshifumi)
奈良教育大学・特任准教授	北山 聡佳	(KITAYAMA Satoka)
京都市		
総合政策室・課長	橋本浩之	(HASHIMOTO Hroyuki)
選挙管理委員会・課長	柴田洋志	(SHIBATA Hiroshi)

3 参加学生一覧

	名 前	大 学	学部・研究科	学 年
1	Nguyen Tu Linh	ベトナム国家大学 ハノイ校 人文社会科学大学	東洋学部	B2
2	Trieu Dao Quynh An		東洋学部	B2
3	Vu Phuong Thao		東洋学部	B2
4	Dao Hoang Anh	ベトナム国家大学 ハノイ校 外国語大学	日本言語文化学部	M1
5	Le Thi Thuy Hang		日本言語文化学部	M1
6	Avidya Sekar Saga	インドネシア大学	人文科学部	B3
7	Carissa Audreyana Irnanda		人文科学部	B2
8	Fathma Ilmi Anindita Iskandar		人文科学部	B3
9	Putri Fadhilah Wira Shafiyyah		人文科学部	B4
10	Yulius Thedy		人文科学部	B3
11	Shaun Tan Tao Guang	シンガポール国立大学	人文社会科学部	B1
12	Toh Jia Han		人文社会科学部	B4
13	Zhang Yue		人文社会科学部	B4
14	Malinee Raksaskulwong	チュラーロンコーン大学	文学部	B1
15	Narawit Eammanussakul		文学部	B1
16	Natta Pikunsawat		文学部	B1
17	Natwara Leelawatwatana		文学部	B1
18	Shama Ruamwong		文学部	B1
19	Thananchanok Phiboon		文学部	B1
20	深谷 拓未 (ふかや たくみ)	京都大学	人間・環境学研究科	M1

21	松村 寛子 (まつむら ひろこ)	京都大学	農学部	B3
22	佐藤 美帆 (さとう みほ)		文学部	B1
23	齊藤 喬 (さいとう たかし)		総合人間学部	B2
24	奥野 真木保 (おくの まきほ)		農学部	B1
25	新田 祥真 (にった しょうま)		法学部	B2
26	長谷川 寛弥 (はせがわ ひろや)		アジア・アフリカ地域研究研究科	M2
27	瀧田 菜友 (たきた なゆ)		理学部	B1
28	寺坂 朋恵 (てらさか ともえ)		総合人間学部	B1
29	栗山 晏奈 (くりやま あんな)		文学部	B1
30	三木 麻由 (みき まゆ)		経済学部	B2
31	宇野 拓磨 (うの たくま)		工学部	B3
32	若杉 美佳 (わかすぎ みか)		文学部	B2
33	田邊 和香菜 (たなべ わかな)		農学部	B2
34	北野 有咲 (きたの ありさ)		法学部	B1
35	吉川 美佳子 (よしかわ みかこ)		医学部	B1
36	白井 雄 (しらい ゆう)		農学部	B4
37	黒田 航 (くろだ わたる)		法学部	B1

4 研修日程

研 修 日 程

(水色網掛け は中国・韓国・香港・台湾・ドイツの短期交流学生との合同イベント)

7月28(土)-29(日)日 短期交流学生入国、参加学生顔合わせ				
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所	
28日 8:15	到着(ベトナム:BL620 便)	【アジア研究教育ユニット】 河合淳子教授、西島薫特定助教	関西国際空港(2名)	
21:25	到着(インドネシア:D71 便)		関西国際空港(5名)	
29日 6:00	到着(ベトナム:HX616 便)		関西国際空港(3名)	
7:00	到着(タイ: TG622 便)		関西国際空港(1名)	
8:00	到着連絡、京都市内へ移動		空港-京都市内(11名)	
10:00	チェックイン		旅館 さわや本店(11名)	
12:10	到着(タイ:BR132 便)		関西国際空港(5名)	
12:55	到着(シンガポール:CX594 便)		関西国際空港(3名)	

13:30	到着連絡、京都市内へ移動		空港－京都市(8名)
15:00	チェックイン		旅館 さわや本店(8名)
7月30日(月) 開講式、オリエンテーション、京都市長表敬訪問			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
9:00-9:30	開講式	【アジア研究教育ユニット】 落合恵美子教授、平田昌司教授、西島 薫特定助教、久田百合恵職員 【国際高等教育院】 河合淳子教授、家本太郎准教授	京都大学 (吉田南キャンパス) 吉田国際交流会館 南講義室2
9:30-11:00	オリエンテーション、キャンパスツ アー	西島薫特定助教	
11:00-12:00	昼食・京大サロン集合(12時)		京都大学周辺
12:30	京都大学正門前集合、バス移動		京都大学 → 京都市役所
13:30-14:00	京都市長表敬	韓立友(はん りーよう)准教授、 西島薫特定助教	京都市役所 (住所:京都府京都市中京 区寺町通御池上る上本能 寺前町 488 番地)
14:15-16:00	講義Ⅰ:選挙制度とその仕組み	柴田洋志(しばたひろし)講師	
16:00	解散		

7月31日(火) 日本語講義、クラス分け面談、科学講義、京都大学紹介			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
8:45-10:15	日本語 中級Ⅰ	下橋美和(しもはし みわ)講師	交流会館 講義室 4
	日本語 中級Ⅱ	浦木貴和(うらき のりかず)講師	交流会館 講義室 6
	日本語 上級	白方佳果(しらかた よしか)講師	吉田南 4 号館 40
10:15-11:00	クラス分け面談	西島薫特定助教	交流会館 講義室 4
11:00-12:30	日本語 中級Ⅰ	下橋美和講師	交流会館 講義室 4
	日本語 中級Ⅱ	浦木貴和講師	交流会館 講義室 6
	日本語 上級	白方佳果講師	吉田南 4 号館 40
14:00-15:30	講義Ⅱ:(使用言語:英語) Human Mind Viewed from the Study of Chimpanzees	【高等研究院、霊長類研究所】 松沢哲郎(まつざわ てつろう)特別教授	KUINEP 講義室

8月1日(水) 日本語講義、人文学講義、科学講義			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
8:45-10:15	日本語 中級Ⅰ	下橋美和講師	交流会館 講義室 5
	日本語 中級Ⅱ	浦木貴和講師	吉田南 4 号館 33
	日本語 上級	白方佳果講師	吉田南 4 号館 40

10:30-12:00	グループ分け・発表準備		交流会館 講義室 5
14:00-15:30	講義Ⅲ(使用言語:英語) The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature	【日本語・日本文化教育センター】 湯川志貴子(ゆかわ しきこ)准教授	KUINEP 講義室
16:00-17:30	講義Ⅳ:京都大学紹介 (使用言語:日本語) (使用言語:英語) (使用言語:中国語)	西島薫助教 河合淳子(かわい じゅんこ)教授 韓立友准教授	J-POD KUINEP 多目的室
8月2日(木) 日本語講義、人文学講義、言語交換・発表準備			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
8:45-10:15	日本語 中級Ⅰ	下橋美和講師	交流会館 講義室 4
	日本語 中級Ⅱ	浦木貴和講師	交流会館 講義室 5
	日本語 上級	白方佳果講師	交流会館 講義室 6
10:30-12:00	日本語 中級Ⅰ	下橋美和講師	交流会館 講義室 4
	日本語 中級Ⅱ	浦木貴和講師	交流会館 講義室 5
	日本語 上級	白方佳果講師	交流会館 講義室 6
14:00-15:30	講義Ⅴ Innovative Technologies for 9 Billion People's Food Production and Environmental Conservation	【農学研究科】 近藤 直(こんどう なおし)教授	KUINEP 講義室

8月3日(金) 日本語講義・学外研修案内			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
8:45-10:15	人文学講義(使用言語:日本語) 「学校教育にみる日本文化の諸相」	【日本語・日本文化教育センター】 河合淳子教授	交流会館 講義室 4
10:30-12:00	人文学講義(使用言語:日本語) 「日本語のウチとソト」	【日本語・日本文化教育センター】 パリハワダナ・ルチラ教授	交流会館 講義室 4
14:00-15:30	講義Ⅵ High Economic Growth and Minamata Disease: The fight for certificates officially acknowledging victims of methylmercury poisoning	【附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター・臨地教育・国際連携支援室】 飯田玲子(いいた れいこ)特定助教	吉田南 4 号館 40
16:00-17:00	学外研修案内	西島薫特定助教	吉田南 4 号館 40

8月4日(土) 人文学講義、学外研修案内			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
終日	関西史跡・文化交流		

8月5日(日) 日－アセアン学生間交流			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
9:00-12:00	言語交換・発表準備	西島薫特定助教	交流会館 講義室 1
	京都大学生-アセアン学生交流		

8月6日(月) 日本語講義・企業見学			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語 中級Ⅰ	下橋美和講師	交流会館 講義室 4
	日本語 中級Ⅱ	浦木貴和講師	交流会館 講義室 5
	日本語 上級	白方佳果講師	交流会館 講義室 6
10:30-12:00	日本語 中級Ⅰ	下橋美和講師	交流会館 講義室 4
	日本語 中級Ⅱ	浦木貴和講師	交流会館 講義室 5
	日本語 上級	白方佳果講師	交流会館 講義室 6
13:00-17:00	企業見学(株式会社ナベル)	西島薫特定助教	(株)ナベル(京都府京都市南区 西九条森本町 86 番地)

8月7日(火)琵琶湖研修			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
9:00	集合	西島薫特定助教	旅館 さわや本店
	バス移動		
10:00-11:20	滋賀県立琵琶湖博物館見学	西島薫特定助教	滋賀県立琵琶湖博物館
11:30-12:30	昼食	西島薫特定助教	くさつ道の駅
13:30-15:30	滋賀県立大学見学	【滋賀県立大学 環境科学部】 肥田嘉文(ひだ よしふみ)助教	滋賀県立大学
16:00-17:00	彦根城	西島薫特定助教	彦根城
18:00	解散	西島薫特定助教	旅館 さわや本店

8月8日(水) 日本語講義			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所

8:45-10:15	日本語 中級Ⅰ	下橋美和講師	交流会館 講義室 3
	日本語 中級Ⅱ	浦木貴和講師	交流会館 講義室 4
	日本語 上級	白方佳果講師	交流会館 講義室 5
10:30-12:00	日本語 中級Ⅰ	下橋美和講師	交流会館 講義室 3
	日本語 中級Ⅱ	浦木貴和講師	交流会館 講義室 4
	日本語 上級	白方佳果講師	交流会館 講義室 5
14:00-15:30	日本語 中級Ⅰ	下橋美和講師	交流会館 講義室 3
	日本語 中級Ⅱ	浦木貴和講師	交流会館 講義室 4
	日本語 上級	白方佳果講師	交流会館 講義室 5

8月9日(木) 日本語講義、日本文化講座(書道)			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
8:45-10:15	日本文化講義(書道)	北山聡佳(きたやま さとか)准教授	交流会館 講義室 3
10:30-12:00	日本文化講義(書道)	北山聡佳准教授	交流会館 講義室 3
14:00-15:30	発表準備	西島薫特定助教	交流会館 講義室 3

8月10日(金) 言語交換・発表準備、発表、修了式、歓送会			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
8:45-12:00	言語交換・発表準備	西島薫特定助教	交流会館 講義室 4
13:00-17:00	共同発表、 質疑応答、講評	【日本語・日本文化教育センター】 河合淳子教授、家本太郎准教授、 西島薫助教、下橋美和講師、 浦木貴和講師、白方佳果講師	南講義室 4
17:00-17:30	修了式 写真撮影	【アジア研究教育ユニット】 落合恵美子教授、 西島薫助教、久田百合恵職員 【日本語・日本文化教育センター】 河合淳子教授、家本太郎准教授 下橋美和講師、浦木貴和講師、 白方佳果講師	南講義室 4
18:00-20:00	歓送会	落合恵美子教授、平田昌司教授、 河合淳子教授、家本太郎准教授、 西島薫助教、浦木貴和講師、 白方佳果講師、久田百合恵職員	(吉田南キャンパス) 吉田食堂 1 階フロア

4.1 日本語 I

科目名 Title		にほんごちゅうきゅう 1 日本語 中 級 I		講師 Instructor	しもはし みわ 下橋 美和 (Miwa Shimohashi)
講義室 Classroom		しおり参照			
〔授業の進め方 Content of the class〕					
かい 回	がつ び 月 日 (曜日)	じげん 時限	じゅぎょうないよう 授業内容	びこう 備考	
1	7 月 31 日 (火)	1 限	さそ ことわ 誘う、断る		
2		2 限	しょたいめん ひと はな 初対面の人と話す	+ 京大生 3 名以上	
3	8 月 1 日 (水)	1 限	いらい 依頼		
4	8 月 2 日 (木)	1 限	メールを <small>か</small> 書く		
5		2 限	きよ <small>か</small> え 許可を得る	+ 京大生 3 名以上	
6	8 月 6 日 (月)	1 限	いっぶん <small>さんぶん</small> 1 分スピーチ、3 分スピーチ		
7		2 限	まとまった <small>ぶんしょう</small> 文章 <small>よ</small> を読む (1)	+ 京大生 3 名程度	
8	8 月 8 日 (水)	1 限	はな <small>あ</small> 話し合う、1 分/3 分スピーチ (2)		
9		2 限	まとまった文章を読む (2)	+ 京大生 3 名程度	
10		3 限	話し合う、1 分/3 分スピーチ (3)	+ 京大生 3 名程度	
〔教科書 Textbook〕 ひつよう しりよう はいふ 必要な資料を配布する。 さんこう <small>かいわ</small> <small>ちようせん</small> <small>ちゅうきゅうぜんき</small> 参考テキスト：『会話に挑戦！中 級 前期からの日本語ロールプレイ』（スリーエーネット ワーク）					
〔その他の注意 Miscellaneous〕					

1 限 = 8:45～10:15

2 限 = 10:30～12:00

3 限 = 14:00～15:30

このクラスでは、中級レベルの会話教材を使った会話練習を中心に、読解文を読んでそれをもとに1分スピーチをしたり、またメールを書いたりしました。

会話練習では、知っている語彙や文法でも、それを一連の流れの中で使って会話することは難しかったかもしれませんが、何度か続けるうちにつまることなく進められるようになりました。

また、メールを書いたり、読解文をもとに1分スピーチを準備したりする際には、京大生の協力のもと作業を進めました。それは、メールを書くことやスピーチをすることだけの練習ではなく、目の前の日本人とのコミュニケーションの練習にもなっていたと思います。1分スピーチは、回を重ねるごとに慣れて上達していました。そして何よりも、京大生、留学生ともに、積極的に言葉を交わし、意思疎通をはかっていたことが印象的でした。

それぞれ異なる環境で日本語を学んできた学生たちですので、話すことが得意な人、書くことが得意な人など、さまざまでしたが、それぞれ新たに学ぶ部分を熱心に学ぶ姿勢が見られました。

これまでに学んできた日本語を実際に使い、このクラスで他国や日本の学生と一緒に「読む・話す・書く」活動をしたことは、よい練習になったと思います。今後もぜひ日本語の練習を続けて、またいつか京都にいらっしゃってください。楽しみにしています。

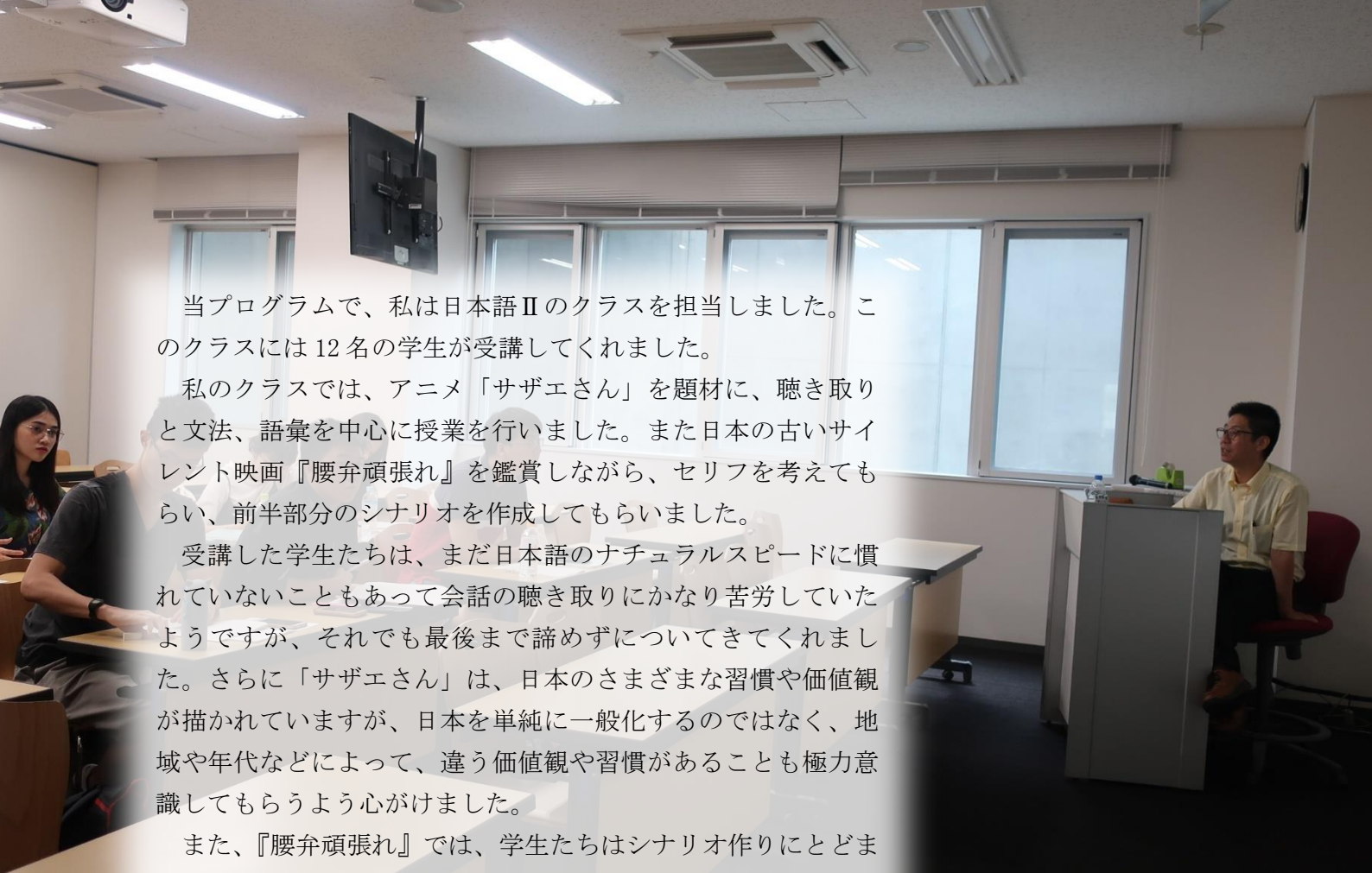
(下橋 美和)



4.2 日本語Ⅱ

科目名 Title		にほんごちゅうきゅうに 日本語 中 級 II		講師 Instructor	浦木 貴和 (Norikazu Uraki)
講義室 Classroom		しおり参照			
〔授業の進め方 Content of the class〕					
かい 回	がつ じつ 月 日 (曜日)	じげん 時限	じゅぎょうないよう 授業内容	びこう 備考	
1	7月31日 (火)	1 限	マンガ『サザエさん』で学ぶ 日本語①		
2		2 限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本 語②		
3	8月1日 (水)	1 限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本 語③		
4	8月2日 (木)	1 限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本 語④		
5		2 限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本 語⑤		
6	8月6日 (月)	1 限	サイレント映画の会話をつくる①		
7		2 限	サイレント映画の会話をつくる①		
8	8月8日 (水)	1 限	サイレント映画の会話をつくる②		
9		2 限	サイレント映画の会話をつくる③		
10		3 限	サイレント映画の会話をつくる④		
〔教科書 Textbook〕 映像資料を使用する予定					
〔その他の注意 Miscellaneous〕					

1 限＝8:45～10:15 2 限＝10:30～12:00 3 限＝13:00～14:30



当プログラムで、私は日本語Ⅱのクラスを担当しました。このクラスには12名の学生が受講してくれました。

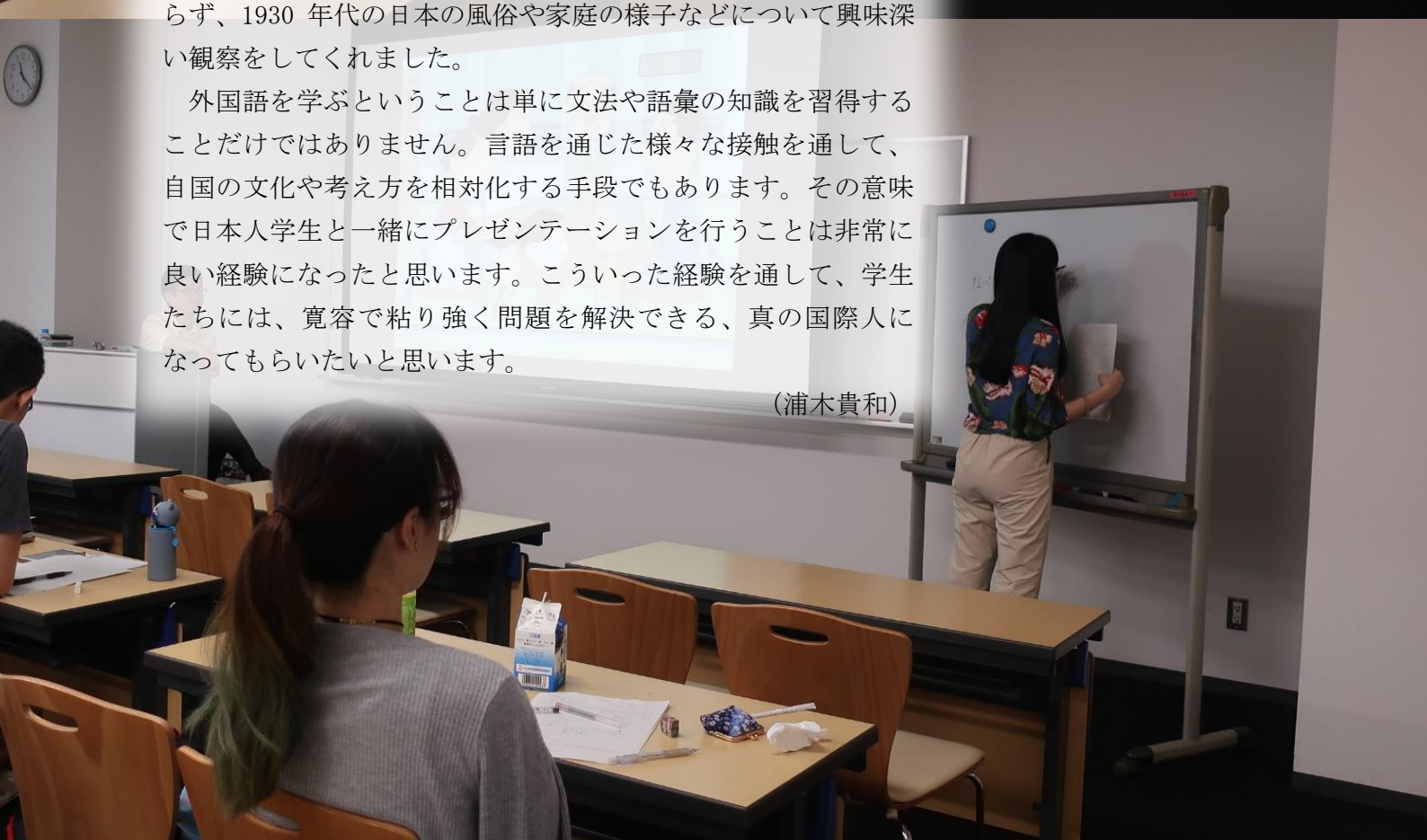
私のクラスでは、アニメ「サザエさん」を題材に、聴き取りと文法、語彙を中心に授業を行いました。また日本の古いサイレント映画『腰弁頑張れ』を鑑賞しながら、セリフを考えてもらい、前半部分のシナリオを作成してもらいました。

受講した学生たちは、まだ日本語のナチュラルスピードに慣れていないこともあって会話の聴き取りにかなり苦労していたようですが、それでも最後まで諦めずについてきてくれました。さらに「サザエさん」は、日本のさまざまな習慣や価値観が描かれていますが、日本を単純に一般化するのではなく、地域や年代などによって、違う価値観や習慣があることも極力意識してもらうよう心がけました。

また、『腰弁頑張れ』では、学生たちはシナリオ作りにとどまらず、1930年代の日本の風俗や家庭の様子などについて興味深い観察をしてくれました。

外国語を学ぶということは単に文法や語彙の知識を習得することだけではありません。言語を通じた様々な接触を通して、自国の文化や考え方を相対化する手段でもあります。その意味で日本人学生と一緒にプレゼンテーションを行うことは非常に良い経験になったと思います。こういった経験を通して、学生たちには、寛容で粘り強く問題を解決できる、真の国際人になってもらいたいと思います。

(浦木貴和)



4.3 日本語Ⅲ

科目名 Title	にほんごさん 日本語Ⅲ		こうし 講師 Instructor	しら かつ よし か 白方佳果 (Yoshika Shirakata)
こうぎしつ 講義室 Classroom	よしだこくさいこうりゅうかいかん みなみこうぎしつよん 吉田国際交流会館 南講義室4			
〔じゅぎょうすすめかた 授業の進め方 Content of the class〕				
かい 回	がつび ようび 月日 (曜日)	じげん 時限	じゅぎょうないよう 授業内容	びこう 備考
1	8月1日 (火)	1 限	きょうと かん 京都に関するエッセイを読む (1)	
2		2 限	京都に関するエッセイを読む (2)	
3	8月2日 (水)	1 限	京都に関するエッセイを読む (3)	
4		2 限	京都に関するエッセイを読む (4)	
5	8月3日 (木)	1 限	きょうと ぶたい ぶんがくさくひん 京都を舞台にした文学作品を読む (1)	
6		2 限	京都を舞台にした文学作品を読む (2)	
7	8月7日 (月)	1 限	きょうと しんぶん きじ 京都に関する新聞記事などを読む (1)	
8		2 限	京都に関する新聞記事などを読む (2)	
9	8月9日 (水)	1 限	きょうだいせい にゅうしちんだい ちょうせん 京大生と京大の入試問題に挑戦する (1)	京大生約4名
10		2 限	京大生と京大の入試問題に挑戦する (2)	
〔きょうかしょ 教科書 Textbook〕 ひつよう しりよう はいふ 必要な資料を配布する。				
〔た ちゅうい その他の注意 Miscellaneous〕 ※ のじげんは 11:00～12:30 のよてい 予定です。				

1 限＝8:45～10:15

2 限＝10:30～12:00

3 限＝13:00～14:30



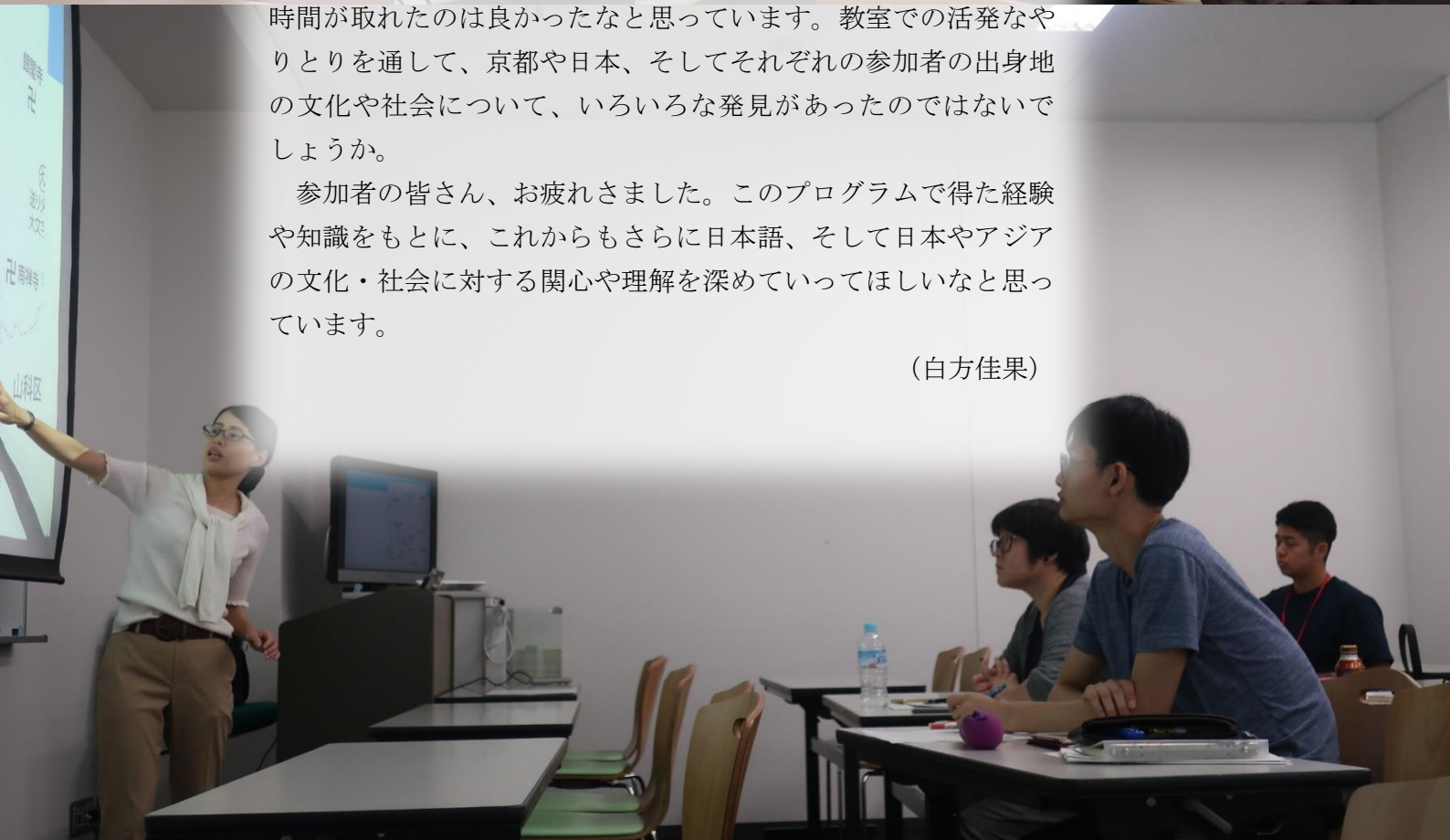
『古都』を読む

このクラスでは、様々なジャンルの文章の読解を通して日本語の読解能力の向上を目指すとともに、京都や日本の文化・社会についての理解を深めることを目標としました。1 日目は京都に関するエッセイ、2・3 日目は京都を舞台とする小説、4 日目は京都に関する新聞記事を読解しました。5 日目はこれまでの授業でとりあげた「景観」というテーマで 1 分間スピーチに挑戦し、さらに京都大学の入試に出題された随筆を読み、理解した内容を日本語で表現する課題に取り組みました。

今回の授業で扱ったのは、いずれもやや難易度の高い文章でした。とくに 5 日目の随筆は難しかったと思いますが、京大生の頼もしいサポートのもと、和気藹々とした雰囲気の中で正確に内容を理解し、それを日本語で表現することができました。留学生の参加者は 3 人と少なかったのですが、そのぶん教材の内容やお互いの文化についてじっくり話をし、理解を深めるための時間が取れたのは良かったなと思っています。教室での活発なやりとりを通して、京都や日本、そしてそれぞれの参加者の出身地の文化や社会について、いろいろな発見があったのではないのでしょうか。

参加者の皆さん、お疲れさました。このプログラムで得た経験や知識をもとに、これからもさらに日本語、そして日本やアジアの文化・社会に対する関心や理解を深めていってほしいなと思っています。

(白方佳果)

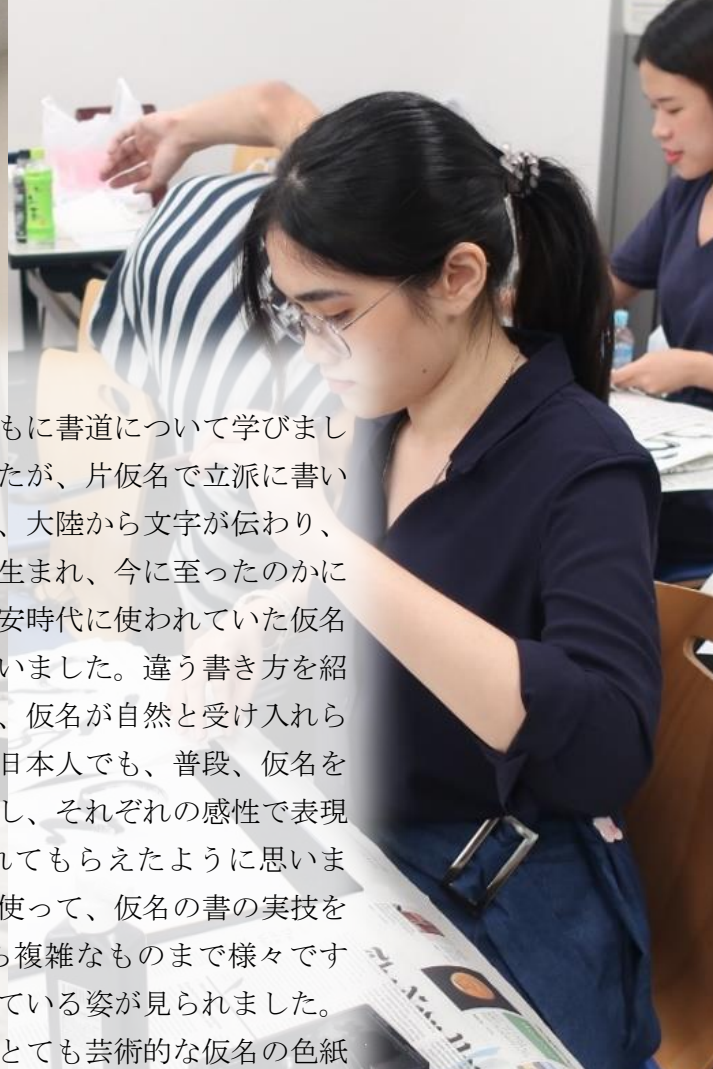


4.4 書道

科目名 Title		しよ どう 書 道		講師 Instructor	きた やま さと か 北 山 聡 佳 (Satoka Kitayama)
講義室 Classroom		国際交流会館 講義室 3			
〔授業の進め方 Content of the class〕					
回	が っ び (よう び)	じげん 時 間	じゅぎょうないよう 授 業 内 容	びこう 備 考	
1	8 月 9 日 (木)	1 限	「書道について」 文字や書道芸術の歴史について学ぶ	お 終 わり 次 第、 作 品 制 作 に 取 り か か っ ます	
2		2 限	「作品制作」 書道の作品を実際に制作する	よう ぐ よう ざ い 用 具 用 材 に つ い て も 簡 単 に 学 ぶ	
〔教科書 Textbook〕 必要な資料を適宜提示する					
〔その他の注意 Miscellaneous〕 墨などで汚れてもよい服装（エプロンなど）で参加する ウェットティッシュまたは濡れタオル（おしぼり）があることが望ましい					

1 限=8:45~10:15

2 限=10:30~12:00



本年も各国からの留学生の皆さんとともに書道について学びました。はじめに全員が名札を作成しましたが、片仮名で立派に書いてくれました。そして講義の導入では、大陸から文字が伝わり、そこからどのように日本独自の仮名が生まれ、今に至ったのかについてお話ししました。実践として、平安時代に使われていた仮名を、紙やホワイトボードに書いてもらいました。違う書き方を紹介すると、感心してくれる様子を見て、仮名が自然と受け入れられたようで嬉しく思いました。現代の日本人でも、普段、仮名を読み書きすることはありません。しかし、それぞれの感性で表現することで、昔の日本人の感覚に触れてもらえたように思います。その後、実際に書道の用具用材を使って、仮名の書の実技をしました。文字の形が簡素なものから複雑なものまで様々ですが、自由に造形を工夫して組み合わせている姿が見られました。皆さんの一生懸命な練習のおかげで、とても芸術的な仮名の色紙作品が完成しました。留学生の皆さんには、自信を持ってその作品を持ち帰り、文字について伝えてほしいと思います。最後になりましたが、この度多大なご指導をいただきました西島先生をはじめ諸先生方、並びに本学学生の皆様には、心より感謝申し上げます。

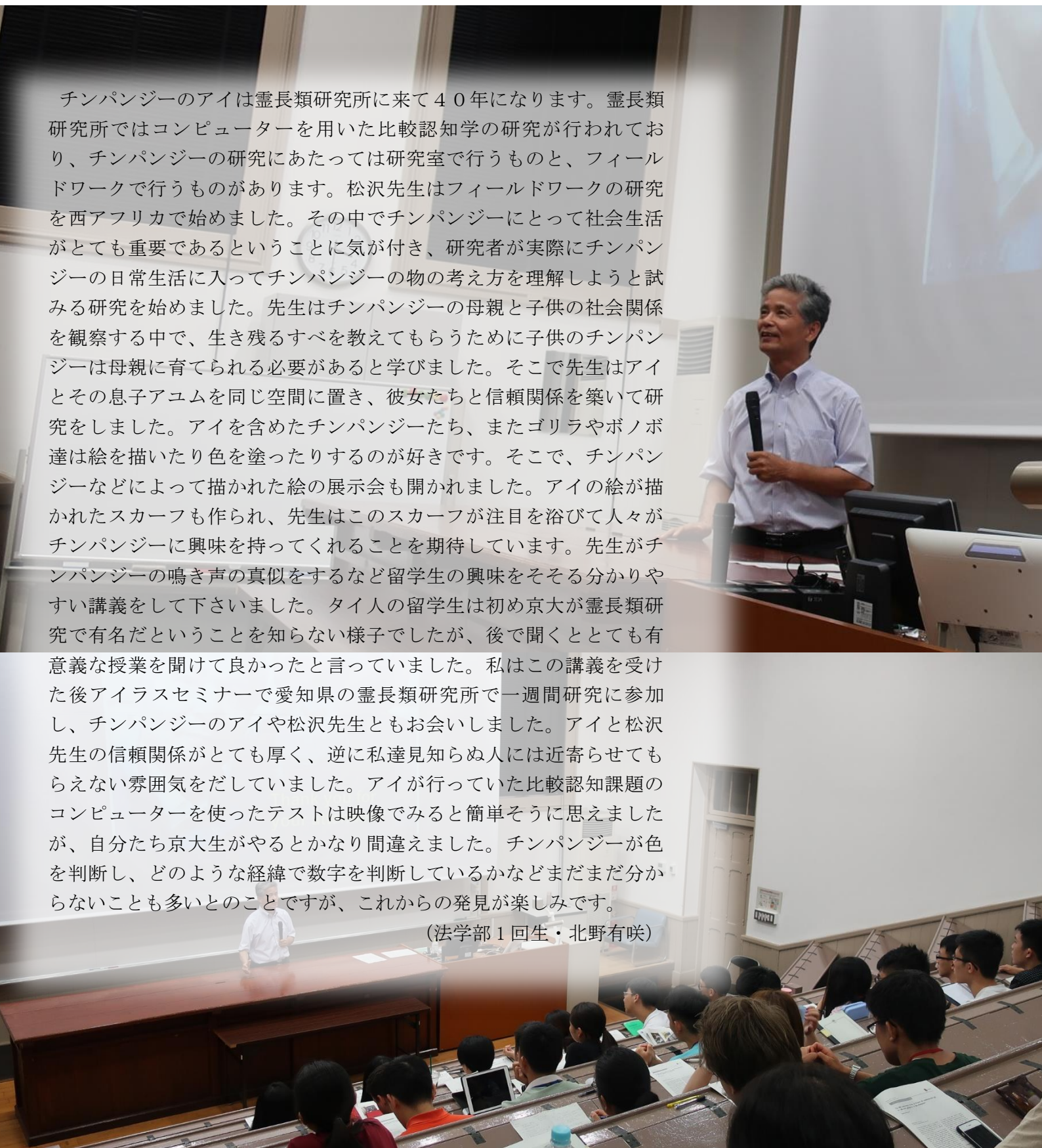
(北山聡佳)



4.5 科学講義 “Human Mind Viewed from the Study of Chimpanzees”

チンパンジーのアイは霊長類研究所に来て40年になります。霊長類研究所ではコンピューターを用いた比較認知学の研究が行われており、チンパンジーの研究にあたっては研究室で行うものと、フィールドワークで行うものがあります。松沢先生はフィールドワークの研究を西アフリカで始めました。その中でチンパンジーにとって社会生活がとても重要であるということに気が付き、研究者が実際にチンパンジーの日常生活に入ってチンパンジーの物の考え方を理解しようと試みる研究を始めました。先生はチンパンジーの母親と子供の社会関係を観察する中で、生き残るすべを教えてもらうために子供のチンパンジーは母親に育てられる必要があると学びました。そこで先生はアイとその息子アユムを同じ空間に置き、彼女たちと信頼関係を築いて研究をしました。アイを含めたチンパンジーたち、またゴリラやボノボ達は絵を描いたり色を塗ったりするのが好きです。そこで、チンパンジーなどによって描かれた絵の展示会も開かれました。アイの絵が描かれたスカーフも作られ、先生はこのスカーフが注目を浴びて人々がチンパンジーに興味を持ってくれることを期待しています。先生がチンパンジーの鳴き声の真似をするなど留学生の興味をそそる分かりやすい講義をして下さいました。タイ人の留学生は初め京大が霊長類研究で有名だということを知らない様子でしたが、後で聞くととても有意義な授業を聞いて良かったと言っていました。私はこの講義を受けた後アイラスセミナーで愛知県の霊長類研究所で一週間研究に参加し、チンパンジーのアイや松沢先生ともお会いしました。アイと松沢先生の信頼関係がとても厚く、逆に私達見知らぬ人には近寄らせてもらえない雰囲気をだしていました。アイが行っていた比較認知課題のコンピューターを使ったテストは映像でみると簡単そうに思えましたが、自分たち京大生がやるとかなり間違えました。チンパンジーが色を判断し、どのような経緯で数字を判断しているかなどまだまだ分からないことも多いとのことですが、これからの発見が楽しみです。

(法学部1回生・北野有咲)



4.6 科学講義 “Asian Advanced Agricultural Technologies (AAA Tech) for 9 Billion People’ s Food Production and Environmental Conservation”

音や画像といったバイオセンシング技術がもたらす農業や医療における貢献が今日益々重要視されています。世界では特にアジアやアフリカの人口が増加しており、食べ物が無くなるのが懸念されています。発展途上国は多くの化学物質を使い空気や水を汚しています。そこで食糧生産や環境汚染を解決する新たな農業技術が求められています。生産性を高めることと食料を貯蓄することが求められます。日本人が大切にしている、もったいない、という言葉覚えてください。アジアはコンバインを使った集約的農業で。日本のクボタのトラクターはよく使われています。タイでは皆食事を沢山残しますが日本人はプレートに少量なのでもったいなくありません。日本の機械は魚中にある虫をチェックしたり、同じ大きさ同じ色のトマトを識別するなど高性能です。プロセッシングスピードが優れており、ASEAN には日本の技術が必要です。教授がタイでは多くの食べ物を残すと言った時にタイ人の学生が嫌な顔をしていました。自分たちが非難されたと思ったのでしょう。しかしタイやその他のアジアの国では残るほどの食事をお客さんに出すことが礼儀とされている場合もあるようで、文化も関わっている問題なので難しいと思います。日本人も最近では写真のためにだけ注文して食事を残す人も多いですし、考えなければならないと思います。日本の技術は世界の環境に貢献出来る位高度なものですので、これから発展していく ASEAN 等の人たちに伝えていければいいと思います。そして日本がたどったような公害などの問題に苦しまないようにしてほしいです。

(法学部 1 回生・北野有咲)



4.7 人文学講義 “The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature”



日本の美や感受性についての具体的なお話がありました。てぬぐいとは日本の伝統的な体や顔を拭くためのタオルのようなものです。布を色で染めて作ります。絵の豊富さが魅力で草花を描いたもの等があります。美とは見る人が美しいと思ったイメージの事です。日本には四季があります。四季は日本の生活や農業、文化等に影響を与えてきました。俳句とは瞬間のイメージを写真のようにとらえたものです。俳句には季語を入れるという決まりがあり、最も重要な要素です。俳句が読まれた場面の主人公と言えます。例えば菜の春の季語である菜の花を使った俳句に、菜の花や月は東に日は西にというものがあります。花鳥風月とは天地自然の美しい景色のことで、日本人に昔から親しまれてきた言葉です。この言葉からも日本人が昔から自然を大切にしてきたことが分かります。山は日本人にとって重要です。頂上が天に近く、天に繋がっていると思われたからです。俳諧は滑稽味を帯びた和歌のことで400年前にできました。例えば松尾芭蕉の名月や北国日和定めなき、というものがあります。随筆とは見聞、経験感想等を気の向くままに記した文章のことです。和歌とは漢詩に対する日本の詩歌で、五七五を基調としています。月の名称には三日月満月望月十六夜の月望月等があります。普段考えることがないので、日本人の自分が聞いても難しい内容でした。日本人は説明のしにくい空気感を大切にするので外国人にそれを伝えるには苦勞すると思います。桜の初めのイメージでアンケートをとったら、一本で咲いていると思う人が多かったのが印象的でした。入学式に沿道にどっと咲いているイメージでした。留学生も桜に結構なじみがあるのだと思いました。もう二度と同じ桜は見られないということから桜にははかなさのイメージもあるということを知り、受験生時代に習った古文を思い出し、日本人が人生のはかなさを古来考えてきたことが想像出来ました。

(法学部1回生・北野有咲)

4.8 科学講義 “High Economic Growth and Minamata Disease:The fight for certificates officially acknowledging victims of methylmercury poisoning”

日本の経済発展の中でチッソ化学工場からメチル水銀を含んだ汚水が、水俣湾や不知火海に無処理のまま排出され、メチル水銀を食べた魚を地元の人が食べたことで水銀が人々の体内に入りました。30 年以上この有毒物質により動物や人の死亡が続きましたが、政府は何もしませんでした。水俣病患者の症状例として、感覚障害や視野狭窄、運動失調、言語失調といったものがあります。水俣病は当時、伝染病だと思われていたために、患者は隔離され、患者たちやその家族は、地域で差別を受けました。やっと政府は大学の研究者を水俣に派遣しました。その結果、チッソの化学工場からの排水には、環境にも人体にとっても有害なメチル水銀が含まれていたことが分かりました。その後、患者とチッソ、政府の間で裁判がおこなわれ、水俣病が公式発見されてから 12 年後の 1968 年に、政府は発病と工場排水の因果関係を認めましたが、いまだに解決していない問題も多くあります。講義の後、ベトナム人留学生達と話したのですが、皆水俣病についてよく知っていることに驚きました。日本に来る前に勉強している人もいれば、実際に水俣に行ったことのある人もいました。ベトナムは今経済発展が進んでいますが、その分環境汚染も問題になっていて、その改善に役立つ為に環境の勉強をしたいと言っていました。他の国の留学生たちも、水俣病患者の映像を見て色々感じる部分があったようで、とても真剣に講義を聞いているのが印象的でした。自分たち日本人もこのような事実を他の国の人に伝えられるようにもっと勉強しなければいけないと思いました。

(法学部 1 回・北野有咲)



4.9 人文学講義「学校教育に見る日本文化の諸相」



この講義では甲子園に挑戦する高校球児たちのドキュメンタリーを観ながら教授からの解説を受けた。まず、全国に数ある高校の中で本大会に出場できるのは僅か 50 校程度、また出場校の野球部には多くの優秀な部員がおり試合に出場できるのはその中の一部という厳しい現実が説明された。

この講義で一番印象に残ったのは、実力が及ばず試合に出場したことのない3年生がチームへの貢献が認められ、最後の一人としてベンチ入りした場面だ。試合に出場できなくても練習には人一倍熱心に取り組み、試合に出場する仲間のために献身的に尽くす姿に涙を流す留学生もいた。

講義の後は皆とても真剣な表情で感想文を書いており、団体競技における協調性の大切さを感じたと言う人が非常に多かったように思う。自分にとっても高校野球が日本でいかに注目されているか、一人がチームのために尽くすことがいかに美徳とされているか、改めて実感することが出来た良い機会であった。

(医学部1回生・吉川美佳子)

4.10 人文学講義「日本語のウチとソト」

ウチとはある範囲内を、ソトとはある範囲外を表す。たとえば、自分がある家に属しているとすると、その家や家族はウチ、その家に属する人以外はソトということになる。この講義は、日本語におけるウチとソトがさまざまな日本語表現に見られることに注目したものである。私にとって最も興味深かった内容のひとつは授受表現である。日本語では人に「あげる」という行為や、人から「もらう」という行為をするとき、その人と自分との関係性に応じて、前者には「差し上げる」、「あげる」、「やる」など、後者には「いただく」、「くれる」など多様な表現が存在する。私はこの講義を受けて初めて、これらの表現にはウチやソトという概念が関係しているということを実感するようになった。ある言語の母語話者は、その言語に潜む概念や構造を深く意識すること無く、その言語を操る。だからこそ、その言語に関する客観的な説明を受けることは、その人に発見をもたらす。私は日本語母語話者として日本語のことを改めて見つめる契機を与えてくれたこの講義を有益なものだと思う。

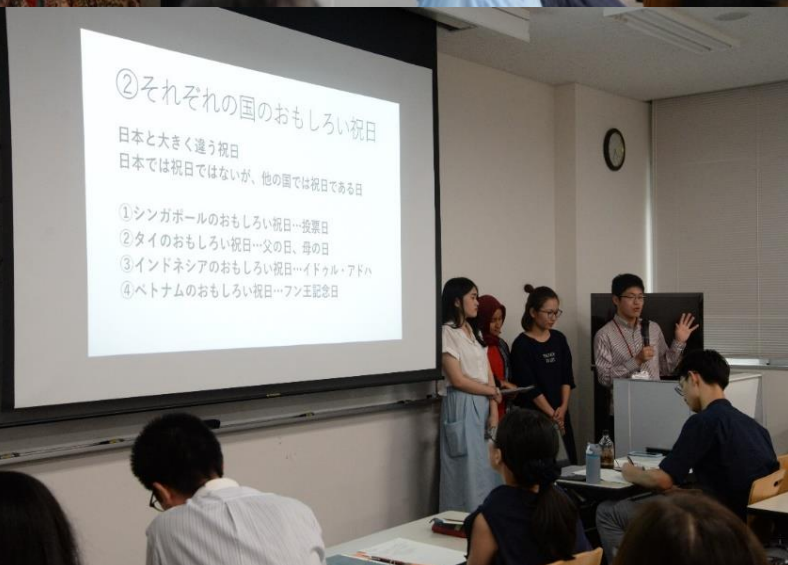
(法学部1回生・黒田航)



4.11 学外研修



4.12 共同発表



5 参加学生報告

2018 年度京都サマープログラム、一生忘れられない 2 週間

ハノイ国家大学外国語大学院

ダオ・ホアン・アイン

この度参加させていただいた 2018 京都サマープログラムは短い 2 週間ですが、色々な体験や交流ができ、とても楽しい時間でした。その機会を与えていただいたこと、心から感謝しております。

京都大学のサマープログラムは日本語だけでなく、京都府をはじめ日本のことをさらに学ぶのにとってもいい機会だと学部長先生が紹介してくれたので、申し込みました。日本に来るのは初めてではありませんでしたが、来る前に外国人である私にはやはり不安が多かったです。しかし、先生方とサポーターの方々のお陰で、この 2 週間は本当に楽しく過ごすことができました。

読解を中心した日本語の上級クラスでは、京都に関するエッセイ、京都を舞台にした小説、京都大学入試問題に挑戦して、京都及び日本の美しさを感じました。また、『学校教育にみる日本文化の諸相』、『水俣病』や『ウチとソト』などの京都大学の先生方の講義、そして、日本企業見学や滋賀県立大学見学などを通じて、日本人のおもてなし、日本の文化・社会についても深く理解することができました。元々日本のことが大好きな私は、これからももっともっと日本について調べたいと思います。

最後の発表会で、地理的にはとても近いのに未知のことがたくさんあるアセアン諸国について話し合ったり、お互いのことを共有したりすることができ、とても楽しくて勉強になりました。そして、日本人のサポーターの方々に案内してもらい、大阪や奈良にも行くことができたこと、授業が終わった後、たこ焼きパーティーを一緒にしたことなどは、いつまでも忘れられない思い出になっています。

日本語学を専攻にした大学院 1 年生である私は、日本人サポーターの方々と色々話すことができ、少しだけですが、日本語の特徴についても分かってきました。この 2 週間のサマープログラムで体験して身につけることができた日本語や日本文化を生かして、自分の研究を進めようと思っています。最後に、改めて京都大学の先生方、サポーターの方々、短い間ですが、色々お世話になり本当にありがとうございました。

京都サマースクールの感想

ハノイ国家大学外国語大学院

レ・ティ・トゥイ・ハン

ハノイ国家大学・外国語大学院 1 年生のレ・ハンと申します。京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU) が 2018 年 7 月 30 日から 8 月 11 月までアセアン学生のための多文化共学短期受入れ留学プログラムを行うことについて大学の先生から聞きました。京都は日本の昔の首都

で平安時代から江戸時代前期までは日本最大の都市であり、『千年の都』と呼ばれ長い歴史と豊かな文化に育まれた街だと世界に知られています。

大学院での専攻は日本語学ですので、このプログラムに参加すればもっと日本文化や日本語の知識が得られると思い申し込みました。たった2週間弱の間でしたが、京都大学でアセアンの学生と共に学び、みなさんと楽しく毎日日本語の授業や講義、見学などの様々な学習活動が出来て、とても幸せな時間が過ごせました。日本語の授業は日本語能力や学生自身の希望によって中級1、中級2と上級のクラスに分けられます。しかし、クラスで勉強してみても難しすぎると思ったら担当の先生と面談してクラスを変更することが出来ますよ。ですから次回から参加するみなさんも遠慮なく自分に一番適切なクラスを選んで楽しく勉強して下さいね。私が選んだ中級2のクラスでは、アニメで学ぶ日本語やサイレント映画の会話を作るという二つの内容があります。アニメとサイレント映画で日本文化や日本語で昔から使われている諺や言葉がすごく面白く、先生もゆっくり教えてくれたのでその意味を深く理解することができました。私は日本語の授業が一番好きで、いつも授業時間が経つのが早すぎると感じて、もっと勉強したい気持ちでした。

日本語授業の他に英語での講義では、世界で研究されている様々な問題、日本の学校教育に見る日本文化、または日本の歴史の中で起こった有名な事件で当時から現在までも日本人の人々に大きな影響を与え、二度と同じことが起こらないように世界人類に警告するための授業もありました。被害者の状態や普通の人と同じような生活したいという願望を見てとても感動しました。

7月末から8月中旬まで夏の一番暑い時期に先生方や京都大学の学生達が毎日私達を外で待って、授業や講義が終わったら昼・晩御飯に連れて行ってくれたり、京都のある有名なお寺や神社を回らせてもらいました。朝から午後まで勉強や講義があつてずっと教室の中にいたので、綺麗なお寺を歩き自然のいい空気を吸い込むことが出来て、運動にもなりました。私たちは最初の数日あまり歩けなくて疲れましたが、今はもう慣れてきたので体の調子が良くなり、毎日元気いっぱい学校へ歩いて行くことや勉強後の観光のことも楽しみに待っています。色々な課外活動で見学に行ったり、素麺やたこ焼きなど日本の伝統的な食べ物を作って食べたり、花見を見に連れて行ってもらったりして、いつの間にかアセアンの私達は京都大学の学生のみみんなにどんなことでも話せる親友になったと感じています。

もうすぐ2週間のコースが終わり、最後の日が近づいていると感じています。短い時間ですが日本及び京都に関する色々なことを学び、面白い体験も出来て、とても勉強になりました。しかしそれ以外にも、最初の日から今まで自分が感じてきた“優しさ”ということもとても大切だと思います。授業外活動の昼ごはんの時、私たちが涼しい食堂で食べられるよう席をゆずるため、暑い外のベンチに座っていた日本人の先生と学生達の姿がとても忘れられません。

帰国して日本語の授業で習ったことの中でいくつか面白い内容があつたので、大学院の修士論文の参考にできると思います。学生に日本語を教える時、日本語の授業で学んだ諺や文法の表現も頑張って使ってみたいです。京都サマープログラムは初めてから今年2018年までで四年目だと聞きました。2019年のみなさんも是非楽しんで下さい。

京都サマースクールの思い出

ベトナム国家大学人文社会科学大学
グエン・トゥ・リン

このプログラムを知る前から私は日本へとても行きたいと思っていました。日本の文化と雰囲気一度だけでも体験したかったからです。そこで東洋学部の先生から「京都大学サマープログラム」のことを聞いて、ぜひ参加したいと思いました。

日本のすてきなことをいろいろ体験できる機会をいただきました。大学生の私達にとって、このプログラムはとても有益な活動でした。すべての授業と講義はとてもおもしろくてビジネスライクな授業でした。日本語の授業はとてもおもしろくて気楽な感じで参加できました。英語の授業といろいろな見学もとても有益な体験でした。

さらに京都大学の先生のみなさんはとてもやさしく親切で熱心です。授業以外の時間の観光などでも、京大生とほかの留学生との交流がありとても楽しかったです。二週間だけですが、京都大学の先生と学生のサポーターのみなさんはとても優しく親切で、私達をいつでも助けてくれました。私は心からとても感謝しています。

京大生のみなさんはとてもしんせつでねっしんです。長谷川さん、深谷さん、松村さん、斉藤さん、新田さん、滝田さん、三木さん、吉川さん、白井さん、寺坂さん、奥野さん、栗山さん、宇野さん、若杉さん、田邊さん、北野さん、黒田さん、佐藤さん... みんないっぱい私のことを助けてくれて、本当に心からありがとうございました。それに私は東アジアの京大生サポーターの〇〇さんに強く惹かれてしまいました。

京都大学サマープログラムは二週間だけでしたが、とてもすてきで幸せな時間でした。このプログラムは私にとって日本語能力を向上させるチャンスでしたので、将来このプログラムで学んだことはぜったいに役に立つと強く信じています。ほんとうにありがとうございました。

私の感じた日本

ベトナム国家大学人文社会科学大学
ブ・フオン・タオ

私はブ・フオン・タオです。私はハノイ国家大学の人文社会科学大学の東洋学部3年生です。私は子供のころから、日本がとても好きでした。日本について考えると、着物や桜の歌が思いつきました。私は高校生の時からずっと、日本に行きたいと思っていました。そして、今回京都サマープログラムに参加しました。京都に来たのは私にとって初めてのことでした。残念ながら、台風の影響でベトナムからの飛行機が遅れてしまいました。その時は、いつ日本に到着できるのかも分からなくて、とても不安でした。日本で先生と京都大学の学生とアセアンのみんな一緒に過ごせることを楽しみに待っていたのに、と思っていました。

やっと1日遅れで日本に到着することができました。京都大学の学生が空港まで迎えに来てくれてとても安心でした。西島先生は私たちをたくさん助けてくれました。サポーターたちも熱心で、私たちを助けてくれました。私達が行きたい場所に夜遅くまで連れて行ってくれました。ありがとうございました。寛子さん、喬さんとみなさんありがとうございました。

先生とみなさんのおかげで日本について本当にたくさんのことを学ぶことができました。日本語も日本の文化や日本人の性格も以前よりもっと分かりました。私は本当に京都のお寺や神社が大好きです。たとえば、伏見稲荷大社は私の一番のお気に入りです。鳥居がとてもきれいでした。サポーターはとてもフレンドリーで忍耐強く、日本語だけでなく日本の文化も教えてくれました。サポーター達に感謝、先生に感謝します。この2週間、私たちを助けてくれました。日本語の講義で教えてくれた下橋美和先生にも感謝の気持ちを送りたいです。先生ありがとうございました。先生が私たちを教えるためにベトナムに来ることができればとてもいいと思います。

ベトナムに帰っても、2週間京都で先生方、学生とアセアンの友達と一緒に要られたことを忘れません。日本にまた戻って来られるように、日本語の勉強を頑張ります。どうもありがとうございました。

京都サマープログラムの感想

ベトナム国家大学人文社会科学大学
トリエウ・ダオ・クイン・アン

今年の夏休みは本当に楽しかったです。京大のサマープログラムに参加しました。このプログラムはほとんど参加費について自足しなければならなかったのですが、ちょっと不安もありましたが期待もたくさんありました。さらに、参加する前に、このプログラム期間を非常に短いものだと感じていました。それゆえ私が時間について意識したことは、授業内外での日本語練習、京大生の交流や文化体験、すべての生活場面においていつも頑張ることです。このプログラムのスケジュールはとてもすばらしいです。日本語の授業は、平日 9 時～12 時までとセミナーは 14 時～16 時までの午後。テーマのセミナーに関して主に文学、環境問題とかでした。テーマの中で、水俣病問題についての講義が一番印象的でした。後に“公害の原点”と呼ばれる「水俣病」が水俣市を襲ったのは 1950 年代に入ってから。実は、水俣病は終わらないと思います。水俣病のセミナーが聞けた後、今も私は、「人は人としてどう生きるべきか」を問い続けています。

私が受けた中級レベルの日本語の授業では、主に日常会話や日本人の人間関係のマナーや自然なコミュニケーションの方法といった内容について学びました。毎日だいたい6時間日本語を集中的に聞き続けたため、私たちはだんだん聞く力が向上していることを実感していました。さらに、日本文化の授業がたくさんありました。書道は面白い授業の一つだと思います。書道の授業の中で、“感謝”と書きました。京大の先生と京大のサポーターへ自分の気持ちを伝えなかったからです。親切なサポーターには本当に感謝しています。このプログラムのスケジュールに沿って、私たちはたくさん活動に参加しなければならないのですが、活動に参加したことは素晴らしい経験でした。京都を巡り、伏見稲荷、嵐山、琵琶湖、東大寺そして奈良公園を訪問しました。京大のプログラムを終え、Noi Bai 空港に再び降り立ったとき、以前この場にいた時からたった短い時間しか経っていないことが信じられない感覚でした。私にとって成長と自信になりました。このプログラムの授業から得られる言葉の量や文法の量は限られていますが、日本語を用いて積極的に発言することの自信になりました。これからも必ず日本語を

一生懸命勉強し研究し続けます。このプログラムに参加するにあたり大変お世話になりました、人文社会科学大学と京都大学の皆さんに改めて感謝いたします。一番素晴らしかったことは皆いつも助けてくれただけでなく、一生に楽しんだことです。この二週間は絶対に一生忘れません。京大の皆の親切は一生忘れません。

京都サマースクールの感想

インドネシア大学

アフディディア・セカル・サガ

3年前、インドネシア大学の日本学科で勉強を始めました。大学で日本語だけでなく、様々な日本文化や社会なども勉強しています。最初、日本について学ぶことがすごく難しいと思っていましたが、勉強してから、日本への興味がだんだん強くなっています。3年間日本語を勉強しているのですから、日本に行けないと残念だと思っていました。クラスで勉強だけではなく、直接的に日本の生活を経験したいと思っていました。その理由をきっかけに、京都サマープログラムに参加することにしました。

3年間日本語を勉強していますが、このプログラムでは日本語中級1のクラスを取ることにしました。私は忘れてしまった日本語文法についてもう一度思い出しました。下橋先生の教え方が分かりやすく、留学生にもゆっくり教えていました。他の講義から、日本についてもっと勉強できました。琵琶湖博物館、ナベル会社、滋賀県立大学などの見学できるのはすごくたのしかったです。それぞれの所では特別な発見があり、新しいことを勉強できました。

京大のサポーターたちが色々な面白く場所に案内してくれて、私は「ありがとう」しか言えませんでした。京大のサポーターたちとアセアンの留学生たちと送別会で贈り物を交換できることがとても嬉しかったです。他の国の言葉を学べ、たくさん写真を一緒に取り、美味しい食べ物と一緒に食べました。そしてもちろんみんなと会話を練習できることがとても楽しかったです。今まで私たちはSNSに介してまだ連絡しています。

このプログラムに参加できると、将来に役に立つことになると思っています。直接体験することで、日本の生活がどんなものかを学べます。日本について勉強している学生としての私にとって、このプログラムを通して、今日本語で話すときもっと自信を持つことになりました。このプログラムは日本について勉強している学生にとってとてもいいと思っています。このプログラムを後輩にお勧めします。

日本初経験

インドネシア大学

ユリウス・テディ

3年間日本について勉強している私が今日本そのものを体験できるのは嬉しくてたまりませんでした。最初に訪れた場所が京都だと分かった瞬間は、一生忘れられない思い出になるでしょう。私は、言語に興味があることがきっかけで、日本語を勉強し始めました。日本語から日本の文化や社会までも理解できるのはとても素晴らしいことだと思いました。それで、いつ

の間にか日本を直接体験してみたい気持ちが生まれました。それをきっかけにして、京都サマープログラムに参加することにしました。

京都サマープログラムに参加し、2週間でいろいろなことを学びました。日本語中級2のクラスを受けて、「サザエさん」というマンガを勉強して、日本語特有の表現やことわざをどんどんわかるようになりました。さらに、語学以外のさまざまな講義から、文化や農業などについて勉強できました。ナベル株式会社の企業訪問、琵琶湖博物館見学、滋賀県立大学訪問などから面白いことも体験できました。わからないことがいっぱいあっても、実際にいろいろなものを見て、体験できるのはすごくいいことだと思いました。

京都大学の大学生たちがサポートしてくれたりしたことも一生忘れられない思い出になります。一生懸命サポートしてくれる気持ちに対して、ただ「本当にありがとう」としか言えませんでした。さらに、迷惑をかけてばかりの私に一つの文句も言わないことにも感動しました。また、アセアンの留学生たちと時間を過ごしたりすることとても楽しかったです。彼らとの交流で会話の練習もできるし、いろいろな言語も学べるし、いろいろな国の文化も少し勉強できました。

このプログラムに参加できたことは、将来にとっても役に立つことになると思っています。私は今後、日本のいろいろなことについてもっと研究したいと思っていますが、このプログラムは最初の踏み台になりました。また日本に来るチャンスがあればここでの経験がきっと役に立つと思います。最後に東京サマープログラムに参加できて、とても嬉しくて、感謝しています。

感想文

インドネシア大学

カリッサ・アウドレヤナ・イルナンダ

私は小学生から日本について興味がありました。日本の漫画と日本のドラマを見る時いつも日本へ行きたいと思います。そのような理由でインドネシア大学の日本学科に入ることを決めました。大学では日本のことを真面目に勉強しました。日本の社会とか日本の歴史とか日本の文化を勉強しました。一番興味があるのは日本の文化です。京都は日本の文化の中心だと習いました。そのため京都サマープログラムのアナウンスがあったときは、すぐに参加しなければならなかったと思います。大学で日本語を話せるということと日本の文化を習いたいということが京都サマープログラムに参加した理由です。

二週間ぐらい京都サマープログラムに参加して、いろいろなことを勉強しました。7月29日に日本に到着しました。はじめはとても大変でした。ハラールのお店を売っているレストランが少ないからです。でも、皆さんからいつも手伝ってくれましたから安心しました。お祈りの時もいつも連れて行ってくれてとても嬉しかったです。7月30日授業が始まりました。最初のクラスは日本語のクラスでした。私は日本語中級1のクラスに入りました。中級1の先生は下橋美和先生です。下橋美和先生はとても優しい先生です。自分の大学で習ったことがたくさんありましたが、先生の説明でもっとわかるになりました。日本語の授業の他にいろいろな面白い授業もあります。例えば書道の授業や見学もあります。滋賀県立大学で先生と一緒にすいかを食べることはとても楽しかったです。授業以外では私達はいろいろな所に観光しました。

京都の有名な神社も行きました。京都の以外に周りの観光地にも行きました。嵐山、宇治そして大阪にも行きました。大阪で花火大会を見ることができた嬉しかったです。いつも京都大学生の皆さんが連れて行ってくれて心から感謝しています。

このプログラムに参加できるのはとても役に立つと思います。私は来年日本に留学つもりなのでこのプログラムはとても役に立つと思います。このプログラムのおかげにいろいろな国のいい友達をできました。先生と京都大学生の皆さんに心から感謝しています。本当にありがとうございました

素晴らしくて忘れられない二週間の留学の経験

インドネシア大学

プトリ・ファドヒラ・ウィラ・シャフィヤ

私は今インドネシア大学の4年生のプトリ・ファドヒラです。私は普段の生活の中で、日本語を話すチャンスがあまり多くなく、自分の会話力はまだまだ足りないと思っています。正直、もう4年生になったのに、日本語はとても難しく感じられ、今でもまだわからない言葉がたくさんあります。そうした日本語の困難を克服するために、京都大学サマープログラムに参加して、日本語をもっと勉強したいとおもいました。

今回の京都サマープログラムは私にとって初めての日本滞在の経験でした。京都サマープログラムでは、たくさんのASEANの留学生たちや日本人大学生たちに出会うことができました。しかし、文化や環境が違うので、自分の日本語会話力でコミュニケーションをとらなければなりません。はじめはとても難しそうだと思います。

京都にはいろいろな神社や、素晴らしい風景がたくさんあります。インドネシアと違って、日本ではどこでも人々は自転車に乗って移動し、家の中には小さなつぼ庭があって、無料WIFI（ワイファイ）もあります！

京都にはたった2週間の滞在でしたが、みなさんはとても優しく、たくさんたすけてくれました。とても幸せな気分です。最後に、このプログラムはとても役に立って、様々なことを学べると思います。自分の視野を広げ、新しいことに挑戦をするための良いチャンスになりました。これからも一所懸命頑張ります。

素晴らしくて忘れられない二週間の留学の経験

インドネシア大学

ファットマ・イルミ・アニンディタ・イスカンドル

京都に着いてこのプログラムが始まってからもう10日間が経ちました。実はこれが私の初めての日本滞在の経験です。ユリウスさん、カリッサさん、プットリさん、アヴィディアさんにとっても日本の初経験です。ただし、私たちはこのプログラムに参加する理由が一人一人でちょっと違います。私は日本思想と日本文化に興味をもち、大学で日本のことについてあらゆることを勉強し始めました。大学に入って、日本学科に勉強していくうちに、もっと日本思想や日本文化などを知りたい、実際に日本を自分の目で見てみたいと強く感じています。ですか

らこの留学のプログラムに参加することを決意しました。さらに、日本語を流暢に話せるように、毎日日本にいる間は、日本人やASEANの学生たちと日本語で話したいと思いました。私は本当に日本語を上達させたいと思っています。

二週にわたって、私は京都大学で貴重なことをたくさん学べました。私は下橋美和先生の日本語中級1のクラスを受けました。下橋美和先生は大変良くて優しくて面白い先生です。下橋美和先生は日本語の文法を大変上手く教えてくれました。説明が面白くてわかりやすかったです。日本語の授業では、私も京都大学の大学生たちと会話の練習ができ、わからないことがあったら、京都大学の大学生たちに手伝ってもらいました。その他にも英語での講義も様々あります。最も面白いと思った講義は松沢哲郎先生の講義です。先生の講義は深い感銘を私に与えました。先生の講義で、私は先生のチンパンジー研究を通じて人間の心や行動の進化的起源を勉強しました。その講義はけっして長くはなかったが、それにもかかわらず、私はその講義をすごく楽しみました。京都大学のキャンパスでそのいろいろな講義を受ける以外にも、私も株式会社ナベルを見学し、滋賀県立大学を見学し、琵琶湖博物館を見学しました。とても楽しくて忘れられない思い出になりました。このプログラムによって、私は他の国について知識や見方などを広げられました。

最後に、この二週間は私にとって非常に大切に忘れられない経験になりました。この経験は言葉だけでは言い表せないほどでした。お世話になった全ての方々にお礼の言葉を述べたいと思います。二週間、誠にありがとうございました。

感想文

シンガポール国立大学
トウ・ジアハン

今回は日本語のレベルを上げるために、京都サマープログラムに参加しました。日本語の授業と毎日の日常会話のおかげで、日本語に能力が上がりつつあると実感しています。浦木先生の授業は面白くて、楽しかったです。サザエさんというアニメを通じて、会話を聞き取るようにしながら、先生はたくさん新しい単語やことわざを説明してくださいました。それに、先生は日本語の歴史や方言の特徴など説明して、言語学を学んでいる私の興味をそそりました。

英語の講義の内容よりむしろ、日本人が日本についてどのようなことを考えているのかということが面白かったと思います。特に、水俣病についての講義からは、日本が環境を今気にしている理由がわかりました。講義は日本の歴史、政治、環境が含まれていて、本当に有意な講義だと思いました。私はドキュメンタリーにも感動しました。このプログラムは、学生との交流だけではなく、NABEL 会社の社長や京都市長などと会えて、質問をすることもできて、本当に光栄でした。京都だけではなく、宇治、大阪、奈良、琵琶湖に連れていってもらい、日本の様々な魅力を見ることができ、色々勉強になり、感謝しています。

プログラムの日程の他は、色々な優しい人に合えてよかったです。同じような専門の学生と一緒に暮らして、話し合いやすく、楽しかったです。そして、深谷さんと松村さんをはじめ、日本人のサポーターさん達の優しさをよく感じました。果物を用意したり、パーティーをしたりしてくれました。もちろん、担当の西島先生が一日目には空港まで迎えにいらっしゃって、毎日最後まで見守ってくれました。本当に大変お世話になりました。

このプログラムは日本研究の専門と繋がっているのみならず、目指している通訳者の仕事にも役に立つはずです。そして、京都大学の自由な雰囲気にも印象付けられて、今京都大学で修士を取ろうと思っています。今回は京都大学のサマープログラムに参加して、本当に良かったです。帰ってから、必ず後輩にこのプログラムのことを伝えます。

京都大学のサマープログラム2018

シンガポール国立大学

ショーン・タン

今回は初めての京都大学サマープログラムに参加しました。このプログラムはとても面白くて楽しかったです。最初、このサマープログラムに参加する目的は日本語を上手にしたいということでした。実際に、日本人大学生と先生と一緒に話したり、食事をしたり、観光をしたり、少しずつ日本の文化を理解できるようになりました。

先ず、日本語の授業の話をします。日本語の授業は、三つの重点（聞く、読む、話す）ごとにクラス分けするという点はとてもいいと思います。私は、日本語の文法と会話には弱いです。それで、中級一に参加して、会話を練習したことはやくに立ちました。シンガポールの日本語学校は大体試験向けの授業をしていますが、会話を勉強する機会はなかなかないです。しかし、私は、日常会話は重要だと思います。なので、サマープログラムの日本語授業はとても良かったと思います。

次に、英語の講義の話をします。特に、チンパンジーの授業はとても目新しいと思いました。それ以外の授業の内容（例えば、水俣病や日本文学など）は自分の大学で少し勉強したことがあります。他の学生さん（東アジア+ドイツプログラム以外）は同じ日本語と日本研究の学生ですから、多分もうこの授業の内容を少し知っているだと思います。逆に、その授業の内容にしたがって、さらに深く進むことがいいのではないのでしょうか？

それでは、次に琵琶湖の見学を話します。琵琶湖に行くのは初めてでしたが、自分の専門分野と近く勉強になりました。琵琶湖の色々な生物研究と環境保全をたくさん学びました。そして、研究のためにもう一つのアクティビティをお勧めしたいです。それはフィールドワークプレゼンテーションです。例えば、学生はそれぞれ自分のテーマを設定し、そしてフィールド発見したことをプレゼンテーションするということです。

最後に、京大の学生との交流について話します。この短い間に、京大の学生と一緒に他の国の文化などについて交流しました。色々な国を比較して、地域や人々による差異を知る事が出来ました。このプログラムのおかげで、日本についてもっとわかるようになり、次の大学の3年間に必ず役に立つと思います。

京都サマープログラムの感想文

シンガポール国立大学

ジャン・ユエ

今年7月30日～8月10日まで、日本文化を勉強するために、京都大学の多文化短期留学プログラムに参加して楽しむことができました。この2週間、京都大学の学生たちと共に学び、日本語の授業、講義、見学など様々な活動をでき、とても嬉しかったです。

日本語授業は言語能力によって、三つのクラスに分けられます。私は勝手に上級のクラスを選んで、凄く難しかったと思いました。よく考えれば、会話と聴聞が凄く苦手なので、恐らく中級のほうが適切かもしれないと今もそう思います。しかし、上級のクラスを選んだ理由は上級的能力を持っているかどうか確認するというわけではなく、むしろ京都に舞台した文学作品と随筆を読みたかったからです。子供の時、初めて読んだ日本の文学作品は川端康成の「雪国」でした。具体的な人物と物語は今はっきり覚えていないですが、白方先生の授業でこの小説の冒頭「國境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜のそこが白くなった。」を読んで、心にすぐ映像が浮かび上がってきました。そんな素晴らしい描写と繊細な情感が、何だか美かったです。

もし川端康成の文学作品は私の日本語勉強の起点とするならば、新選組など幕末に関する歴史的な話はその階段として、日本文化について興味を深めています。新選組と京都はいろんな絆があると思っています。千年古都の面影を万分の一しかわからないにも関わらず、ただ町で歩いて、現代の街路と歴史の映像、京としての昔と京都の今とを目の前にどんどん重ね掛けています。点という形式で存在する、今まで読んだり見たりした知識は、この町で線で結ばれ、繋がっています。

その上、京大の学生たちの努力、思いやりと優しさはすべて見えました。素麺とたこ焼きパーティーなど、吉田寮の見学と観光などいろんな課外活動で、京大の学生生活と趣味など聞いたり、他の国の学生生活を聞いたりして交流を深めました。2週間がとても早く過ぎたと思っています。時間が少なかったですが、私にとっては勉強になりました。これから、もっと日本語と日本文化のニュアンスを理解したいです。貴重な経験を頂き、心から深く感謝申し上げます。このたび、大変お忙しい中、京都大学の先生と学生たちは、お世話になりました。本当にありがとうございました。

感想文

チュラーロンコーン大学
タナンチャノック・ピブーン

2018 年の夏休み、私は京都大学のサマープログラムに参加させていただきました。大学の日本語学科の先生が日本語を専攻している文学部の一年生の中から 6 人を選んで、2 年生になる前に京都大学に 2 週間留学することになりました。私はこの機会が日本についてもっと理解できるようになることや留学の経験や旅行をするためのとてもいいチャンスだと思い、このプログラムを申し込みました。そういう訳で、私はタイのチュラーロンコーン大学から来た留学生としてこのサマープログラムの参加者の一人になりました。

私が受けた日本語の授業は中級 2 のクラスでした。このクラスの担当者の浦木先生はとても素敵な方でした。先生は日本文学や映画のことにとっても詳しく、教え方も学生が分かりやすいようにしてくれたので、授業は毎日楽しくて実用的でした。私の授業で習った一番好きな、日常的によく使うようになった言葉は「安請け合い」でした。英語の講義は私の知らないことばかりで、ときどき何も分からなくて、眠くなる時もありました。私に一番記憶に残ったテーマは「水俣病」でした。今まで、この病気のこと聞いたこともなかったです。しかし、その講義を受けてドキュメンタリー見た後は水俣病の患者達の苦しみを感じて、少し泣きました。

見学は色々な所へ行きました。一つ目は京都市役所でした。内容はなかなか覚えられなかったですが、京都市長さんは元気で優しくそうな方でした。二つ目は株式会社ナベルでした。正直に言うと、私には農業の知識が全くないので、卵のパッキングする方法や機械のことなどがよく分かりません。しかし、見たことのない技術革新が色々あって、かなり珍しかったです。三つ目は滋賀県の琵琶湖博物館、滋賀県立大学、そして彦根城でした。一日中で色々な所へ回って結構疲れました。しかし、自然が豊かだし、天気もいつもよりよかったので、気持ちよくて楽しかったです。私達タイ人は他の国の参加者にタイの言葉たくさん教えました。相手がタイ語に興味を持ってくれて嬉しかったです。それに、日本人のサポーターさん達やアセアンの皆さんと一緒に勉強したり、旅行したり、遊んだりして、新しい知識がたくさんありました。このサマープログラムのおかげで色々な国の人とお互いに交流することができて、私の小さな世界が少しずつ広がっていた感じがしました。

このプログラムは私に日本の文化や社会についての教訓と日本に生活する経験をくれました。私は将来日タイの通訳か翻訳者になりたいと思っているので、ここまでの教わったことが私にとって全部とても役に立ちます。この機会のおかげで日本語だけではなく、日本とアセアンのことを色々教わってきて、とてもいい勉強になりました。京都サマープログラムに参加することができて良かったです。

感想文

チュラーロンコーン大学
リーラワットワッタナー・ナットワラー

私はチュラーロンコーン大学の文学部で日本語を専攻しているので、ずっと日本に留学したいと思っていました。日本人の友達を作ったり、たくさん話したりしたかったのですが、機会

があまりありませんでした。その時、先生がちょうど留学生に選んでくださって、このプログラムに参加することになりました。

実は、日本は初めてではないのですが、今回は前回と違って、色々やったことがないことを体験しました。例えば、書道、たこ焼き作り、会社見学など。

日本語の授業は中級 2 のクラスを受けました。最初は上手くいくかどうかわからなくて心配しました。しかし、勉強を続けることで、大変良い勉強になりました。マンガと映画から勉強することができたので、自然な日本語会話が理解できるようになりました。単語が結構難しかったですが、浦木先生は優しく教えてくださったので、分かりやすかったです。

講義のテーマはなかなか面白かったです。私が一番興味を引いたのは「High Economic Growth and Minamata Disease」の講義です。水俣病についての知識が全然なかったですが、先生が一生懸命教えてくださったので、先生の伝えたいことが大体わかってきて、とても感動しました。それに、「The Aesthetic and Sensitivities of the Japanese Literature」は興味深かったです。それを勉強したら、日本の文化や日本人の考え方をもっとわかるようになった感じがしました。一方、このプログラムのお陰で、色々な国から来た友達がたくさんできました。皆さんと新しい情報交換をして、国々の不思議な文化を勉強しました。参加する前に新しい友達ができるかどうかわからなくて、すごく緊張していて、不安でした。でも来てみたら、その不安な気持ちがだんだんなくなってきました。皆さんがとても明るくて、温かく迎えてくれたので、このプログラムに参加してよかったと思いました。

このプログラムに参加するのはきっと将来の職業に役立つと思います。なぜかという、将来は日本語の通訳になりたいと思っているので、日本語がペラペラ話せる必要があります。それで、日本人の友達と遊ぶことや話すことは日本語の会話の練習機会だと思います。

京都サマープログラム

チューラーロンコーン大学
マリニー・ラクササクンウォン

最初はタイのマッタナー先生に「京都サマープログラム」に参加して見ないかと聞かれました。初めて聞いた時は京都へ行ったことはないから絶対行きたいと思って応募しました。日本は寒い印象があって、タイよりは暑くないんじゃないかと思っていましたが、実際にきてみたらタイより暑かったので、少しかタイが恋しかったです。

最初旅館に着いた日は綺麗なはっきりとした虹が見えて、これからたくさんいいことがあるように思えました。サポーターの齋藤さんと松村さんが旅館で待っていて、結構話しかけてくれて、人と会話をするのが苦手な私でもあまり気まずくならなかったです。京都府の市役所の市長さんは非常に面白い人でした。お酒好きの優しそうなおじさんでした。まるで家族を優しく見守ってくれるおじいちゃんみたいでした。

日本語の授業は中級 2 のクラスで浦木 貴和先生に教えてもらいました。最初は『サザエさん』を通じて日本語や日本文化を学びました。先生の説明は分かりやすくサザエさんのアニメも結構見やすかったです。あとはサイレント映画の授業も日本の 30 年代の暮らし、言葉や当時の映画の技術を勉強できてよかったです。先生は言語学の先生ですが、映画関係の授業を先生から受けてみたいです。一方講義の方は専門的なものが多いのであまり良くわからない講義もあ

りましたが、サルが勉強してとても記憶力がいいという授業が印象的でした。後はサポーターの京大案内も学生が自分の大学をどう思っているか、京大はどういう大学かを知りました。あとは琵琶湖の見学は楽しかったですが、彦根城の見学する時間が少なかったのと琵琶湖の花火が見られなかったのも残念かったです。

京都に来てから寂しいとか帰りたいとか思ったことはありません。タイお友達が同級生だったのもありますが、日本人のサポーターさんたちが一緒にあっちこっち回ってわがままを聞いてくれてとてもありがたいです。将来もしタイに日本人留学生でも外国人留学生が来たらたくさん喋ったり、いろんなものを食べに行ったり、遊んだりして、いい思い出をたくさん作りたいです。

京都大学での夏の思い出

チューラーロンコーン大学
シャーマー・ルアムウォン

7月29日から8月10日まで、私は京都大学のサマープログラムに参加しました。このプログラムに参加する前はとても楽しみにしていました。なぜなら、このような日本で行うプログラムに参加するのは初めてだからです。

このプログラムについて知っていたのは、チューラーロンコーン大学の日本語専攻の先生が教えてくれたからです。私は旅行のために日本に来たことがありましたが、勉強のために来たことはありません。私はこのプログラムがとてもいい機会だと思って、参加することにしました。また、日本人やASEANの人と友達になってみたいのももう一つの理由です。日本の大学生はどのように生活するかも知りたかったです。

最初の日台風のために、飛行機が遅れてしまいました。京都大学の先生に会う時間が変わることになるので、ちょっと不安になりました。でも、結局、空港で問題なく先生に会えました。その日に、日本人のサポーターさんとASEANのみなさんにはじめて会いました。お互いに自己紹介をして、楽しかったです。2日目はサマープログラムのアクティビティの始まりでした。ほとんど毎日、日本語の授業がありました。私が参加していた授業は中級1です。その授業は会話の授業なので、日本を使って、ASEANのみなさんやサポーターさんと話ができて、とても嬉しかったです。日本語のクラスの他に、講義と見学がありました。講義の内容は私にとって難しかったです。聞いたことがないことがたくさんあるので、興味深いだと思いました。見学はとても楽しかったです。京都の他にも、滋賀県や、大阪府まで行きました。一番好きな場所は滋賀県です。琵琶湖はとても綺麗で、博物館はとても面白かったからです。もう一つの理由はみんなで一緒に行ったからです。

このプログラムで初めて日本人の友達ことができました。私は人見知りなところがあるので、みなさんと仲良くなれるかどうかとても心配でした。でも、サポーターさんがいつも私と話してくれて、行きたいことに連れて行ってくれて、笑ってくれるので、最後は仲良くなれたと思いました。ASEANの人と友達になれるのも初めてです。私は前から同じASEANの人と友達になれたらどういう感じだろうと思っているので、このプログラムに参加できてよかったです。このプログラムのおかげで、私は日本語を話す勇気をもらいました。私は日本語を使ってタイ

にいる日本人の先生としか話していまませんでした。それで、実際に日本語で日本にいる日本人と話すのが不安でした。しかし、サマープログラムのみなさんは私の日本語をわかってくれて、今はもっと自信を持って日本語を話そうと思います。京都大学のサマープログラムに参加ができて、本当に嬉しかったです。

虹

チューラーロンコーン大学
ナラウィット・エマヌサクル

京都サマープログラムが終わりましたが、初日に見た虹は僕の記憶に残り、まるで昨日の事のように思い出します。この京都サマープログラムを通して短期間でたくさんの日本人のサポーター達やアセアンの人たちとの間に友情が芽生えました。はじめに、このプログラムに参加したきっかけはもっと日本語が話せるようになりたいと思ったからです。タイで日本語を勉強している時、教室の外で日本語を使う機会が少ないことから、今の自分はどのくらい日本語ができるのかわかりませんでした。日本に行けば、毎日日本語を使わなければならない状況になるので、他人との会話が苦手な僕でもたくさん日本語が練習できると思っていました。ところが、日本に来ていろいろな人に出会って、その考えはだんだん変わり始めました。

僕は人見知りで、自分から他人に話しかけることが苦手です。いつも緊張して、自己紹介をする時もうまくできませんでした。でも、アセアンの人達と日本人のサポーター達は優しく僕に話しかけてくれたので、いろんな人とだんだん仲良くなり、友達になれました。やがて、僕は今回のプログラムで日本語を練習したいだけではなく、外国人の友達を作りたいと思うようになりました。次に思い出すのは、白方先生の授業の事です。

京都サマープログラムの午前中は日本語の授業を受けました。最初は中級2に参加しようと思いましたが、僕は何となく上級クラスに参加し、5日間ぐらい勉強していました。上級クラスの授業内容が面白くて、初めて知る事や知らない単語がたくさんあり、色々な事を発見しました。分からないことがあっても、白方先生がゆっくり丁寧に説明してくれました。この授業では日本語を学ぶ以外にもほかの国の文化や社会のことなどもクラス内で話し合えてすごく面白かったです。アセアンの人が3人、日本人のサポーターが2人、そして白方先生の計6人の小さなクラスでした。少し寂しいと思いましたが、白方先生とクラスの皆さんのお陰で楽しく過ごすことができ、この時間はとてもいい思い出になりました。

午後の講義でもたくさんの先生が自分の研究について楽しく教えてくれました。特に、水俣病についての講義はとても感動しました。ドキュメンタリーを見た後、僕はこれ以上環境問題を見過ごすことは出来ないと気づきました。水俣病の患者たちはどんな環境でも諦めないで、頑張っている姿を見た瞬間、涙が溢れてきてその人たちを応援したいと思いました。京都サマープログラムは教室で勉強するだけではなく、いろいろな所へ見学もしました。NABEL株式会社や、琵琶湖博物館や、奈良県など見学に行きました。どの場所もたくさん勉強になりました。

楽しいこと、つまらないこと、嬉しいこと、色々なことがありました。母語ではない言語を通じて人々と話さないといけないので、通じない時も、自分が言いたいことが上手く相手に伝わらない時もありました。自分の日本語のレベルや、欠点などを知り、いい勉強になりました。

日本語は魅力的な言語で、知らないことがまだたくさんあって、これからも一生懸命頑張ってもっと上手くなるようにしたいと思います。

ここで芽生えた友情はまるで虹のようです。虹は雨が降った後に出ますが、時々色が薄すぎてよく見えない時もあります。また、虹は高い空にあるので、たとえ虹が出たとしても気づいてもらえないこともあります。ですが、徐々に色が濃くなって行って最後にはっきり見えるようになります。たったの 2 週間という短い時間でしたが、アセアンの人達と日本人のサポーター達と共に色んな事を経験しました。観光したり、食事をしたり、京都を満喫しました。毎日授業が終わった後、僕が行きたいところや、食べたいものがある場所に連れて行ってくれました。その他にも、一緒に素麺パーティーとたこ焼きパーティーに参加できて、とても楽しかったです。気づかないうちにアセアンの人たち、日本人のサポーターたちとの間の絆がだんだん生まれてきて、最初は全く知らなかった人達が今では友達と呼べる存在になりました。今回のプログラムで皆さんと出会えて本当よかったと心の底から思い、感謝しています。ここで出会った皆さんとの友情は何よりも美しい物だと思います。この 2 週間の出来事はきっと一生忘れられないでしょう・・・

2018 京都サマープログラム

チューラーロンコーン大学
ナッター・ピクンサワット

夏休み前、この「京都サマープログラム」のことは参加者を募集していることをタイのマッターナー先生に聞きました。初めて聞いた時は、この機会が大変勉強になると思いました。チューラーロンコーン大学文学部で日本語を勉強している私は、絶対参加したいと思って、このサマープログラムに応募することに決めました。

初日、日本に到着した時は飛行機の中で全然眠れなかったのですごく疲れました。でもこの日は、旅館からきれいな虹が見えて、虹が出てくると幸せな気分になる私は、これから 14 日間はうまくはずだと思うようになりました。日本語の授業は最初、中級 1 のクラスに出ていましたが、授業に受けた後、中級 2 のクラスに移りました。なぜかという、中級 1 は簡単すぎるというわけではないが、そういう教え方はタイで習ったことがあるので、新しいことに挑戦してみたいと思ったからです。中級 2 のクラスでは浦木貴和先生に教わりました。最初は「サザエさん」というアニメを使って日本語や日本文化を学びました。日本のことは、マンガかアニメで学んだのは初めてだし先生の説明も分かりやすいし、毎回楽しんで勉強を続けることができました。あとはサイレント映画についても教えてもらいました。日本人は昔、どう暮らしていたか、話す時にどんな表現を使っていたか、その時の映画がどういうふうにつくられていたかを勉強できて嬉しかったです。浦木先生は言語学の先生ですが映画のことを詳しく説明してくださって感動しました。

一方、講義はテーマについて難しい内容が多いので、あまり分からない講義もありましたが、私にとっていちばん思い出に残っている講義は「High Economic Growth and Minamata Disease」の講義です。水俣病についての知識が全然なかったので、最初はあまり分からなかったが、先生がゆっくり教えてくださったので、先生の伝えたいことが分かってきて、もっと知りたくなった。あとは、サポーターの皆さんが最初日からいっぱい笑顔で挨拶してくだ

さって、サポーターさんと留学生たちが、人と会話をするのが苦手な私に話しかけてくれて、とても嬉しかった。

残念なことに、琵琶湖の見学は楽しかったが、彦根城の見学する時間が少なかったため、中には入れなかったです。また、花火が少ししか見られなかったので残念でした。あっという間の 14 日間、皆さんと一緒に楽しい時間を過ごして、とても楽しかったです。私はこの 14 日間の事や皆さんからのお世話を忘れずに、これから一生懸命日本語を頑張って勉強しようと思っている。この度、日本に来たのは本当にいい経験だと思う。私は帰国したら、友達に日本の文化の一部を体験、また学べた事を伝えて、日本とタイの交流のかけはしになりたいと強く思いました。

多文化共学短期〔受入〕留学プログラム 2018 年度実施報告書

平成 31 (2019) 年 3 月発行

編集・発行

京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)

京都大学国際高等教育院 (ILAS)

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

電話 (075) 753-5678

印刷・製本 株式会社 あおぞら印刷

電話 (075) 813-3350